

文化庁委託
日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業

CINGA 日本語学習支援者に対する
研修カリキュラム開発事業
報告書

実施期間：2018年7月3日～2020年3月19日

特定非営利活動法人 国際活動市民中心

はじめに

この報告書は、特定非営利活動法人国際活動市民中心〔通称 CINGA (シンガ)〕が実施した「日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業」の取組をまとめたものです。この事業は文化庁日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業の一つで、9 区分のうち、唯一、日本語教師ではなく日本語学習支援者を対象としています。

「日本語学習支援者」とは、「日本語の学習を支援する者」である、と誰もが想像します。しかし、日本語学習を目的に来日したわけではない多くの「生活者としての外国人」を対象とすると、日本語の学習を支援しようと、その点にだけ注目すると日本語学習支援はうまくいかない、というパラドックスに行き当たります。何をめざして日本語学習支援をするのか、どのような行為が日本語学習支援に当たるのか、目的や方法を考え始めると、多文化共生、文化理解、地域づくりといった視点が欠かせないことに気づきます。

事業を始めた 2018 年からの 2 年間に、日本語教育をめぐって歴史的な出来事が続きました。特に、「日本語教育の推進に関する法律」の施行に伴い、日本語教育や担い手育成の研修に関心を持つ自治体の数は急激に増えました。公的な日本語教育を行う場の整備とともに、「地域日本語教室」の存在がますます重要になっています。団体に属さなくても、外国人と出会い、助け助けられる関係は、生活場面でも職場でも増え続けるでしょう。研修カリキュラム開発事業は、文化審議会国語分科会の報告書¹に示された「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」、および「日本語学習支援者研修における教育内容」に依っています。CINGA は、その事業要件を満たしつつ、多文化共生や外国人支援の取組の長年の知見を活かして、要件の枠を超えた研修カリキュラムづくりをめざしました。この報告書が、担い手の育成を図る自治体や企業等のお役に立つことを願っています。

本事業の成果物は、この「報告書」および別冊の「教材」です。報告書には、開発、実施、評価の各プロセスを時系列で掲載しました。事業の流れと研修の流れの双方を、研修をつくる自治体担当者やコーディネーターの皆様へ設計の枠組みとしてご活用いただければ幸いです。

2020 年 3 月

特定非営利活動法人国際活動市民中心

¹ 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」

目次

はじめに.....	2
目次.....	3
第1章 事業の概要	6
1. 事業目的.....	7
2. 事業背景.....	7
2-1 地域日本語教育の成果と課題.....	7
2-2 事業実施団体のリソース.....	7
3. 事業内容.....	8
3-1 教育課程の検討.....	8
3-2 教材の検討・開発.....	8
3-3 研修の実施.....	8
3-4 実践ふりかえり支援.....	9
3-5 研修の検証と事業評価.....	9
4. 事業実施体制.....	9
5. 事業の流れ.....	9
2018年度（1年目）.....	10
2019年度（2年目）.....	11
第2章 2018年度（1年目）	12
1. 教育課程の検討（2018）.....	13
1-1 調査.....	13
1-2 委員会.....	19
(1) 日本語学習支援者の役割についての検討.....	19
(2) 実施体制理想図の検討.....	20
(3) 研修キーワードについての考え方の整理.....	22
(4) 多文化共生のための日本語教室の機能の確認.....	23
(5) 研修の目標設定.....	23
(6) 教育内容の関係と重み付けの検討.....	23
(7) 研修カリキュラムの作成.....	24
(8) 研修方法の検討.....	27
2. 教材の検討・開発（2018）.....	27
3. 研修実施（2018）.....	27
3-1 研修実施場所.....	27
3-2 地域日本語教室の実施状況.....	28
3-3 研修実施の背景.....	28
3-4 実施期間.....	28
3-5 参加者数.....	28
3-6 研修の目的.....	28

3-7 研修の方法.....	28
3-8 e-ラーニング.....	28
3-9 実施内容.....	30
4. 実践ふりかえり支援 (2018)	31
4-1 実施場所.....	31
4-2 実施日.....	31
4-3 内容.....	31
4-4 取組実施後の学習支援者ふりかえりコメント.....	31
4-5 成果と課題.....	31
5. 研修評価 (2018)	32
5-1 修了者数と参加者層.....	32
5-2 研修各回参加者ふりかえり (ふりかえり、キーワード、宿題)	32
5-3 研修各回自治体担当者を含む研修実施者ふりかえり.....	34
5-4 e-ラーニング実施結果.....	35
5-5 参加者定量評価とふりかえり分析.....	36
5-6 研修全体についての参加者コメントとコメント分析.....	39
5-7 研修終了時アンケート.....	43
5-8 各回の成果と課題.....	46
5-9 自治体職員コメント.....	47
5-10 研修全体に関する外部事業評価委員からのコメント.....	48
5-11 研修全体に関する内部委員からのコメントまとめ.....	49
第3章 2019年度 (2年目).....	50
6. 教育課程の検討 (2019)	51
7. 教材の検討・開発 (2019)	52
7-1 教材1 研修の枠組みを示した教材.....	52
7-2 教材2 研修使用教材の例.....	52
8. 研修の実施 (2019)	55
8-1 研修実施場所.....	55
8-2 地域日本語教室の実施状況.....	55
8-3 研修実施の背景.....	55
8-4 実施期間.....	55
8-5 受講人数.....	55
8-6 研修の目的.....	55
8-7 研修の方法.....	55
8-8 e-ラーニング.....	55
8-9 実施内容.....	56
9. 実践ふりかえり支援 (2019)	57
9-1 実施場所.....	57
9-2 実施日.....	57
9-3 参加者.....	57
9-4 内容.....	57
10. 研修評価 (2019)	57

10-1 修了者数と参加者層.....	57
10-2 研修各回参加者ふりかえり（ふりかえり、キーワード、宿題）.....	58
10-3 研修各回自治体担当者を含む研修ふりかえり.....	61
10-4 e-ラーニング実施結果.....	61
10-5 参加者定量評価とふりかえり分析.....	62
10-6 研修全体についての参加者コメントとコメント分析.....	64
10-7 研修終了時アンケート.....	66
10-8 研修担当講師による担当回に対する評価.....	67
10-9 研修全体についての外部事業評価委員からのコメントまとめ.....	69
10-10 研修全体についての内部事業評価委員からのコメントまとめ.....	69
第4章 事業全体の 評価.....	70
11. 研修カリキュラム開発の工程.....	71
11-1 委員コメント.....	71
11-2 コーディネーターコメント.....	71
12. 研修の普及に向けて.....	72
12-1 研修プログラムを他地域で実施するための提案.....	72
12-2 研修プログラム全体について他地域で展開する際に大事にしたいこと.....	73
おわりに.....	74
資料.....	77

用語について

「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」平成31年3月4日 文化審議会国語分科会

上記の資料を「養成・研修報告」とする。

上記資料に掲載されている表のうち、

P.34 表11 「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」を「資質・能力」とする。

P.61 表22 「日本語学習支援者研修における教育内容」を「教育内容」とする。

●カリキュラム

3領域5区分16下位区分に紐づく「教育内容」のリスト

●プログラム

「カリキュラム」の中から実施地域の研修の枠組みに合わせて必要な項目を選択して作成した個別の計画

●年度の表記

本事業は平成30年から令和2年にかけて2カ年実施した。連続性が見えるよう、事業実施に関する年度の表示は西暦で統一する。

第1章

事業の概要

1. 事業目的

本事業は、日本語学習支援を行う市民を育成する研修の開発・整備を目的とした。市民が研修受講を経て、言語調整能力を上げることの大切さ、相手のことばを受容することの大切さに気づき、その気づきや視点を日常生活の中で活かすことを通してよりよい市民社会を形成していくことを目指した。また、参加者がその気づきや視点を基盤として日本語教室などの市民活動において外国人と接することにより、相互学習の中で実効性ある日本語コミュニケーション支援ができるようになることを目指した。

2. 事業背景

2-1 地域日本語教育の成果と課題

成果①【外国人の学習機会の確保】

国内に公的な日本語学習の制度がない中、「日本語ボランティア」と呼ばれる市民による日本語学習支援が行われてきたことにより、定住外国人が日本語学習の貴重な機会を得ることができた。

成果②【生活者としての日本人と外国人との接点】

多文化共生の観点からは、市民が日本語学習支援の活動をとおして外国人をめぐる課題に目を向け、接点を持ってきたことに大いに意義があった。

課題①【公的な学習支援についての指針の欠如】

これまでの地域日本語教育の場面には、【外国人の学習機会】、【生活者としての日本人と外国人との接点】という点で成果があった一方、日本語支援活動の内容面では課題があった。人材の役割や日本語学習支援の効果的な方法について公的な指針がなかったため、各地域での実践者や自治体担当者にとって日本語教室の取組は試行錯誤であり、学習支援者に対する研修内容も地域によって様々であった。

課題②【日本語教室の偏り】

外国人支援を行う行政担当課や国際交流協会の有無により、日本語教室の分布には偏りがある。一方で地域活動を行う団体や市民の中には外国人との接点を持ちたいという層が存在する。日本語学習の機会拡充および外国人市民の社会参加のためにも、行政の市民活動担当課や関係機関が連携し、団体や個人に対して総合的にサポートできる体制の構築が課題である。

2-2 事業実施団体のリソース

「養成・研修報告」において、日本語学習支援者について以下のように記述されている。

「日本語教室においては、日本語教師や日本語教育コーディネーターなどの専門家と共に、外国人住民の日本語学習を促進し支援する日本語学習支援者が多く活躍している。地域住民が日本語学習支援者として日本語教室の活動に参加することは、日本語教育に関わることを通じて、多様な言語・文化に対する理解が深まり、多文化共生社会に向けた住みやすい地域づくりや地域の活性化にもつながるなど、多面的な意義がある。」（「養成・研修報告」p.20）

特定非営利活動法人国際活動市民中心（以下、CINGA）は市民活動として長く外国人支援活動を担ってきたほか、多文化共生社会に関する研究や講座実施にも実績がある。この知見を活用し、地域住民の日本語教室活動への参加が「多様な言語・文化に対する理解が深まり、多文化共生社会に向けた住みやすい地域づくりや地域の活性化につながる」ことを目標にした研修カリキュラムを開発することができると考え、事業を実施した。

3. 事業内容

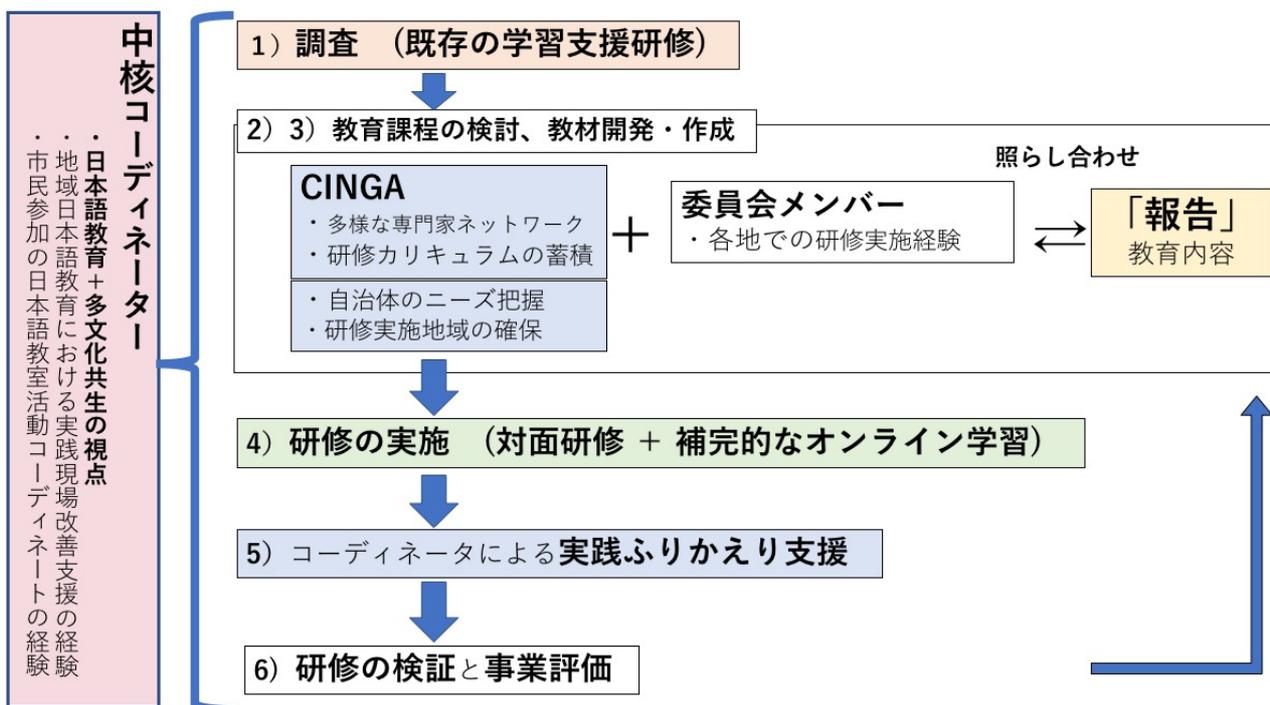


図 1 事業の流れ

3-1 教育課程の検討

- ・既存の日本語学習支援者研修に関する調査

調査目的：既存の研修カリキュラムの内容を把握し、カリキュラム開発に活かすこと。

調査対象：文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育教育実践プログラムA/B」2015～2017年度実施分20本

- ・教育内容の重み付け

2018年度には、「養成・研修報告」に示されている日本語学習支援者研修の「教育内容」1～8それぞれの中に入れる学習項目と重み付けを検討した。次に、実施する研修の時間と回数に合わせて、学習項目の順序と時間配分を決定した。2019年度には、前年の研修の評価を踏まえて教育課程の見直しをおこなった。

3-2 教材の検討・開発

本事業の「教材」とは、地域の担当者やコーディネーターが研修設計のために参照する教材（教材1）、および、研修の中で使用する教材例（教材2）の2点を言う。教材1は、研修実施と検証を踏まえ、他地域で日本語学習支援者研修を設計・実施する際に枠組みとして各回の流れが参照できるよう作成したものである。教材2は、本事業の研修実施のために作成し使用した教材や、それを加工した教材である。

3-3 研修の実施

2018年度は埼玉県越谷市、2019年度は東京都港区において研修を実施し、カリキュラム検証のためのデータを収集した。この2つの地域を研修実施地として選択した理由として、第1に、自治体や国際交流協会に日本語学習支援事業を担当する職員がおり、研修効果を上げるための協働ができる環境があったことが挙げられる。第2に、上記2ヶ所は、研修の対象者として新規活動希望者、及び、活動の経験者、という異なる参加者層が見込めたからである。

3-4 実践ふりかえり支援

研修後、日本語学習支援の実践現場へ赴き、研修参加者の実践活動のふりかえりを支援した。参加者によるふりかえりを研修の教育内容と実践のつなぎ方を検討するために活用した。

3-5 研修の検証と事業評価

研修参加者のアンケート結果・各回ふりかえりコメント等の検証データ分析結果を用いて、各委員会委員と事業評価委員による評価をおこなった。その結果、研修目標とした「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」のうち重点を置いた項目について、成果が確認された。また、「養成・研修報告」に示されている資質・能力を超えて重要と思われる項目が示唆された。

4. 事業実施体制

	氏名	所属・役職
委員 (全委員会に共通)	神吉 宇一 (委員長) 山西 優二 矢崎 理恵 矢部 まゆみ 萬浪 絵理 西山 陽子	武蔵野大学大学院・准教授 早稲田大学・文学学術院教授 さぼうと21・コーディネーター 横浜国立大学・非常勤講師 千葉市国際交流協会 日本語教育コーディネーター 横浜国立大学・非常勤講師
事業コーディネーター	萬浪 絵理 西山 陽子 新居 みどり	千葉市国際交流協会 日本語教育コーディネーター 横浜国立大学・非常勤講師 国際活動市民中心 コーディネーター
外部評価委員	藤井 美香 パク ミジン 富岡 拓也	横浜市国際交流協会・シニアコーディネーター ハーティー港南台 (株) ラーンズ

5. 事業の流れ

年度ごとの、委員会での議題と委員会前後のコーディネーターの主な業務は以下のとおり。

- ・事業は、コーディネーターが各会議での検討に必要な資料を準備し、委員会後に意見や決定事項を整理して次の委員会や研修のための資料を作成する、という流れで進めた。
- ・事業評価は、カリキュラム検討から研修実施までを行なった委員、および外部評価委員によって実施した。

第2部と第3部に各年度の取組詳細を、第4部に2カ年の事業全体の評価を報告する。本報告書の目的は、今後、地域において日本語学習支援者研修を実施する事業体に対して研修の作り方の一例を提示することである。各委員会の決定事項やカリキュラムの最終形を示すばかりでなく、委員会を経て研修カリキュラムを作り込んでいったプロセスの可視化を目指すため、2カ年の取組を時系列で報告することとする。

2018年度(1年目)

開催日時	取組	会議名	議題・検討内容
コーディネーター業務			各地の既存研修の調査
2018年7月23日(土) 16:00~18:00	(a)教育課程の検討	第1回教育課程検討会議	1. 事業説明 2. 調査結果報告 3. 事業の対象と方向性の検討 4. 事業達成目標の検討 5. 研修実施場所について 6. スケジュール検討
コーディネーター業務			各地の日本語教育実施体制の調査 日本語教育実施体制理想図作成
2018年9月7日(月) 13:00~17:00	(a)教育課程の検討	第2回教育課程検討会議	1. 前回議題確認、調査結果報告 2. 各委員の考える理想図共有 3. 学習支援者の役割と資質・能力の確認 4. カリキュラム検討 5. 越谷プログラムと日程について
コーディネーター業務			研修実施地担当者との調整
2018年10月22日(月) 14:00~18:00	(b)教材の検討・開発	第1回教材開発会議	1. 用語の定義、日本語教室の位置づけと学習支援者の役割 2. 研修内容と越谷の状況について検討 3. その他の確認、検討事項(広報チラシ内容、オンライン教材) 4. 越谷市について担当職員との状況確認と討議 5. 評価について(評価基準について)
コーディネーター業務			講師との内容調整、アンケート、学習項目シート等研修資料作成
2018年12月15日 ~2019年1月26日	(c)研修実施		埼玉県越谷市での研修実施 全5回
2019年2月15日	(d)実践ふりかえり支援		研修受講者が所属する日本語教室にて実践ふりかえり支援
コーディネーター業務			データ分析
2019年2月18日(月) 14:00~17:00	(e)事業全体の評価 (研修評価)	第1回事業評価およびカリキュラム改善会議	1. 事業概要説明 2. 講座全体評価データ説明 3. 研修各回内容報告 4. 教室訪問報告 5. 浅井氏報告 6. 質疑応答 7. 次年度に向けた評価、検討

2019年度(2年目)

開催日時	取組	会議名	議題・検討内容
コーディネーター業務			1年目の事業評価分析
2019年5月20日(月) 14:00～17:00	(a)教育課程の検討	第1回教育課程検討会議	1. 研修実施先概要 2. 2019年度研修教育課程検討 3. スケジュール検討
コーディネーター業務			研修実施地担当者との調整
2019年7月8日(月) 14:30～17:30	(b)教材の検討・開発	第1回教材開発会議	1. 港区内の日本語学習支援状況の共有 3. 港区担当者との質疑応答 4. 講座全体の内容、各回内容についての検討 5. チラシについて
コーディネーター業務			講師との内容調整、研修実施地担当者との調整、学習項目シート等研修資料作成
2019年9月28日 ～2019年11月16日	(c)研修実施		東京都港区での研修実施 全5回
2020年2月7日	(d)実践ふりかえり支援		試行日本語教室にて実践ふりかえり支援
コーディネーター業務			データ分析
2020年2月3日(月) 14:00～17:00	(e)事業全体の評価	第1回事業評価およびカリキュラム改善会議	1. 今年度研修ふりかえり 2. カリキュラムの今後の展開について 3. 事業報告書作成について 4. 教材の公開方法について
コーディネーター業務			教材および報告書のまとめ

第2章
2018年度
(1年目)

1. 教育課程の検討 (2018)

日本語学習支援者研修のカリキュラム開発は、以下の資料に基づいて行なった。

「養成・研修報告」

P.34 表 11 日本語学習支援者に望まれる資質・能力

P.61 表 22 日本語学習支援者研修における教育内容

1-1 調査

教育課程を検討するにあたり、既存の日本語学習支援者研修について以下の調査を行なった。はじめに自治体等が実施する日本語学習支援者研修の教育科目の配分について調査を行なった(調査1)。次に、「報告」によれば「学習支援者」は「日本語教師や日本語コーディネーターと共に日本語学習支援にあたる」とされているが、それを前提として研修カリキュラムを検討できるか、公的機関の日本語教育体制の実態を調査した(調査2)。以下、調査の概要と結果を述べる。

【調査1】 既存の学習支援者研修の教育内容に関する調査

(1) 概要

調査目的：既存の研修カリキュラムの成果と課題を本カリキュラム開発に活かすこと

調査方法：文化庁「NEWS」に保存されている文化庁委託事業地域日本語教育実践プログラムA・Bのうち、直近2カ年の「学習支援者研修」を抽出し、プログラムを学習支援者研修で求められている8つの教育内容に基づき分類。(文化庁委託事業を対象とした理由は、企画・運営に信頼性があると判断したため。)

調査対象：20団体。平成28年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラム(A)、(B)実施内容報告書 ボランティア養成講座 (2団体は平成27年度分)。当初は、日本語学習支援新規活動希望者対象の研修10か所、活動経験者対象の研修10か所を調査する計画であったが、両者を対象にする研修も多かったため、対象別とはせず合計20本以上とした。

(2) データ収集

文化庁日本語教育コンテンツ共有システム(NEWS)²から事業報告書を入手し、取組に日本語学習支援者(日本語ボランティア)の養成やフォローアップ研修が含まれている事業から以下を抽出した。

①機関名、事業名、事業の目的、

②人材育成の取組の名称、目的、対象、時間数、回数、取組のテーマ、授業概要

(3) 研修内容の分類

各機関の研修の各回の内容を「日本語学習支援者研修における教育内容」の8科目に分類した。

科目のうち、「6) 日本語学習支援」に含まれるものは内容の幅が広いので、3つの下位分類を設定した。また、科目のほかに「(9) その他」を設定した。

表1は「養成・研修報告」(p.61)に示されている教育内容である。調査した研修の教育内容の分類カテゴリ、及び、具体的な内容例は、表2のとおり。表中の黒字は「養成・研修報告」に同じ。青字は、新たに立てた分類基準および具体例。表2は表1の緑枠部分と対応している。

² <http://www.nihongo-ews.jp/>

表 1 日本語学習支援者研修の教育内容（緑枠は執筆者が追加）

教育内容：表 2 2

日本語学習支援者研修における教育内容

3 領域	5 区分	16 下位区分	教育内容	
コミュニケーション	社会・文化に関わる領域	①世界と日本	(1) 学習者の背景に対する理解 ・在留資格 ・国内の在留外国人 ・主な出身国の文化背景 ・来日理由, 日本における生活状況など	
		②異文化接触	(2) 多文化共生 ・地域の多文化共生施策 ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的・目標 ・地域日本語教育の実施体制と支援者の役割	
		③日本語教育の歴史と現状		
	教育に関わる領域	言語と社会	④言語と社会の関係	
			⑤言語使用と社会	(3) コミュニケーションストラテジー ・地域の「ことば」 ・「やさしい日本語」
			⑥異文化コミュニケーションと社会	(4) 異文化理解 ・異文化コミュニケーション
	言語に関わる領域	言語と心理	⑦言語理解の過程	
			⑧言語習得・発達	
			⑨異文化理解と心理	
	言語に関わる領域	言語と教育	⑩言語教育法・実習	(5) 地域日本語教育の多様性 ・地域の日本語教室の見学 ・学習者及び支援者との交流
			⑪異文化間教育とコミュニケーション教育	(6) 日本語学習支援 ・発話調整 ・傾聴 ・学習支援の流れ ・学習支援のリソース
			⑫言語教育と情報	(7) コミュニケーション教育
		言語	⑬言語の構造一般	
	⑭日本語の構造		(8) 日本語の構造	
	⑮言語研究			
	⑯コミュニケーション能力			

(備考) 関連ページ：p.34 表 11 「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」

表2 調査で使⽤した教育内容カテゴリーと具体例

教育内容	具体例
1)学習者の背景に対する理解	在留資格 国内の在留外国人 主な出身国の文化背景 来日理由日本における生活状況等
2)多文化共生	地域の多文化共生施策 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的・目標 地域日本語教育の実施体制と支援者の役割
3) コミュニケーションストラテジー	地域の「ことば」 やさしい日本語
4) 異文化理解	異文化コミュニケーション
5) 地域日本語教育の多様性	地域の日本語教育の見学 学習者及び支援者との交流
6) 日本語学習支援	
a) コミュニケーションスキル	発話調整 (やさしい日本語) 傾聴
b) 日本語学習支援流れ・リソース	学習支援の流れ (日本語学習者なし) 学習支援のリソース 企画
c) 学習活動演習 * 日本語学習者との演習	OJT (日本語学習者あり)
7) コミュニケーション教育	対話 アサーション
8) 日本語の構造	文法知識、日本語教授法、教授演習 (日本語学習者あり/なし) 漢字
9) その他	

分類についての注意点

- ・ 調査は既存の研修の内容を大まかに掴むという目的で、事業報告書からわかる範囲の情報に基づいて行なった。
- ・ 1回の内容が2つの科目を含み、割合の不明な場合は、双方に含めた。
- ・ 1つの機関が複数の研修をおこなっている場合、1つの研修のみを取り上げた場合と、通算した場合がある。
- ・ 本調査は各研修の8科目のバランスを知ることが目的であるため、「その他」の割合が多い研修は集計結果から外した。
- ・ 「やさしい日本語」は、「教育内容」の表では「言語と社会>言語使用と社会>(3)コミュニケーションストラテジー」の欄に挙げられているが、各機関の研修における扱いが日本語学習支援のための「やさしい日本語」であると考えられる場合は、6a)に分類した。

(4) 集計結果

機関ごとに、個々の科目のコマ数を集計し、科目割合を計算した。表3は教育内容別の割合を色の濃淡で表したものである(白が0%、最も濃い色が100%を示す)。

- ・ 機関によって研修科目間のバランスは様々である
- ・ 全体として、(6)日本語学習支援に関する単元が多い。具体的な内容は研修目的により多様である。
- ・ (8)「日本語の構造」を含めている場合は、その科目に量的に最も重きを置いている研修が多い。
- ・ 「異文化理解」の内容が少ない。
- ・ 日本語学習者を交えた演習が一定数見られる。
- ・ 「日本語の構造」の扱いは、研修の目的によって異なる。

表3-1 各機関の日本語学習支援者研修教育内容のバランス

(印刷用拡大版は巻末資料参照)

No.	取り組み名称	対象	目標	回数・時間	社会・文化・地域		言語と社会		言語と教育			言語				
					(1) 学習者の背景理解	(2) 多文化共生	(3) コミュニケーションストラテジー	(4) 異文化理解	(5) 地域日本語教育の多様性	(6) 日本語学習支援 (6a) コミュニケーションスキル (6b) 流れ/リソース (6c) 学習活動演習OJT			(7) コミュニケーション教育	(8) 日本語の構造	(9) その他	
1	[地名]版 地域日本語教師養成講座	地域で活動する有資格者と一般市民	地域における多様な学習ニーズに対応できる日本語教師を輩出する	28回×1.5H												
2	日本語サポーター養成講座	在住外国人と支援したい人と役場	国人支援のネットワーク作りと支援者になるための呼びかけと養成	4回×2H												
3	OJTによる日本語ボランティアの養成	誰でも。外国人も可	① 日本語ボランティア希望者の振り起し ② OJTの手法を活用した、実地訓練による日本語ボランティアの養成 ③ 養成したボランティアを地域の日本語教室につなぐ ④ 外国人住民を理解する日本人を地域に増やす	11回×2H +3回×6H												
4	新基本講座/対話の達人講座/これは使える活動素材講座等	ボランティア希望者 ボランティア経験者	対話を中心とする日本語活動に欠かせない知識とスキルの習得。	3回×2H 3回×2H 8回×3H												
5	既存の日本語教室における日本語講座及び日本語ボランティアスキルアップ研修会	日本語教室に通う学習者及び日本語ボランティア	日本語ボランティアのスキルアップやモチベーションの向上を図り、今後の日本語教室の活動の拡充につなげる。	1回×5H (5期) 3H OJT												
6	[地名]ってどんな街?みんなで知ろう [地名]!(日本語ボランティア編)	日本語母語話者と日本語能力上級者	外国人市民とともに〇〇市について知識を深め、地域住民同士としての意識を醸成する。	6回×1H 5回×2H												

【調査2】 公的機関の日本語教育実施体制に関する調査

調査目的：基礎日本語教室を持つ自治体や国際交流協会などの日本語教育実施体制を把握し、開発する研修の位置づけを検討すること

調査対象：①平成26年度『生活者としての外国人』のための日本語教育事業—地域日本語教育の総合的な推進体制の整備に関する調査研究—報告書（株式会社ランズ、2015）
②日本語教育ボランティアの育成及びスキルアップに係る事例集（東京都、平成30年3月）

表4 調査結果

行政・公的機関における日本語教育の実施体制—基礎日本語教育を実施している事例					
参考資料： ①平成26年度『生活者としての外国人』のための日本語教育事業—地域日本語教育の総合的な推進体制の整備に関する調査研究—報告書（株式会社ランズ、2015） ②日本語教育ボランティアの育成及びスキルアップに係る事例集（東京都、平成30年3月）					
・「コーディネーター」の身分と役割は機関により異なる。 ・「アドバイザー」は、その名称が使用されている場合のほか、その機能を持つと考えられる者を指す。 ・直営の教室を持たない地域が多い。 ・直営の教室がなくても、地域日本語教室のためにボランティア育成研修を行なっている地域が多い。 ・このリスト外の地域も含めて、学習支援者を日本語教育の有資格者に限定している地域も一定程度ある。					
機関	ゼロ初級	コーディネーター	学習支援者研修	OJTとしての教室	市民参加型の直営教室
熊本市国際交流振興事業団	○	○	○	○	×
宮城県国際化協会	○	○	○	○	×
大阪市国際交流センター	○	有資格ボラ	○	○	○有資格ボラ
豊田市・名古屋大学	○	○	○	○	○
四日市市	○	○	○	×	×
兵庫県国際交流協会	○	?	○	×	?
北九州市	○	○(職員)	○	×	×
富山県・とやま国際センター・トヤマヤポニカ		アドバイザー	○	○地域の教室に向いてOJT	×
石川県国際交流協会	○	アドバイザー	○	×	×
横浜市国際交流協会		アドバイザー	○	×	○(固定)
千葉市国際交流協会	○	○(単年委嘱)	○	○	○

調査1により、既存の学習支援者研修の教育内容について知ることができた。また、「養成・研修報告」では日本語学習支援者は日本語教育コーディネーターや日本語教師とともに日本語学習の支援にあたりとされているものの、実体として公的機関には有償の日本語教育コーディネーターや日本語教師が配置されている例が少ないことが調査2によってわかった（2018年7月時点）。委員会では、調査結果を踏まえて研修カリキュラムの検討を進めた。以下、検討内容を時系列で記す。

1-2 委員会

本研修の取り組みでは、委員が各研修の講師も務めることになった。各委員（講師）とも、多くの地域で類似の研修を行った経験が豊富にある。しかしながら、その経験にそのままよりかかるのではなく、本研修のあり方や内容・方法に関して委員会で以下の(1)～(8)について議論を行った。

- (1) 日本語学習支援者の役割についての検討
- (2) 実施体制理想図の検討
- (3) 研修キーワードについての考え方の整理
- (4) 多文化共生社会のための日本語教室の機能の確認
- (5) 研修の目標設定
- (6) 教育内容の配置と重み付けの検討
- (7) 研修カリキュラムの作成
- (8) 研修方法の検討

各項目について、議論の内容を順に記す。

(1) 日本語学習支援者の役割についての検討

- 本研修が育成をめざすのは、生活場面におけるコミュニケーション（特に会話能力）を向上させたいと願う日本語学習者に対して有効な学習支援ができる市民である。研修参加者層は大きく分けて、学習支援の活動を新規に希望する者と、現在、学習支援の活動をしている経験者が存在する。研修は、日本語が全く話せない者に対する日本語教授能力育成を目的としない。日本語学習未経験者に対する専門的な日本語教育は日本語教師に任せる領域とする。
- 日本語学習支援者は日本語教師やコーディネーターとともに活動する。「ともに」とは、同じ空間にいることに限定せず、情報交換をしながら、という意味に捉える。学習支援者は、自分たちで全てのプログラムを作るということではなく、「生活者としての外国人」に対する日本語教育に関する専門性を持ったコーディネーターや日本語教師と相談しながら、学習活動を進める。
- 地域日本語教室において学習支援を行う市民は、日本語学習支援を超えた機能を果たしている。委員はそれぞれの実践現場で感じていると思われるが、事業をとおして言語化していく。

(2) 実施体制理想図の検討

図2は、2008年に文化庁日本語教育研究委嘱の報告書に掲載されたシステム図の内容である。日本語学習支援者が多く活動すると想定される地域日本語教室は、「生活者としての外国人」と「生活者としての日本人」が対話、協働する場として位置すると考えられる。図では、他方に「専門家による日本語教育」が存在する。日本語学習の経験がない外国人への日本語指導や学習支援は、一般的に日本語ボランティアにとっては負担が大きいと言われることが多い。従って、図に描かれているように日本語学習支援者が「生活者としての日本人」として「生活者としての外国人」と対話し、協働する場づくりを目指すのであれば、「補償としての日本語教育」は地域日本語教室とは別に有資格者が担う体制が必要である。

しかしながら調査2の結果にあるように、2018年3月現在で自治体や公的機関が基礎日本語教育を実施している事例は極めて少ない。本事業では、日本語学習支援者研修を実施するにあたり、研修終了後に参加者が活動する地域において基礎日本語教育が存在することを前提とするのか、存在しない実態を前提とするのかを議論した。そして、**基礎日本語教育の実施は日本語教育の体制整備に不可欠であり、過渡期においては、理想と実態が合わないケースも出てくるであろうが、実態を前提としていたのでは体制整備は進まないことから、研修実施にあたっては、日本語学習支援者の役割から基礎日本語教育を外して考えることで合意した。**

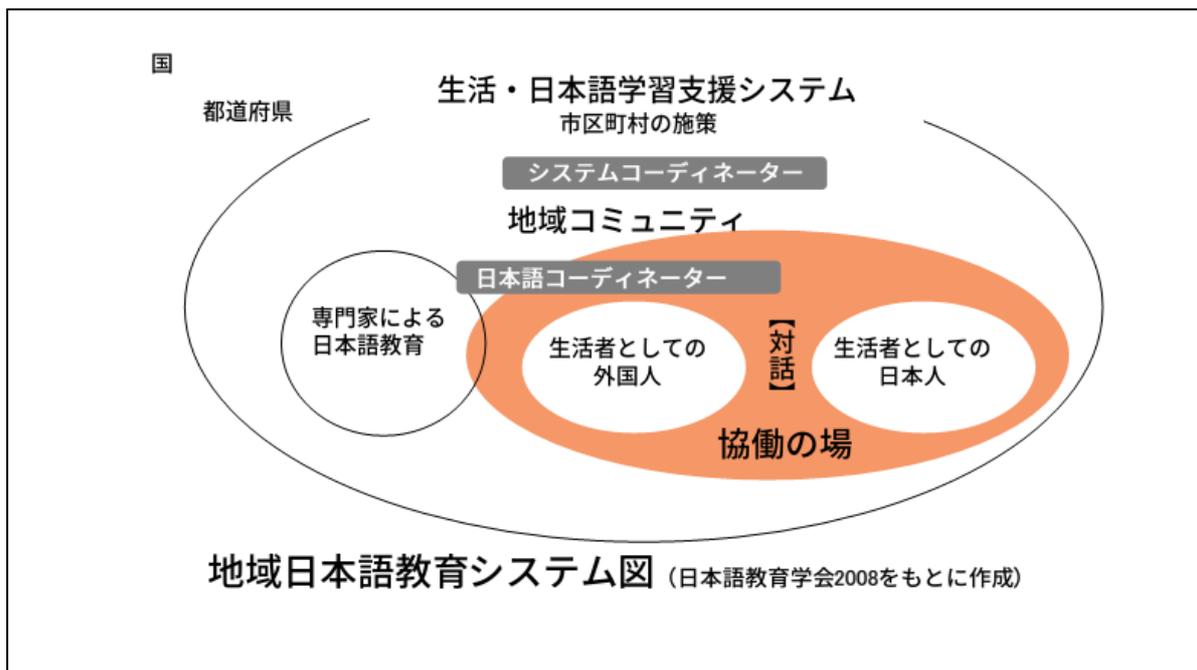


図2 平成19年度文化庁 日本語教育研究委嘱 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発
（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業） - 報告書 - （平成20年3月）を基に作成

教育課程の検討にあたり、日本語教育の実施体制理想図を作成した（図3、4 各部分の説明は巻末資料）

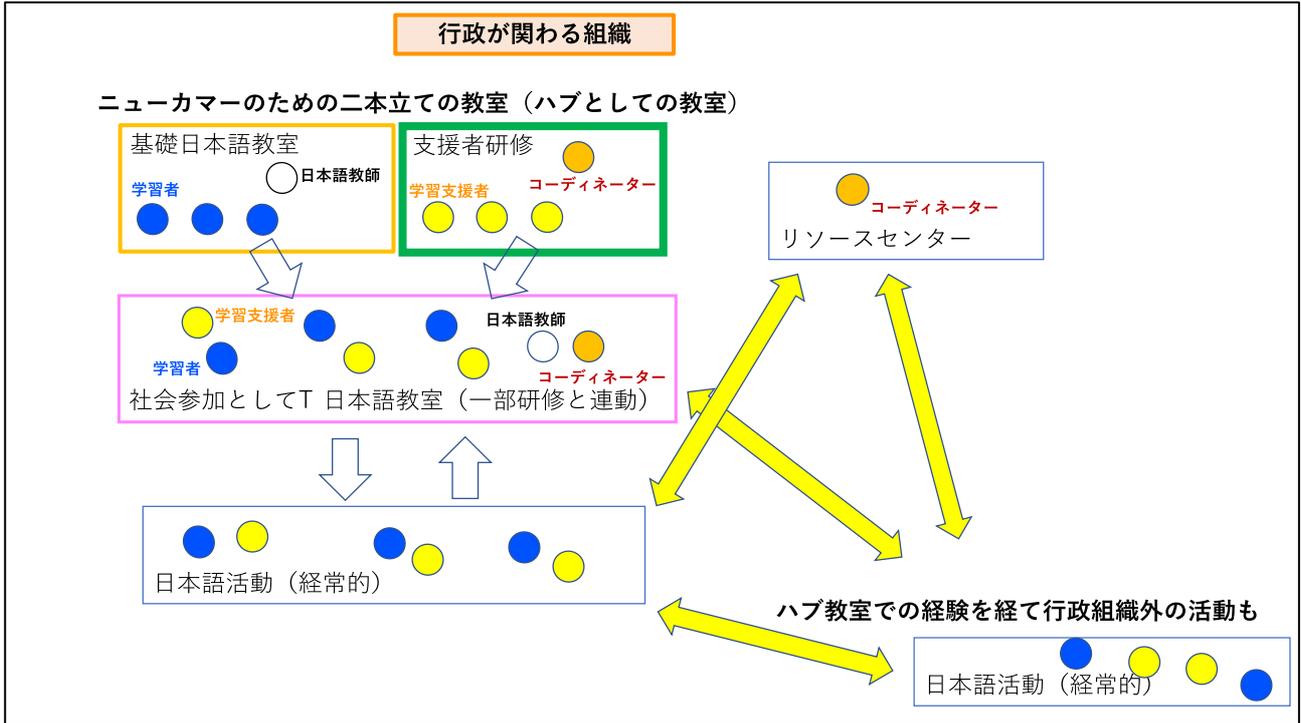


図3 研修で前提とする日本語教育体制理想図

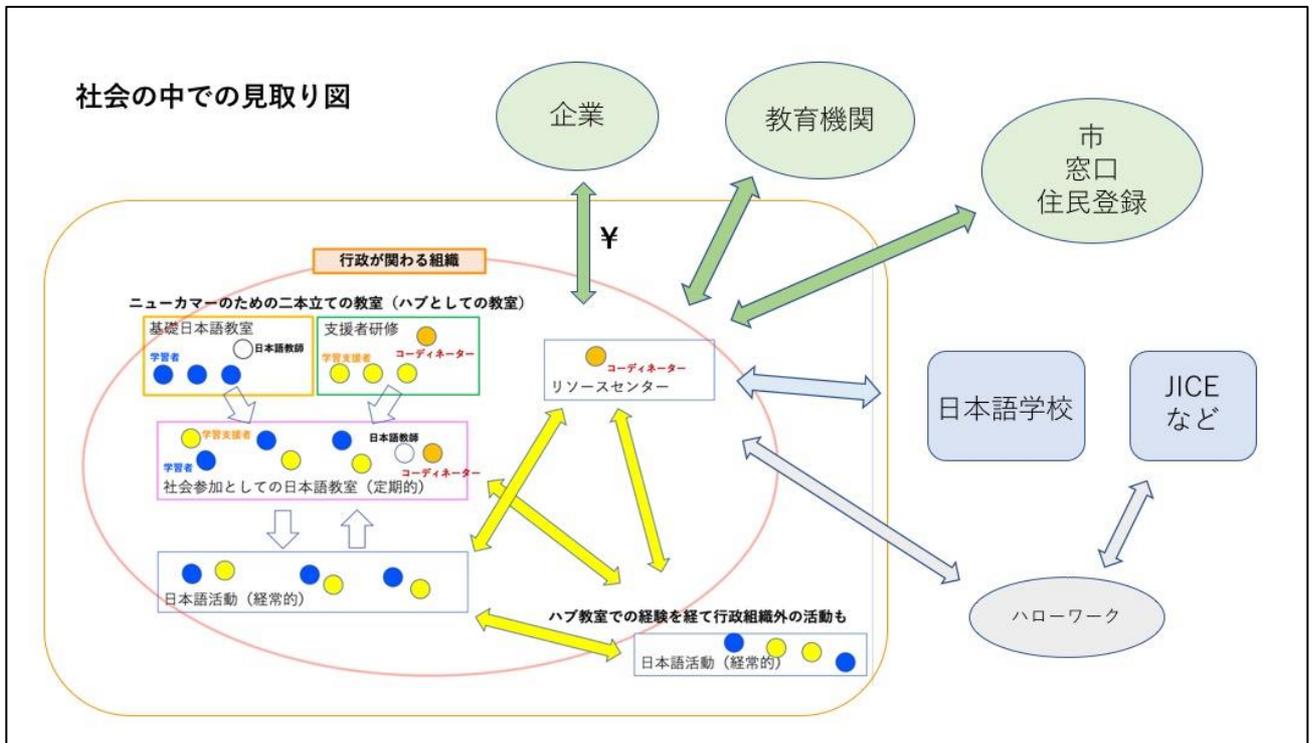


図4 社会の中での見取り図

社会、言語、教育の観点からすべての市民にとっての学びの場を考えると、日本語教室は「地域多言語・多文化教室」の一部として存在する。本事業の研修カリキュラム開発において、研修参加者が日本語学習支援者として参画する日本語教室は、図5のように位置づけられると考える。

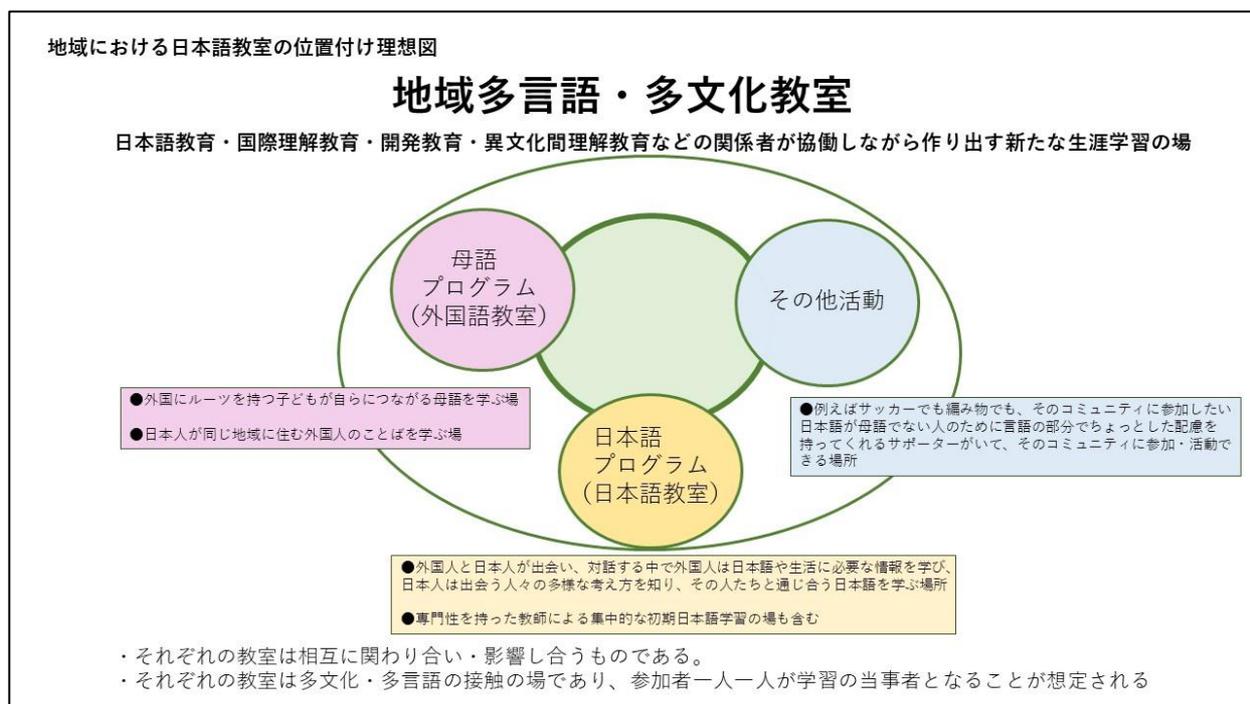


図5 地域多言語・多文化教室の中の日本語教室の位置づけ

●日本語教室の位置づけに関する検討

コーディネーターから図4の日本語教育体制実施理想図を提案する一方、地域における日本語教室の位置づけについて、各委員もそれぞれが持つイメージを図に描き、共有した。その中で、以下のような点についても議論が及んだ。

- ・ リソースセンターの機能
- ・ 地域日本語教育の担い手：プロ/アマチュア、有償/無償
- ・ 日本語教室活動の形態：1対1、グループ
- ・ 社会参加とは
- ・ 「多文化共生」の内容

(3) 研修キーワードについての考え方の整理

委員会での議論には、「教育内容」の項目も含め、多くのキーワードが使われた。「多文化共生」「社会参加」等のキーワードは、地域づくりにつながる日本語教室の活動や学習支援者の役割を考えると不可欠である。これらのキーワードの意味を本事業をとおして研修参加者や地域担当者とともに明らかにしていくことが重要という認識で委員は一致した。

例えば、「日本語学習支援の活動とはどのようなものを指すか」という問いが次の委員会で検討された。各委員の考えを言語化して捉え方を共有した結果、学習者のことばを受け止め、自己表現を支援すること、学習者と一緒に何かすること、学習方略を示すこと、において合致した。これらの項目は、「資質・能力」の項目とも共通するものであり、また、様々な実践現場で日本語学習支援を行い観察してきた委員の経験から

みて、これらの行為が日本語学習支援の活動として効果が高いと考えられた。

こうしたイメージ共有のプロセスを経て、研修で伝えたいことが具体化していった。また、異なる教育内容を担当する講師同士で具体的な理想の日本語学習支援活動をイメージ共有したことにより、研修の各回に軸がとおり、1本の研修カリキュラムとしてまとまりのあるものが形成されていった。

(4) 多文化共生のための日本語教室の機能の確認

委員会での議論を踏まえ、日本語教室等で行う日本語学習支援の活動とは図6のような営みであることを確認し、この図を研修においても使用することとした。

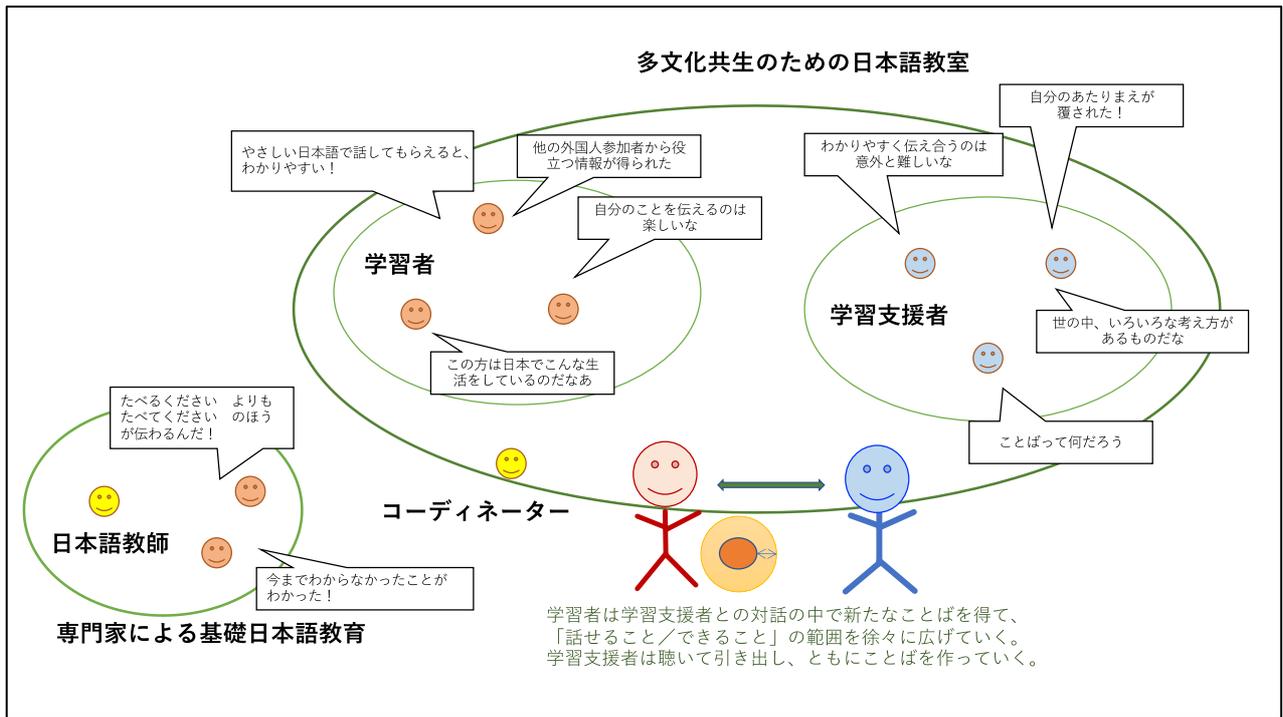


図6 多文化共生のための日本語教室における日本語学習支援

(5) 研修の目標設定

ここまでの議論を踏まえ、事業で実施する研修の目標を改めて言語化した。

●研修の目標

市民が研修を受けることで言語調整能力を上げることの大切さ、相手のことばを受容することの大切さに気づき、その気づきや視点を日常生活の中で活かすことができる。この気づきや視点を持つことこそが外国籍市民に対する伴走型の日本語学習支援になる。

●市民に対して研修を実施することのねらい

単に外国籍市民の日本語学習支援ができるようになることだけでなく、研修で身につけた能力がそれぞれの日常生活の中で生かされることは、他者のことを考え行動できる市民が増えることであり、より良いまちづくりにつながる (2-2.参照)

(6) 教育内容の関係と重み付けの検討

8つの教育内容の相互関係について、本事業の研修では、「多文化共生」「異文化理解」を中心に据え、他のすべての科目は「多文化共生」のために位置づくつと考える。

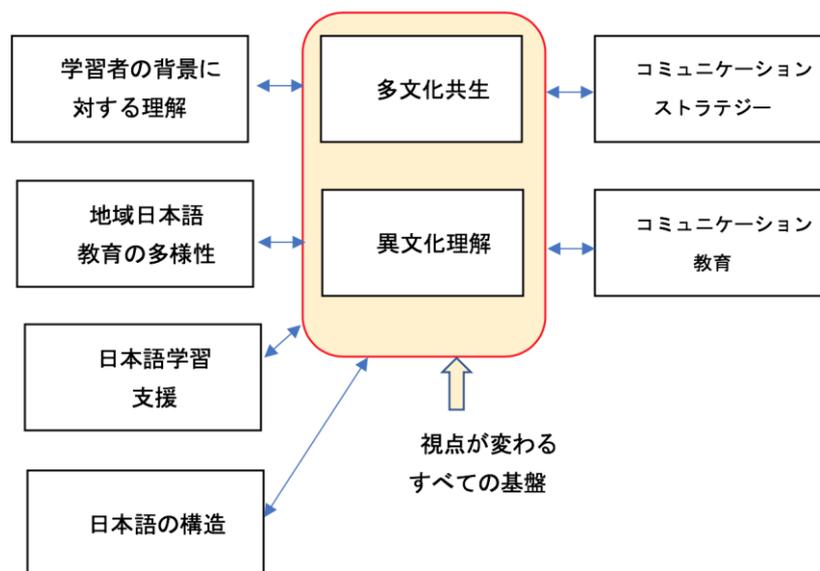


図7 8つの教育内容の関係

(7) 研修カリキュラムの作成

教育内容相互の関係と重み付けを踏まえて、研修カリキュラムを策定した。参加者が通える回数と時間のバランスを実施地と協議し、研修は3時間×5回で実施することとした。そこで、8つの教育内容を5回に配分し、それぞれの回のテーマで扱う教育内容を図式化した(図8)。

カリキュラム開発は、日本語学習支援者における下記の「資質・能力」の向上を目標とする。「知識」「技能」「態度」のそれぞれの小項目のうち、各回で特にねらいとするものを定めて一覧にした(表5)。2018年度の研修プログラムはこの表をもとに作成した。

日本語学習支援者に望まれる資質・能力

表11

	知識	技能	態度
日本語学習支援者	(1) 日本語や日本文化、社会、多文化共生に対する一般的な知識・理解を持っている。 (2) 日本語教育に携わる機関・団体及び関係者による支援体制と自らに期待される役割について理解している。 (3) 学習者の来日の経緯、国や言語・文化背景、日本語の学習目的に対する一定の知識を持っている。 (4) 異文化理解や異文化間コミュニケーション、コミュニケーション能力に関する基礎的な知識を持っている。 (5) 日本語の構造や日本語学習支援に関する基本的な知識を持っている。	(1) 分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。 (2) 学習者の発話を促すために、耳を傾けるとともに自身の発話を調整することができる。 (3) 日本語教育コーディネーターや日本語教師と共に、日本語学習を支援することができる。 (4) 学習者の状況を観察し、日本語教師や日本語教育コーディネーターの助言を得ながら、学習方法や学習内容を学習者に合わせて工夫することができる。	(1) 学習者の背景や現状を理解しようとする。 (2) 学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。 (3) 学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。 (4) 学習者が自ら学ぶ力を育み、その学びに寄り添おうとする。 (5) 異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持つようとする。

(備考) 表11「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」は、表1~10を前提とするものではない。

「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改定版」p.34より引用



図8 研修の構造 (印刷用は巻末資料参照)

表5 研修カリキュラム 2018

1回3時間、全5回で実施する場合の各回テーマ、教育内容、学習項目、および狙いとする資質・能力

研修カリキュラム (2018)

回	時間数	テーマ	教育内容	内容	ねらいとする資質・能力		
					知識	技能	態度
1	3時間	学習者の背景理解 文化とは、多文化とは、多文化共生とは	① 学習者の背景に対する理解	・実施地域の外国人住民状況、地域の日本語教育の背景理解 ・全国、地域、政策の変遷、政治と法律の動き	1, 2, 3	なし	1, 2, 5
			② 多文化共生 ③ コミュニケーションストラテジー ④ 異文化理解	・文化とは、文化を取り巻く状況、多文化共生の捉え方 ・文化理解に関する体験学習			
2	3時間	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎	個々の取り組みのふりかえり		4, 5	1, 2	2, 3
			⑥ 日本語学習支援_コミュニケーションスキル (③ コミュニケーションストラテジー)	・やさしい日本語とは、作り方、練習			
3	3時間	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴	⑥ 日本語学習支援_コミュニケーションスキル (③ コミュニケーションストラテジー)	・コミュニケーションの要素 ・相手の話を受け止めるための配慮、技能 ・日本語学習支援と文化理解の両立をめざすコミュニケーションのあり方	4, 5	1, 2	2, 3, 4
			⑦ コミュニケーション教育				
4	3時間	地域日本語教室の実践	個々の取り組みのふりかえり		5	3, 4	3, 4
			⑤ 地域日本語教育の多様性 ⑥ 日本語学習支援_活動演習	・日本語学習支援団体の取組紹介 ・文化理解につながる活動の演習 ・地域日本語教室とは			
5	3時間	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援	⑥ 日本語学習支援_活動演習	・外国人協力者との対話	2, 5	なし	3, 5
			まとめ	研修全体のふりかえり			

(8) 研修方法の検討

目標設定とふりかえり

1) 「態度」について

「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」は、「知識」「技能」「態度」の3つに分類されている。このうち、「態度」は以下の項目である。

- (1) 学習者の背景や現状を理解しようとする。
- (2) 学習者の言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする。
- (3) 学習者や支援者などと良好な対人関係を築こうとする。
- (4) 学習者が自ら学ぶ力を育みその学びに寄り添おうとする。
- (5) 異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持つようとする。

キーワードとして、「尊重」「対等な立場で接する」「良好な人間関係」「自ら学ぶ力」「寄り添う」「異なる価値観を持つ他者と協働できる柔軟性」が含まれる。いずれも、多文化共生のための日本語学習支援活動にとって特に重要である。しかし、態度は特定の教育内容の回で育成されるものではない。望まれる「資質・能力」の記述では、日本語学習支援活動における日本語学習者に対する態度が描かれているが、これらの態度が持てるとすれば、日本語学習支援者は研修における他の参加者に対してもこれらの態度をもってお互いに接することができなければならない。そこで、参加者が研修という学びの場における参加者同士の関係の中でこれらの態度の重要性に気づき、醸成のきっかけとなるよう、隠れたカリキュラムとして研修方法を工夫することとした。

具体的には、すべての科目において、ディスカッションやグループワーク、体験を多く取り入れること、更に、参加者が各回や最終回でそのプロセスをふりかえることによって、他者との関係性の中で何を学んだかを言語化しながら研修を進める、ということが委員会で決まった。

2) 学習目標設定とふりかえりの方法

研修カリキュラムの目標は、「資質・能力」の向上である。研修参加者自身が学習目標を意識化し、自身の学びを評価できるよう、方法を検討した。詳細は「教材の検討・開発（2019）」で述べる。

2. 教材の検討・開発（2018）

「教材の検討・開発」の取組については、2019年度の項にまとめて報告する。

3. 研修実施（2018）

3-1 研修実施場所

2018年度の研修実施場所は埼玉県越谷市とした。その理由として、まず研修実施者（CINGA側）が通える範囲内にあったこと、そして、市内の地域日本語教育の実施のあり方について模索中であった越谷市担当者が、本事業が目指す地域日本語教育のあり方、また、学習支援者研修は委託した研修実施者のみが行うものではなく、自治体と研修実施者がともに作っていくものであるとの考えに共感を得たことが挙げられる。市内の地域日本語教育の充実を目指し、本研修実施のために既存の日本語教室に参加する人々や、研修実施者との信頼関係を構築しながら積極的に業務を進め、努力を惜しまない担当者がいたことが、本市で研修を実施することができた大きな要因であった。

3-2 地域日本語教室の実施状況

市直轄の日本語教室、国際交流協会実施の日本語教室はなし
任意団体6教室

3-3 研修実施の背景

市担当職員は下記の課題解決のために研修実施の必要性を強く感じていた。また、研修を実施し新規参加者を得ることで、市内に新規の教室が立ち上がることを期待していた。

越谷市の地域日本語教育における主な課題

- ① 外国人市民の日本語学習ニーズが市に寄せられているが、既存日本語教室の開催時間は平日の午前に偏りがあり、学習者の選択肢が少ない
- ② 既存の日本語ボランティア教室からの教室活動についての悩みが寄せられることがあり、人材養成と新規の活動参加者の確保の問題がある

3-4 実施期間

2018年12月15日～2019年1月26日 土曜日 全5回

3-5 参加者数

32名

3-6 研修の目的

地域日本語教室等において、「学習者と対等な立場の伴走者」として外国人の日本語コミュニケーション力向上に寄与することができる学習支援者の育成

3-7 研修の方法

研修は講義だけでなく、ワークショップや事例検討など様々な方法で行われ、参加者同士のコミュニケーションを通して学びを深めることに重きをおいた。

<主な研修の流れ>

- ① 前回の宿題の結果報告
- ② 講義、ワークショップなどの講座
- ③ キーワード、ふりかえり、自分への宿題記入
- ④ グループ内で③の共有
- ⑤ eラーニング学習、感想記入 *希望者のみ

3-8 e-ラーニング

目的：限られた研修時間を有効活用し、参加者に研修内容についての興味をさらに広げてもらうこと

方法：① 研修内容に関する参考資料の情報提供 : 各種情報提供 (全4回)

② google フォームによる学習内容に関する簡単なチェックフォーム : やさしい日本語クイズ (第2回のみ)

③ google フォームによる参考資料の閲覧状況確認や感想の記入 : eラーニング学習確認フォーム (全4回)

④ eラーニングについてのアンケート : 第5回配信時

*参加者の負担感軽減のため、参考資料の閲覧状況確認や感想・コメントなどは全て無記名記入とした。

*e ラーニングはPCでの閲覧を想定として行った。

平成 30 年度 文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」受託事業
〔主催〕特定非営利活動法人国際活動市民中心 (CINGA)・越谷市

日本語学習支援と文化理解を学ぶ市民講座

—多文化共生の地域づくりをめざして—

この講座では、日本語学習支援や文化理解を深める方法を学ぶことで、地域に住む外国人との交流やコミュニケーションについて考えます。



講義だけではなく、ワークショップ、事例の検討など、さまざまな方法で学びます♪

- 日程** 2018年12月15日(土)～2019年1月26日(土)のうち **土曜日全5回**
- 対象** 越谷市内で、外国人支援や日本語ボランティア、外国人との市民活動を行なっている方や興味がある方。全5回全ての講座に出席できる方。
- 参加費** 無料(要事前申込・定員30名・12月10日までの先着順) ※申込方法については裏面へ!

日時・場所・内容・講師	
12月15日(土) 13:00～16:30 越谷市中央市民会館5階 第2・3会議室	
第1回	学習者の背景理解 神吉 宇一 氏 日本社会における外国人や日本語教育の状況はどうなっているのでしょうか。データを元に、現状について概観します。
	文化とは、多文化とは、多文化共生とは 山西 優二 氏 人間はなぜ文化をつくり出すのでしょうか。ワークショップを交えつつ、自分・他者と出会う中で、文化・多文化・多文化共生について考えます。
12月22日(土) 13:30～16:30 越谷市中央市民会館5階 第2・3会議室	
第2回	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎 萬浪 絵理 氏・西山 陽子 氏 日本語でのやりとりに慣れていない外国人と相互理解を図るため、また、適切な学習支援を行うためには、コミュニケーションに工夫が要ります。話し手・聞き手としての基礎「やさしい日本語」と「聴く・待つ」方法を演習で学びます。
1月12日(土) 13:30～16:30 越谷市中央市民会館5階 第2・3会議室	
第3回	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴 矢部 まゆみ 氏 「日本語ができるようになりたい」という思いをもった人が教室に来た時、地域ボランティアとしてできる活動はどんなものなのでしょうか。役立つ素材には何があるのでしょうか。活動の例を体験しながら探りましょう。対話活動をしながら、日本語の構造の特徴についても確認します。
1月19日(土) 13:30～16:30 越谷市中央市民会館5階 第5・6会議室	
第4回	地域日本語教室の実践 矢崎 理恵 氏 多様な人々が集まり、共に活動する「地域日本語教室」では、実際にどんな活動が行われているのでしょうか。「教室」はどんな課題を抱え、どのようにその課題を解決しようとしているのでしょうか。いくつかの「教室」の実践から、「学習支援」や「相互理解」について、一緒に考えてみましょう。
1月26日(土) 13:30～16:30 越谷市役所本庁舎5階 第一委員会室	
第5回	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援 神吉 宇一 氏 コミュニケーションを通して相互理解を深めたり、日本語学習支援を行ったりするには、どのような取り組みをすればよいのでしょうか。5回の研修のまとめとして、外国人との実際のコミュニケーションを通して、活動のあり方を体験的に学びます。

4. 実践ふりかえり支援 (2018)

4-1 実施場所

任意団体 | 教室

4-2 実施日

2018年2月15日 13:30-15:30 *教室活動日

4-3 内容

研修実施地域である越谷市の日本語教室への訪問。学習活動のファシリテーションおよび終了後のふりかえりと意見交換を行った。学習活動では、2グループ(初級・中級)に分かれ、それぞれにコーディネーターのファシリテートのもと研修内で紹介した教材と教室が使用しているテキストを使用したグループ活動を実施した。

4-4 取組実施後の学習支援者ふりかえりコメント

- ・日頃はマンツーマンだが、学習者同士が話す機会があって良かった。
- ・いつもはテキストに沿って字を追っている。絵を使うと学習者の理解が早い。
- ・グループでお互いに質問し合う機会をもうけるといいと思った。
- ・間違っても大丈夫という雰囲気づくりが必要だと思った。
- ・テキストに忠実にしていたが、グループでやった方が読む・聞く・話す・よくできると思った。
- ・普段おとなしい人がはりきっていた。
- ・個別指導だとそれぞれ(ボランティアが)活動内容を決めないといけませんが、教室全体でテーマを決めるのも落ち着いてできると思った。

4-5 成果と課題

1. 成果

- ・研修で行われた内容が、実際自分たちの現場でどのように実施可能なのかを知りたいという参加者の声に応えることができた。
- ・ふりかえり支援の中で、研修内で紹介した教材を使用して活動し、普段教室で使われているテキストとの関連を示すことができた。
- ・普段ペアによる個別指導で活動を行なっている教室であったが、コーディネーターのファシリテーションによりグループ活動を経験したことで、個別指導では見えなかった学習者同士の相互学習の様子などをボランティアが目にする機会となった。
- ・研修終了後、研修内容についてボランティアがどのように感じているかを知ることができた。

2. 課題

ふりかえり支援により相互の関係を育むグループでの活動の良さを知ってもらうことはできたが、活動プログラムをボランティアのみで考え、継続的に行なっていくことは難しい。教室に常駐ではなくとも、定期的に現場を訪れアドバイスできるコーディネーターがその時々教室の状況を知った上でプログラムを提案していくことが望ましいが、現状ではその体制が整っていない。

5. 研修評価 (2018)

5-1 修了者数と参加者層

27名 (参加者数32名) *修了要件 出席率80%以上

想定される研修対象者 ①学習支援の活動を新規に希望する者、 ②現在、学習支援の活動をしている者2つの層のうち、②に属する参加者が約7割を占めた。

5-2 研修各回参加者ふりかえり (ふりかえり、キーワード、宿題)

第1回 「学習者の背景理解」 「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> 多文化共生とは人と人の中にもあるし、人自身の中にもある。ゲームでは、自分自身で日本のことはわかっているつもりでいたが違っている問題があり、自分の先入観で見ないということに気づいた。また、外国人の見た日本との違いにも気づかされた。相手の文化(宗教も含めて)をお互いに認め合い、理解するようにしたいと思いました。 (全体的な)実態を知らずに日本語教室で授業をしていました。では、現在の学習者にあてはめてみるとどうなのか・・・ということも考える必要はある。でも、その方法がよくわかりません。本人を通しての現実のほんの一部を知っているにすぎません。 (日本語教育の)基本的な視点が教えるのではなく学ぶ事だということは気づかなかった。
キーワード
<ul style="list-style-type: none"> 多文化、多文化共生、共生、多文化の理解、多文化は人の中 多文化共生は自分が当事者であることを自覚する 学習者理解 一人一人に対する理解 レヌカの学び
自分への宿題
<ul style="list-style-type: none"> 日本語教室の生徒に対して、見方が固定化していないか考えてみる。この国の人は～だからという見方をしない これからの活動にどう生かしていくか考える 多文化の共生についても一度考察してみる 家族との話し合い 「レヌカの学び」を我が家で作ってみる→まず身近な理解

第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> 情報は必要な事のみでいいのに、広報等は割合難しいことばを使用しているのでは。 外国人向けへの「やさしい日本語」の重要性を感じました。やさしい日本語の作り方(ルール)を自分のものにするためには訓練の場の必要性があり多文化共生のためにも自治体レベルで取り組む必要があるのではないかと思います 自分がしているきき方はどれなんだろうと振り返ってみる良い機会だった。
キーワード

<ul style="list-style-type: none"> ・ 「聴く、待つ」姿勢 ・ やさしい日本語の実践
自分への宿題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の日本語ボランティア活動では「聴く、待つ」を心がける。 ・ 3つの聞き方を家族の間でやってみる。 ・ 具体的にどんだん文を作ってつくってみる。 ・ 普段から気をつけて、心がける。相手の話を聞くように。 ・ 「やさしい日本語」の作り方を実践してみる。

第3回 「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ 共通点探しを行うことで、お互いの距離が近くなることを知り今後の活動に活かしていきたい。 ・ やはり相手に合わせること、自分が質問するだけでなく、相手にも質問できるような雰囲気づくりをしていく。単語で覚えるより、文で覚える。大切にしていきたい。 ・ 日本語を勉強したい人の経歴を活かしてほしい。 ・ コミュニケーションを取るためにはそのきっかけづくりが必要。そのためには何を話題にするか迷うところだが、共通点探しという方法はおもしろかった。自分では気付かない共通点がいっぱいあることも実感できた。
キーワード
<ul style="list-style-type: none"> ・ 対話の組み立て方 ・ 共通点を探そう ・ 共に日本語を学ぶ ・ リアルなコミュニケーション
自分への宿題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 共通の話題を見つけてそれを広げて(対話まで)行きたい。 ・ 今回紹介されたゲーム「共通点探し」を日本語教室の交流会でやってみる。 ・ 相手との関係をどんどん広げる方法を考える。 ・ 共通点(相違点)を見いだすことでコミュニケーションの枠を広げていくことの実践。 ・ ワークシートの活用。 ・ 友人との会話の中で”共通点さがし”実践。

第4回 「地域日本語教室の実践」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語教室(活動)の振り返り(反省会)は必要と感じましたが(時間的制約もあるかなあ)でもやはりやるべきかな? ・ コーディネーターという仕事の重要性がわかりました。学習者とボランティアをより良い方向へ活用・共生(?)・幅を広げる ・ 外国人参加者も日本人参加者も「本領発揮」できる場づくりが大切。

<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションのきっかけは、色々あることを改めて感じた。ボランティアの日本語教室がたくさんあり、日本語だけでなく、いろいろな活動を通して交流を図っているのは、学習者だけでなくボランティアの人も楽しいと思う。 ・ いろいろな場所で、それぞれの特色を持った活動がなされていて、日本在住の外国人がそういう人たちに支えられているのだということを知り嬉しく感じたことと自分も何らかの形で参加してみたいと思った。
<p>キーワード</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 気負わず楽しく。 ・ 多様な日本語学習がある。 ・ 形にとらわれない活動。 ・ よりよい活動とはへの問いかけ。急がず焦らず近からず遠からずの距離でいつでもそこにある。 ・ ご近所さんとしてできることを考え、実行する。
<p>自分への宿題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒さんが今一番やりたいことを改めて聞いてみる。 ・ よりよい活動の見直し(具体的に) ・ 日本語教室について自分でも調べてみる。時間があれば見学に行ってみる。 ・ 現在様々な形で外国人の日本語、生活の支援が行われていることを職場の人に話をして感想を聞く。

<p>第5回 「コミュニケーション・相互理解・学習支援」</p>
<p>ふりかえり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 演習は初級レベルと上級レベルそれぞれ1人に対応し、どのレベルに合わせるかで難しく。打ち解けるまではぎこちなかった。教える場合は打ち解けるまでの時間をどうするか、雰囲気づくりが大事だと分かった。実際のトレーニングは面白かったが、極めて難しかった。経験が重要だと思う。 ・ It is important to use visual aids and body language especially with beginners. ・ 人とつながるといいのは良いものだった。他の人のアプローチの仕方をメモしながら参観することで学んだことがたくさんあった。 ・ 地域の日本語教室の実態がわかった。活動団体の紹介。協力者を交えての対話はリアルであった。 ・ とにかく相手のことをよく聞く。やさしい日本語で情報をしっかりとしっかり伝えることがとても大切だと感じた。

5-3 研修各回自治体担当者を含む研修実施者ふりかえり

本研修では、研修各回終了後、当日参加した関係者全員（講師、コーディネーター、運営スタッフ、自治体担当者、オブザーバー参加者（自治体関係者等）で内部ふりかえりを行った。自治体職員が実際の研修に参加し、研修中に起こったことについて研修講師とともにふりかえる時間を共有することは、研修実施者にとっては自治体職員の考えや抱えている地域の課題を知る機会となり、自治体職員にとっては研修実施者が研修内で行ったことの意味を理解する機会となった。この場を共有したことは双方が互いの視点を共有していくために有効であり、研修実施地域のために共に研修を作っているという実感をもたらし、研修実施のPDCAを回していくためにも有効であった。

また、自治体職員からは学習支援者育成に関するコメントだけではなく、「行政としてどう外国人に対して対応して行くべきか、まだ具体的にはわからない部分はあるが、方向性がわかった」というコメントも上がっていた。

5-4 e-ラーニング実施結果

参加者：12名（研修参加者33名中） *参加者のうち半分が未経験者であった。

以下の表は、e-ラーニングについての最終アンケートである。

e-ラーニング最終アンケート

	【1】 e-ラーニング配信内容をどのぐらいご覧になりましたか。	【2】 e-ラーニングの内容は研修内容の興味を広げるために役立ちましたか。	【3】 e-ラーニングの内容について、良かった点、改善点、ご感想など、ご自由にご記入ください。
1	全5回見た	役立った	私は5回すべて講座に参加することができました。日本語学習支援という未知の世界に挑んだ私にとって、e-ラーニングは講座のフォローアップや補充という観点で有効な学習方法でした。配信有難うございました。良かった点：紹介いただいた書籍、教材など、すべてに目を通し、ダウンロードできるものはすべてダウンロードしました。それらをパソコン上にフォルダーを作成し、保存しています。教材などはどのものが良いのか現段階では判断に困っておりますが、後程内容を吟味したいと思います。また、紹介いただいた書籍、「やさしい日本語」、「コンビニ外国人」、「新移民時代 外国人労働者と共にいきる」に加えて、図書館で見つけた「必携 日本語ボランティアの基礎知識」も読破しました。とくに、「必携 日本語ボランティアの基礎知識」の中では、ボランティアの役割として、日本語学習支援者に加えて、「草の根国際カウンセラー」としての役割もあるのではないのでしょうか、との記述もありました。改善点：5回目の講座終了後の懇親会の開催、二回にわたるアンケート結果分析の発表があったら、良いと思いました。いずれにせよ、参加者の属性が広範囲にわたり、今回の講座がどのような属性に的を絞ったのか分かりませんが、お疲れ様でした。またの講座を期待しております。以上"
2	全5回見た	役立った	講座受講前にも複数のサイトは閲覧した経験があるが、体系的に関連サイトの閲覧を促すという点で有意義だったと思います。講座の理解度が高まった。ちなみに、e-ラーニングの位置づけは、講座で十分な時間を取れない部分の補習的な意味合いが強いのではないか、つまりグループディスカッションの延長線上にあって、意見集約の場という期待がありましたが、その点ではちょっと残念な気がします。
3	全5回見た	役立った	いろいろな情報提供情報提供があり、自分の都合で見ることができるのが良かったです。
4	全5回見た	役立った	講習の振り返りに役立った。内容が豊富なのだが、自分の時間が取れずゆっくりみることが出来なかった。お知らせしてもらってサイトをブックマークして後日必要などきに見たい。

1 成果

研修中の参加者からの直接のコメントには「毎回情報提供された資料を図書館に借りに行き読んでいる(経験なし男性)」、「平日仕事で活用できていないが、資料はダウンロードしている。(経験なし女性)」
「(PCでの閲覧前提は承知の上) スマホで見られる範囲で見たいので登録したい」というものがあった。これらや最終アンケートのコメントから、「限られた研修時間を有効活用し、参加者に研修内容についての興味をさらに広げてもらう」というeラーニングの目的はある程度達成できたと言えよう。

2 課題

- ・今回のeラーニングは、研修企画時には講座の復習などすることも考えていたが、実際には各回関連情報の配信となった。
- ・情報提供が主となりPCで資料をダウンロードして見るものが多かった。学習内容の確認などを主とする場合は、スマホやタブレットのみでも利用できるようにした方が、利用者は増えるかもしれない。
- ・情報提供の際は内容的に重いもの(じっくり読む必要があるもの)と軽いもの(気軽で、楽しめるもの)、教室活動に利用しやすいものなどをなるべく組み合わせるようにしたが、提供情報の吟味はできていない。今後、eラーニング併用を考える際には、どの情報を何のために提供するか、どのような視点で読んでもらいたいかをあらかじめ検討することも必要かと思われる。

5-5 参加者定量評価とふりかえり分析

「研修各回実績」(表7)に、各回のふりかえりで参加者が記入した定量評価をまとめた。各回内容について「よかった」、「わかった」という指標で5段階評価の結果、全ての回において「4」以上が9割以上を占めた。

また、各回の学習者ふりかえりを分析した結果をまとめた。「養成・研修報告」p.34(表11)「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」の「知識」(1)～(5)、「技能」(1)～(4)、「態度」(1)～(5)に関して、ふりかえり内で言及されたものの番号を記した。

「報告」内(表11)において、それぞれの能力表記は以下のように記述されている。

「知識」:「～を理解している」「～を持っている」

「技能」:「～ことができる」

「態度」:「～ようとする」

しかし、参加者が研修終了時にそれぞれの資質・能力について本当に「理解している」のか、「～ことができる」ようになったのかの判断は難しい。このため、本ふりかえり分析においては、ふりかえりに記述された内容の中で、「資質・能力」の各項目に関する言及に対し、「その入り口に立った」とみなし、以下のように判断することとした。

「知識」:「～について理解するための新たな知識を得た」

「技能」:「「～ことができる」ようになるために、そのための方法を知り、体験した」

「態度」:「「～ようとする」ことが必要なことを知り、そうしたいと感じた」

参加者がふりかえりに記述する内容は各回の内容の中で、参加者の心に残ったものである。このことから、「資質・能力」の各項目に関するふりかえり内記述は、参加者が該当項目について、特に「目を向け考えた」項目であるとみなし、評価できるものであると考える。

以下、表6で分析の一例を示す。

表6 ふりかえりコメント分析例

	「養成・研修報告」表11 資質・能力	参加者ふりかえり記述
知識 (1)	日本語や日本文化、社会、多文化共生に対する一般的な知識・理解を持っている。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本・越谷が対面していることがよくわかりました。私も**近くに住んでいるので実感することが多いです。 ・生活面にばかり気をとられていて、全体像がわからなかった。社会的にどうなっているのかわかりました。
技能 (1)	分かりやすく伝えるために、学習者に合わせて自身の日本語を調整することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・相手のレベルにあわせて分かりやすい短い文で会話しようと思った ・わかりやすい日本語使うには普段から心がける必要がある。
態度 (1)	学習者の背景や現状を理解しようとする。	<ul style="list-style-type: none"> ・目の前の人々がどれだけの日本語を理解しているのか、まずそのことをすることが第一と思った。 ・岐阜大垣市の子供の話をポリビア人だからといってポリビアすべてを背負っているわけではないので、ステレオタイプで見ないことが大切であると思いました。

「報告」内の資質・能力に当てはまらない学びに言及があるものについては、その内容を「資質・能力」以外の学びにまとめた。

各回の「「資質・能力」以外の学び」の特筆すべき点をまとめる。

第1回では、「学びに対する視点」、「個の文化への視点」、「文化の捉え方」などへの言及があった。本研修は「学習支援者」養成のための研修であるが、そもそも支援する「学習」とはどのようなものであるか、その捉え方は参加者個人の学習経験によるものが大きい。研修内で参加者の「学習」イメージの幅を広げ、「学習」とは何かを考える視点を増やすことは、実際に学習者の「学習」を支援する際に大きく影響すると考えられる重要な点である。

また、「個の文化への視点」そして「文化の捉え方」は本研修の柱となっているものである。「養成・研修報告」(表11)において望まれる「知識」に「多文化共生」、「異文化理解」に関する一般知識を持つことが含まれているが、「学習」と同様、「文化」そのものをどのように捉えるかは、「多文化共生」、「異文化理解」についての理解にも大きく影響するものであり、学習者との関わり方を「私たち日本人」と「あなたたち」という二項対立にしないためにも学ぶべき点である。

第3回では、「社会における言語使用に関する問題意識」、「自身のコミュニケーションのふりかえり」、「実践・経験の重要性」への言及が見られた。「技能」(1)、(2)に含まれる「自身の発話を調整することができる」ためには、まず自身のコミュニケーションをふりかえる必要がある。自分たちの身の回りにおける言語使用について目を向けること、そして無意識に行なっているコミュニケーションについて考えることは、日本語非母語話者に接する場面のみならず、母語話者同士が接する場面においても役立つものである。しかしながら「自身の発話を調整する」ことは必ずしも容易なものではないことが参加者のふりかえりにも表れている。「態度」(4)に含まれる「学習者の学びを育む」という点については、他者の学びを育むだけでなく、学習支援者自らも「学び手」として学び続ける「態度」を持つ必要性を付け加えたい。

第3回、第4回では、共通して「個のリソースの活用への視点」、「人がもともと持つリソースへの視点」への言及が見られた。日本語学習支援はとすれば「日本語」の部分のみに目がいきがちだが、学習者自身、そしてその人の持つ言語能力以外の側面に目を向け、関心を持つことは学習支援を豊かにするも

のである。これらの「個」を大切に生かしていくという視点は、本研修の柱となっている第1回の「個の文化への視点」に連なるものである。学習支援者養成研修においては、このような理念を具体的に学習支援の方法の中にどのように表すことができるかを示していくことが重要である。

また、第4回では「居場所」への言及が見られた。2007年から2010年度にかけて、地域日本語教室の実態調査を行い、現場の状況を精査・議論してまとめられたCINGA地域日本語実践研究会(2018)においては、地域日本語教室の機能として「居場所」「交流」「地域参加」「国際理解」「日本語学習」の5つがあり、その最も基本的な機能がこの「居場所」であるとしている。

(『多文化共生の地域日本語教室をめざして 居場所づくりと参加型学習教材』CINGA地域日本語実践研究会(2018) p.7、松柏社)

表7 研修各回実績(2018)

日程	内容	回	教育内容	担当	内容	知識	技能	態度	「資質・能力」以外の学び	定量評価(5段階)
			課長挨拶							
			事前アンケート		アンケート(ポータルサイト)説明、実施、回収(事務局個人ファイル保管)					【よかった】 5: 17/25 4: 8/25
2018/12/15	学習者の背景理解	1	アイスブレイク		(問い)受講の理由や期待					【よかった】 5: 19/25 4: 5/25 3: 1/25
			研修説明	神吉	基本的な視点、研修目的、研修プログラム、地域における日本語教室の位置づけ理想図、地域日本語教育システム図、多文化共生のための日本語教室理想図	1 2 3 4	なし	1 2 5	・個の文化への視点 ・学びに対する視点 ・自身の行動のふりかえり ・経験と結びつけた学び ・文化の捉え方	
13:00 - 16:30	文化とは、多文化とは、多文化共生とは		①学習者の背景に対する理解	神吉	地域の日本語教育背景理解(全国、越谷、政策の変遷、政治と法律の動き) グループ対抗クイズ形式	(ねらい 1 2 3)		(ねらい 1 2 5)		【よかった】 5: 21/25 4: 4/25
			②多文化共生	山西	・「レヌカの学び」ワークショップ ・文化とは、人の間・人の中にある多文化、文化を取り巻く状況、多文化共生の捉え方					【よかった】 5: 15/25 4: 9/25 3: 1/25
			④異文化理解							
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有					
			⑤見学案内	浅井	市内日本語教室見学案内告知					
2018/12/22	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎	2	前回のふりかえり		宿題結果の共有 前回のキーワード共有					【よかった】 5: 14/22 4: 7/22 1: 1/22
13:30 - 16:30			⑥a コミュニケーションスキル	西山	・初級学習者のスピーチ動画視聴 ・やさしい日本語の導入・作り方・練習 ・広報の内容を伝える演習	2 4 5	1 2	なし?	・社会における言語仕様に対する問題意識 ・自身のコミュニケーションのふりかえり ・実践・経験の重要性	【よかった】 5: 17/21 4: 5/21
			⑥a 日本語学習支援	高浪	・コミュニケーションの要素 ・3つのきき方(聴く・待つ)演習 ・実際の対話事例紹介	(ねらい 4 5)	(ねらい 1 2)	(ねらい 2 3)		【よかった】 5: 16/22 4: 5/22 3: 1/22
			⑦コミュニケーション教育		・日本語学習支援と文化理解の両立をめざすコミュニケーションのあり方について					【よかった】 5: 16/22 4: 5/22 3: 1/22
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有					
2019/1/12	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴	3	前回のふりかえり		宿題結果の共有					【よかった】 5: 16/26 4: 9/26 1: 1/26
13:30 - 16:30			⑥b 活動の流れ	矢部	・講師自己紹介(日本語学習支援実践、越谷との関係) ・共通点探しのワーク ・地域日本語活動の中での対話とは ・YOKEの活動事例紹介、教材紹介 ・共通点探して使いやすいやさしい表現 ・対話のトピック	5	1 2	2 3 5	・個のリソースの活用への視点	【よかった】 5: 17/26 4: 9/26
			(⑧日本語の構造)		・「日本語これだけ」サポートサイト動画視聴/活用方法についての意見交換、ロールプレイ	(ねらい 4 5)	(ねらい 1 2)	(ねらい 2 3 4)		
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有					
1/19	地域日本語教室の実践	4	前回のふりかえり		宿題結果の共有					【よかった】 5: 20/28 4: 7/28 3: 1/28
13:30 - 16:30			⑤地域日本語教育の多様性	矢崎	・さばうと21の団体紹介、取組紹介、参加者インタビュー動画視聴 ・演習「書き初め一文字」 ・地域日本語教室とは：埼玉県内日本語教室2箇所紹介(にほんごのへや(さいたま観光国際交流協会)、戸田市国際交流協会) ・受講者の教室見学先・所属先について3行でまとめる	2 4 5	なし	2 3	・自己理解 ・ふりかえりの重要性 ・人がもともと持つリソースへの視点 ・居場所という機能への視点 ・日本語学習以外の機能への視点	【よかった】 5: 19/28 4: 8/28 3: 1/28
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有					
1/26	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援	5	13:00-13:30		協力者打ち合わせ					【よかった】 5: 18/25 4: 5/25 3: 2/25
13:30 - 16:30			⑥c 活動演習	神吉	・外国人協力者との演習(協力者13人、受講者24人) 「生活している外国人のためのスピーチコンテストのテーマを考える」など4つのお題 観察者と演習者に分かれて、随時ふりかえり×2ターン	2 5	1 2	2 3		
			まとめ		・受講者の所属団体自己紹介 ・第1回-第4回ふりかえりシートの疑問質問への回答 ・講座全体のふりかえり記入(15分)、 ・属性別セッション(これからやってみたいこと、続けたいこと)	(ねらい 2 5)	ねらい 3 5)	(ねらい 3 5)		
			研修全体の振り返り		振り返り					

5-6 研修全体についての参加者コメントとコメント分析

このふりかえり項目は、研修全回を通して、参加者がどのような点を意識していたか、また、研修受講前後における自らの意識の変化があったかについて尋ねたものである。

本事業では研修を通して、下記を事業目的とした。よって、研修全体に対しての参加者からのコメントについて、事業目的内に含まれるABCの3点を分析の観点とし、これらの観点がどのように捉えられているかを項目毎に色分けした。また研修受講前と受講後とで参加者自身に変化が見られたかどうかを特記に記した。

当事業の目的は、日本語学習支援を行う市民を育成する研修を整備・実施することである。市民が研修を受けることで**言語調整能力を上げることの大切さ**、**相手のことばを受容することの大切さ**に気づき、その気づきや視点を日常生活の中で活かすことを通してよりよい市民社会を形成していくことを目指す。また、参加者がその気づきや視点を基盤として日本語教室などの市民活動において外国人と接することにより、**相互学習**の中で実効性ある日本語コミュニケーション支援ができるようになることを目指す。

分析の観点：

A **言語調整能力を上げること** B **相手の言葉を受容すること** C **相互学習・相互理解・文化理解**

1. 成果

下記の結果から、大多数の参加者が上記に挙げた観点についての意識を高めたことがうかがわれる。

研修前と研修後の変化については、「参加者自身のふりかえり」となったこと、これからの活動をする上で「意欲が向上」したこと、「視点が広がった」ことなどが挙がっている。

2. 課題

本アンケートは、研修第5回の外国人協力者とのセッション終了後に書かれたものである。アンケートの趣旨は研修全回を通しての学びと意識の変容に関して聞くものであったが、参加者の回答を見ると、第5回の研修内容に影響されていると思われるものが多く、研修全回をふりかえって書かれたものというより、第5回の感想が書かれたものという印象は否めない。研修全体をふりかえって考えるためには、プログラムの学習内容の配置の再考が必要である。

【質問項目1】	【質問項目2】	特記
この講座全体を通して、自分自身の学びや変化について、特に意識していることはなんですか。どうしてそのことを特に意識していると思いますか。	この講座全体を通して、環境や気持ちの変化はありましたか。あったとしたらどんな変化ですか。その変化はなぜ起きたと思いますか。なぜそれを変化と捉えましたか。	
講座全体を通して考えた事は、文化理解と日本語支援との関係でした。個人的には、講座に期待していたのはまさに文化理解であり、正直に言えば、文化理解は道半ばの状態です。頭で理解しても感情的には納得いかない部分があった。日本人の精神性という観点から文化理解を進めてもよかったのではないかと思う。	文化に対する認識 が少し変化した。多様な講座の小問から多角的な視点を得ることができた。多文化理解(共生)は多角的な視点を持つことと解すべきとの結論を得た(現時点での解)。	意識変化
待つ、聴く、やさしい日本語 この講座を通して、改めてこの言葉の重要性を認識した。	途中からの参加だったので特に大きな変化はないが、上記のことに関して、今後も意識して取り組	変化なし

	んでいきたい。	
自分の中で理解していることも、相手にとっては難しかったりするので、その時の 対応の仕方がわかってきた 。特に意識することは、 やさしい日本語 で相手の話を ゆっくり聞く ことでそれによって 相手の気持ちもわかってくる と思うから。	自分よがりにならず、 相手をもっとよく知る ということに時間をかけるようになった。それは実際の様子や話を聞いたからだと思う。	
①コミュニケーションのきっかけづくりをどうするか。② 分かりやすい日本語を使用 。	日本語教室での活動に生かしたい。数回の講義の中で認識した。	
「 聴く・待つ 」の姿勢は、常に受け止め活かして学習者に支援するを意識している。	感情や気持ちの変化は特にない。	変化なし
教える人が一方的に話したり、質問したりするのはなく 学習者にも話す環境 を作る。コミュニケーションとりながら、今までやってきた学習内容を確認する。楽しさや信頼関係にも通じると思う。	今までは学習者のことを思って学習指導してきたがその学習者に対して適切な指導ができていたのか?という思いを抱いていた。今回講習会に参加してみて、コミュニケーションの大切さ、指導者と学習者、 相互に積極的にコミュニケーションをとり相手のスピードと合わせる(待つ) ことをやってみたいと思う。	指導者として
日本語支援にはいろいろな方法があるということ。形にとらわれず 参加者が必要としていることを優先 してあげる。なぜならば今までテキストに沿って忠実に進めていったほうが良いと思っていたので。	生徒さんに話をするとき、自分が一方的に質問したり話を最後まで聞かずに勝手に解釈して誘導したり、即英語で言ってしまったりしていた。しかしこの講座を通して、自分が 一方的に質問することなく相手の話をじっくり聞いてあげ、分かりやすい日本語で話す ように心がけられるようになった。	教授観変化、自身のふりかえり
学習者に聞いてみたいと思う事柄に対し、 こちら側はあまり多くをしゃべらない 。簡単で適切な言葉を常に意識しようと思う。ひとつの質問に対して意味は同じでも多くの言葉の羅列では学習者は戸惑う。	なんでもグローバル化(画一化、効率化)が理解されやすいのではと考えるが少々面倒でも(時間がかかっても) その人・国の文化を尊重 せねば...と考える。	
母語としての日本語を特に発話するときに 相手に理解できるように留意 することに気付かされた。外国の人との会話はもちろん留意が必要だと思うが、日本人同士でも生活、興味などにおいての日本語の使い方が、共通理解できているとは限らないのではないかと思わされた。	今ボランティアとして関わっている日本語でgoに続けて関わりながら、一緒に学ぶ外国の人たちと 親しくコミュニケーション できるための教材を身の回りの事柄から探そうと思った。その辺りは講座を通して自分の足元をしっかり見据えることの大切さを学んだから。	日常生活への取り入れ、視点の変化
相手をよく知る、共通点を見つける、相手の思いに気づく→相手を尊重すること→相手の気持ちになること 。これは自分自身に向けても同じことが言えると感じた。 相手が何を望んでいるのか、どんな言葉がけを期待しているのかを意識 。	スムーズに交流できるように、気持ちのありよう、教材、方法をたくさん持ちたい。今までは思っても行動に移すことができなかった。よりよい教室となるために私たちがこれからも学習していくこと、新しい図書の購入、他の教室の参観などしていきたく考えた。	視点の変化・広がり
やさしい日本語 を使って、 お互いが共感して学び合う ということを意識し分かりあう努力をしている。	話をよく聞き、沈黙を恐れないように、待つことを学んだ。	

<p>それぞれの文化=(その国で培われてきた一人一人のアイデンティティ)を受け入れ、違いを認め合うことから相互理解が深まっていくことに気づいた。</p>		
<p>The importance of knowing the learners background. やさしいにほんご and our use of visual aids etc. especially for beginners. The ability to listen wait and allow the learner to do most of the talking.</p>	<p>Expressing my thoughts in Japanese. But with the inputs from the speakers bookshops and group sharing's, I am more encouraged to do something not only do Filipino students in Japan who are struggling with their Japanese at school but to all students with foreign routes in general.</p>	<p>意欲向上</p>
<p>意識して相手の話を聞く側に回る。そして話が膨らみやすいような態度や相槌をうって示すことに注意したいと考えるようになった。コミュニケーションというのは一方的ではいけないから、まずはわかりやすいところから始めるのがよいと思ったから。</p>	<p>感情や気持ちの変化は無いかもしれない。つまり日本語ボランティアと言いながらも自己満足で終結する傾向があり、相手のことをいちばん考えていると言いながらも、ボランティアすることで自分が楽しんでいる。楽しくなかったらやらないわけなので、この矛盾にとっても複雑な思っている。このことの解決にはこの5回の講座では得るものなかった。</p>	<p>変化なし</p>
<p>多文化共生のまちづくり、生活者としての日本人と生活者としての外国人市民が「対話」を通し安心して暮らすための疑問、知りたいこと、学びたいことを、どこかで情報を受け止めて、専門家やサポーターなどに振り分けていただき、両生活者が多くの負荷を抱え込まない、ネットワークを作れる社会がいいと思う。</p>	<p>市内の日本語教室支援団体を再確認できた。今後外国人労働者が増加した場合、企業の労働者の日本語支援要望書が増える。どう対応するか。相手を理解する共通項を探し、対話し信頼関係を作る大切さ。私は一方的に話す癖があるため「十分聞く、沈黙」を心がけたい。</p>	<p>体制に言及、まちづくり、自己のふりかえり</p>
<p>講座から吸収できるものはもらい実践でいかしている自分がイメージできるから。</p>	<p>正直、なんとなく参加をし、継続できるのか不安があったが、休みは一回のみ、4回参加でき、現場にきていたことは自分にとって魅力を感じていたからだろう。その魅力は人と人とのつながりであったと思う。職場以外での日本語に関する情報と人との出会いは大きなものだと思う。</p>	<p>自己変化、ネットワーク形成</p>
<p>相手のことをしることが大切。そのためにはやさしい日本語を使い相手の話をじっくりゆっくり考える時間をとりながらよく聞く。実際にレベルが違うベトナム青年に日本語を教える時、一人ひとりにあった対応をこれからも心がけたいと思うから。</p>	<p>国語学習と日本語学習が違うということを再認識した。私がやろうとしているのは国語学習ではないかと思った。でももうかなり日本語話せる青年に対してはそれも必要かなと思う。まだ初期の段階の青年には別のやり方を考えていかなければと考えている。私の中での変化は漠然と思っていたことをはっきり認識したこと。</p>	<p>自己のふりかえり</p>
<p>形式にとらわれないで学習者のペースに合わせて行くこと。</p>	<p>ゲーム感覚の中で学習者に理解していただく手法を学ぶ</p>	

<p>コミュニケーションのやり取りがいちばん大切だということ。当初何か特別な資格や英語能力などが必要なのかと思っていたが、日本語で話ができることが大切だと学べた。</p>	<p>日本語が話せれば自分も何か支援ができるのかもと前向きな気持ちになった。</p>	<p>意欲向上</p>
<p>日本語ボランティアでは教えることだけを考えていて自分が正しく教えることができるか不安だったが、教えるより学ぶという姿勢を意識することが大切だと思うようになった。学ぶという姿勢はコミュニケーションの基礎になるのでは？</p>	<p>日本語ボランティアをやってみたくてという気持ちはより強くなった。実際に教室の見学に行ってみると楽しそうであり、生徒が上達しているくれることに喜びも見いだせるかもしれないから。</p>	<p>意欲向上</p>
<p>学んだことをどのように実践できるか、自分だったらどのようにするかを意識しながら受講できたと思う。今まではボランティアは自分には難しいと思っていたので今後の活動に活かしていきたいと考えるから。</p>	<p>専門家の方や実際に活動されている方たちの話を聞くことができてとても刺激になった。ボランティア経験がない自分にとってハードルが高かったが活動されている方々と触れ合うことができ、気持ちがあれは誰でもできることだと感じたことが変化。またやさしい日本語や相手の話をよく聞くこと待つことの重要性を学べたことが自分自身の蓄積となった。</p>	<p>意識変化、意欲向上</p>
<p>新聞の読み方に変化あり。外国から日本に就労目的で入ってくる人たちの問題にとっても関心を抱くようになった。身近に外国人と接する機会がますますを考へ、コミュニケーションの方法を学びたいと思うようになった。</p>	<p>身近に住む外国人と積極的に関わらなければ共生できなくなるという危機感を持つようになった。来日して苦勞している外国人の実態を知るようになって。</p>	<p>意識変化、社会づくり</p>
<p>外国人市民に対する人権意識（差別の禁止、不平等な扱いの禁止など）を高めることは重要である。</p>	<p>お互いに地域生活者として情報を共有し、安全安心な暮らしを「近所の人」として、共に楽しまなければならないことを改めて感じた。</p>	<p>社会づくり</p>
<p>同じく外国人の立場から考えて、日本に来た目的によって日本語の学習期間が違ったり、(日本語学校、日本語教室、小中学校など)して学習者が本当に勉強したいところまでできるかどうか少し気になった。生活者としての外国人にとって日本語教室の大事さを改めて感じた。</p>	<p>第5回の外国人との交流やディスカッションにより留学生ではなく生活者として日本にいきなり来日した人たちの日本語支援には「日本語教室」は欠かせないのではないかなと思った。</p>	<p>体制整備</p>

5-7 研修終了時アンケート

終了時アンケートでは、研修の実施方法や回数などについて定量評価、また今後の改善のために必要な点について記述を求めた。

1. 成果

研修内容については概ね満足を得ることができた。研修開始時には馴染みのないふりかえりの方法を負担に感じるという声もあったが、終了時のアンケートからは全体的にはふりかえりの方法についての負担感は軽減されたものと思われる。自らの学びを記し、他者と共有するという学びのプロセスに慣れ、受け入れられたものと考えられる。今後研修に取り入れるといいと思うこととして、「外国人協力者との実際の関わり」や「当事者の声」が多く上がっており、参加者の実際の活動に対する意欲の向上がうかがわれる。

2. 課題

全体の回数と各回の時間数に負担を感じたという回答が3割強見られた。回数や時間数についての負担感は、研修実施時期や参加者の年齢層によって配慮が必要な点となる。また、学習支援活動経験の有無や、ディスカッションへの慣れ等の違いにより、研修内容や研修方法に考慮が必要となる。

2018CINGA越谷研修「日本語学習支援と文化理解を学ぶ市民講座」 終了時アンケート結果							
	5	4	3	2	1	無回答	コメント
連続講座の内容はいかがでしたか。	17	10	1	0	0		
講座で文化理解と日本語学習支援の方法を学ぶことができましたか。	10	17	1	0	0		
外国人との交流やコミュニケーションについて、考えが深まりましたか。	17	8	3	0	0		
「多文化共生の地域づくり」について、考えが深まりましたか。	15	8	5	0	0		
受講前の期待に対していかがでしたか。	①期待通り 21		②期待と違った 6		1		<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい回と疲れた回があった ・文化理解のアプローチについて期待と違った ・悩んでいることがもう少し解決できると思った ・日本語の教え方が中心だと思っていた。 ・すでに活動をしている方が対象である内容とこれからと考えている方が対象のものがあまり明白でなく、その分内容が多少うすれてしまったかも。
グループワークなどの活動はいかがでしたか。	14	10	4	0	0		
毎回、講座と宿題のふりかえりを書いたり話したりすることは学びの役に立ちましたか。	10	11	7	0	0		
全5回という回数はいかがでしたか。	①多い 10		②ちょうどいい 16		③少ない 2		10回 1人 3回 8人
1回3時間という長さはいかがでしたか。	①長い 10		②ちょうどいい 18		③短い 2		2時間 6人
日本語学習支援と文化理解を学ぶために、どんな内容を講座に取り入れるといいと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・外国の方も交流して参加する講座も加わると良い ・実践につながるもの。第4回の内容を多く。 ・その人のこと、国の事業が知りたいと思う気持ちが大事だと思うが禁止事項等あれば教えていただきたい ・実技 ・具体的な指導の実演 ・具体的なイベントの企画の仕方について ・外国人に日本語や日本文化についてスピーチをしてもらい意見を述べ合う ・検討する時間が短かった。議論と言う位置づけの小問も必要ではないか 						<ul style="list-style-type: none"> ・最終回のコミュニケーションを外国人ととるワークショップは良かった。日本人同士で講座の最初の段階で実践しても良いのではないか。 ・具体的な活動の紹介(文化理解のための) ・実践例、支援の様子 ・日本の講師だけでなく、外国人、日本での生活者の生の言葉を聞きたい。 ・具体的な教材の紹介、越谷の本屋ではなかなか見られないし、手に入らない。 ・学習支援者としては、学習者の求めるものは多様であると感じているので別の視点からのアプローチがあるとよいと思います。 ・越谷市内在住住民の現状についてまた各サークルの抱える問題について考えてもと思います。

講座内容や運営に関し、良かった点、改善点、その他ご自由にコメントをお書きください。

【構成・内容】

- ・ 貴重な学びの機会となった
- ・ 内容が多岐にわたりよかったがちょっと盛りだくさんだと思った。
- ・ ケーススタディーの様々な例の紹介とその対応策についてたくさんたくさん知りたい
- ・ 日本語学習支援と言う内容なので私の悩み解決とまではいかなかったが、だからといってどんな講座内容がいいのかというのまではわからない。でもボランティアの人たちと話をすることによってまたいろいろ考えてみようと思う。
- ・ 第一回開講時に参加者の属性についてのまとめを発表すればよかった気がする。(参加者の経験年数等が知りたかった)
- ・ 時間回数が長い
- ・ 1回の講座時間が長かった気がする
- ・ 今回のプログラムはプロを目指す人や日本語教室のリーダー、自治体の多文化共生推進者向けがベター。一般のボランティアにはついていくのが難しい
- ・ 思った以上に中身の濃い学習ができた。
- ・ 多文化共生をこれからいろいろ考える場となった
- ・ 実際の様子をもっと入れたほうが良い
- ・ 学習支援者に対する接し方を学ばせてもらった。基本的なことも再認識でき早速実践している(やさしい日本語で伝える、聞く待つ姿勢)
- ・ 2回、4回、5回がとてもよかった
- ・ よく計画整備された講座だった
- ・ 教材の選択肢が増えた。
- ・ 自分たちの活動以外、国の方針、他自治体、他日本語教室の概要をつかむことができた

・ 毎回内容が充実していてそれを日本語の教室に戻り意識して実践することができました。講座の振り返りもよかったです。

講師の方々の熱意も十分伝わってきました。同時に越谷市としてさらにプロを交えた外国人対応をしたほうが良いと思いました。

ボランティアだけでは進歩できないと思います。5回しかも年末年始を挟んだ時期はとてよかったです。

以前から決めていた約束をいくつ かキャンセルせざるをえませんでした。知り合いも日程を見て断念した人が何人かいます。

・ 今回は内容としては盛りだくさんでよかったら、それぞれの内容をもっと深めていくことも必要だと感じた。

・ 今回のような講座が年に1回でも開催があることにより活動見直ししてみる機会となりとてもよかったです。

また、後日送られてくる課題と関連のある内容のメールがとても役に立ちそうよかったです。

ただ、やはり思うことは情報がたくさんあるものも、本当に欲している方に届いていないことがとても残念です。

【方法】

・ 日本語ボランティア未経験の私にとっては全てよかった。単に聴講するだけでなく、グループワークが中心で楽しく学ぶことができた。

・ 最後の会の時の外国人協力者との演習は講師の先生方の模範演習を見てみたかった

・ アンケート等が細かすぎる。全員ではなく書きたい人が書けば良い

・ いろいろなグループワークの実践がとても良かった。

・ グループで練習を行うことで、色々な人と知り合うことができた。

5-8 各回の成果と課題

研修各回担当講師により各回の成果と課題を以下に示す。以下は、研修実施の際の参加者の様子や反応、また1～6までに示した学習者のふりかえりとその分析を総合的に見た上で、研修担当講師が思う各回の成果と課題である。

第1回 「学習者の背景理解」 「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」
成果 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化理解(文化・多文化・多文化共生)に関して、「レヌカの学び」を通して、方法論的特性もかわり、それなりの理解を得たこと。 ・ 外国人受け入れに関する全体像を提示できたことや、実施地域である越谷市の状況を参加者に十分理解してもらったことである。また地域での支援活動を行う上での基本的な考え方について提示できたこと。
課題 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間的制約もあり、文化理解というものを、自分ごとさらには自らの生活・学習上のニーズにどれだけ引き付けられたのかに関しては、確認することは難しかった。 ・ 日本に來ている外国人、働いている外国人の背景等について、もう少し全体像を伝えられるとよかった。
第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」
成果 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回の考え方の上にある「個」を知るための対話における「やさしい日本語」の必要性和「社会」に目を向けた「やさしい日本語」この双方の観点を提示することができた。「資質・能力」以外の学びとして、「社会における言語使用に対する問題意識」に対する気づきがあった。 ・ 「聴く・待つ」という技術が単なるコミュニケーションスキルにとどまらず、相手のことばを受け止めようとする姿勢につながることを演習をとおして感じてもらうことができた。
課題 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「やさしい日本語」についてすでに他講座受講などで知識のある一部の参加者にとっては物足りない内容であった。また、演習時間の不足、課題に対する適切な問いかけの選定が課題として残った。 ・ 一部のコメントからは、「聴く・待つ」という技術が「文化理解」や「日本語学習支援」よりは、よりよく日本語を教えることにつながると捉えられているように感じた。目標は、後続の回や学習活動の現場支援をとおして少しずつ浸透すると考えられる。
第3回 「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」
成果 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 対話の進め方や話題の広げ方やコミュニケーションツールの提示ができたこと、日本語教授よりも双方向のコミュニケーションの大切さ相互理解が大切だとの気づきが参加者に生まれたことが挙げられる。また、対話の中で共感したり、視点の違いを認識したりすることへの大切さについての気づきもあった。
課題 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 数多くの教材の中から、自分たちの活動(学習者のレベル、興味、自分ができることなど)と合うものを、どのように取舍選択するかが実際には難しいとの参加者の声があった。 ・ コーディネーターが支援者それぞれの現場を共有し、ケースにあわせて教材や活動の方法をアドバイ

<p>スするなどの個別のサポートをしてこそ効果がある。コーディネーターを置かず展開する教室でも、公的教室のコーディネーターが、そのような相談にも応じる体制があれば、市民の自立したグループの活動も進めやすくなると考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 市販の教科書や出版社のサイトを研修で使用する場合は、どのような手続きをとるのが適切なのか、検討が必要。
第4回 「地域日本語教室の実践」
<p>成果 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「多くの人が集まる「学びの場」だからこそ可能な活動について考えてみる」「地域日本語教育の多様な活動を知る」「自身の(現在もしくはこれから)の活動を考える」ことができた。 ・ 「コーディネーターの存在の必要性」や「振り返りの必要性」など、講座内で明文化して伝えなかったことにも言及した参加者評価が見られた。複数の教室の活動例を動画等含めて紹介したことは参加者に考えるきっかけを与えていた。
<p>課題 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「より身近な事例」と思い、県内の活動を紹介したりもしたが、最も身近にある参加者の方々が実際に関わっている活動に歩み寄ることができなかった。普段、講座を行う際は、できる限り事前に教室見学等を行ってから、講座内容を検討することが多いが、今回は、他の「好事例」を紹介することを優先させてしまった。

第5回 「コミュニケーション・相互理解・学習支援」
<p>成果 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4回目までに実施した内容を実践的に試してみる機会が持てた。
<p>課題 (研修実施の様子と学習者ふりかえりから)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「この実践に関する取り組みや視点について個人差が大きく、なんのためにシミュレーションをしているのかが十分に理解できていない参加者もいたように見受けられる。講師から参加者に対する活動の指示をさらに明確化する必要があると同時に、参加者の能力・学習経験等に合わせた負荷の調整が必要なのではないかと感じた。 ・ 講師の研修実施時の感覚と参加者の評価に齟齬があった。参加者が研修に対して何をどう評価しているのか、評価自体が信頼に足るものかなど、改めて検証が必要なのではないか。

5-9 自治体職員コメント

CINGA 越谷日本語学習支援者研修のふりかえり

平成31年2月18日(月) 越谷市 担当職員

感想

標準的なカリキュラムが完成して、日本全国でこの講座が開催できるようになれば、地域の課題が見えるのに具体的な解決方法に辿りつけない自治体職員にとって、どれほど大きな励みになるかと思います。

開催期間中に様々なトラブルがありましたが、コーディネーターの方々に参加者だけでなく自治体職員にまでよりそって伴走していただけたことは、本当にありがたい限りでした。

良かれと思っていることでも、相手の経験や思いによって異なる受け取られ方をすることがあり、その溝を埋めながら新たな信頼関係を構築するには、かなりの時間と根気と覚悟がいると痛感し、市役所職員として自分に足りなかったことに気づけました。

成果

課題解決という目標を共有する既存の日本語教室との信頼関係を構築できた。

まずは一度実践できたことで、次回以降の道筋がより具体化した。

越谷市国際交流協会からの見学者があり、今後のイメージを共有しながら協議できるようになった。

★日本語教室を直営していないので、どこまで既存教室の参加者たちにとって有益だったかは推測ですが、皆さん「勉強になった!」とたくさん伝えてくださっています。

課題

新規希望者の維持：講座で学んだことを具体的に活かせる機会の有無は、出欠に直結するように思います。一方で、ふんわり「今後活動したいなあ、具体的な予定はないけれど」というような方たち、とりわけ若い世代の心理的なハードルを下げつつ、漠然とした興味をいかに具体的な活動につなげていくか、検討が必要です。

今後の自治体としての施策展開：講座参加者にこの後どのように活躍してもらうのか、予算を確保してコーディネーターを配置すれば全て解決するのか、そもそもコーディネーターは越谷という地域でどのような職務を担うのか等々、自治体職員として考えることがたくさんあります。

職員として大変だったこと

学習協力者集めのために日本語教室の方々にかかなりの負担をかけてしまったこと

ふりかえりという形式に慣れていない参加者の誤解を解くこと：単発でとにかく講座に出席すれば終わりという内容ではない以上、参加者からの様々な要望や苦情を傾聴しつつ、個々のモチベーションを維持するように働きかける必要を痛感しました。

5-10 研修全体に関しての外部事業評価委員からのコメント

- 時代と環境の変化が激しい今、それに合わせた日本語教室の在り方が必要になる。立場に関係なく日本語教室に関わるすべての人々が教室運営の主体になる必要がある。効率的な学習方法の模索や異文化理解による多様性を持った日本語教室へ変化し、日本語教室が単なる学習場所ではなく居場所としての役割を果たすためには、コーディネーターが必要であるが、今回の研修を経て受講生の多くがその存在の重要性を実感する機会となったのではないかと感じた。
- 各回のプログラムにつながりがあり、連続講座の良さが生かされた研修会だと思った。受託者、各講座の講師、行政職員が、連携をとり、一緒に作り上げる研修となっていた。事業の目的を達成するにあたり、日本語教師と行政との連携は欠かせないと感じた。
- 年齢層の高い世代は、コミュニケーションを学ぶことになじみがないと思われるので、研修会により若い世代も取りこめると、多様性によって参加者同士の学びが深まるし、もっと共感を得られると感じた。
- 参加者の感想に多くあった「聴く・待つ・相手に合わせたわかりやすい話し方」への気づきは、対外国人に関わらず、対人コミュニケーションに必要な要素。外国人と接すること（多文化共生のための関わり）をきっかけに、外国人との接触に限らず、地域全体がより風通しがよくなることに寄与できることを伝えていけると良い。
- 参加者の終了時アンケートやふりかえりコメントから、事業目的として謳われていた「言語調整能力を上げること」「相手の言葉を受容すること」「相互学習の中で実効性ある日本語コミュニケーション支援ができるようになること」といった点について、今回の講座運営においては、全体としては一定の達成ラインに到達できたのではないかと感じた。一方、日本語学習支援を行う「市民の育成」という事業目的については、あらためて意識する機会が限られていたようにも感じられた。「越谷市で」外国人に対して日本語支援をする「市民」になる、ということがどういうことなのか、正面から向き合ってみる機会があるとより

よかった。

- 目の前に同じ状況があり、同じ目的に向かって同じ内容の研修・講座を行うのであっても、全体を把握したコーディネーター人材がいるといないとは大違いだろうと、本事業のコーディネーターの方々を見て思った。今後、本事業をモデルとして各地で同様の研修が展開されていくうえでは、こうした、コーディネーター人材の発掘も、重要になってくるだろうと考える。
- 担当職員の報告が、非常にリアリティに満ちたものだった。自治体職員の声も広く共有され、今後活かされると良い。

5-11 研修全体に関する内部委員からのコメントまとめ

- 文化理解、相互学習という観点からは、できる人はできていたし、できていない人はできていないという印象がある。
- 支援経験のある参加者は、自身の支援のイメージに引きつけて理解しようとする傾向が強いので、なかなかアンラーンが進まないのではないかと感じた。一方で、支援経験のない参加者に対しては、理念や方法など、研修を通して実現したかったことをある程度伝えられたのではないかと感じている。
- 「内容・方法において文化理解や相互学習を促進するものになっていたか。」「学習支援者に望まれる資質・能力」の向上につながり、また「資質・能力」に新たな観点を盛り込むことができていたか」という点からは、高く評価できると思う一方で、この「カリキュラム案」が公開されても、それを実行できる地域がどのくらいにあるのかは疑問でもある。「熱心な自治体職員」「コーディネーター」「講師」が具体的にどのように動き、どの程度の時間とお金をかければ、実施できるカリキュラムなのか示されないと、「やってみよう」という地域はなかなか現れないかもしれない。「やれそう」と見せていく仕掛けは必要だろうと思う。
- 文化理解や相互学習の重要性は、参加型のワークを通して、体験的にも理解が深まったと思われる。「資質能力」の「知識」については今回の研修で「十分な知識を得た」「十分に理解した」ということではなく、「これから知識を得ようとする基盤ができた」ということではないだろうか。技能の(3)(4)は「日本語教師」や「日本語教育コーディネーター」【とともに】という前提での技能なので、どのように評価したらいいか今回の状況では難しい。「態度」については、明らかに向上を図れたという感触がある。
- 今回の講座名に「文化理解」を入れたこと、そして「地域多言語・多文化教室イメージ図」をみんなで確認しあったこと、などは大きな意味があった。ただ、この点に関してみんなで十分な振り返りをできなかったとも感じている。この点から文化庁の「資質・能力」をどう超えられるのか、またそのためにはどのような方法が求められるのか、引き続き協議したい。
- あまり完成されたプログラムをつくらせると、地元から見ると柔軟性・汎用性のないものになる危険性もある。プログラムは作り過ぎず、隙間・遊びをつくらせおき、学習者そして地域コーディネーターとの話し合いの中で地元のニーズに対応できる柔軟性のあるものにしておくことが必要だと思う。
- 各回の内容については、交流や対話による文化理解について学べたとするコメントがある一方で、日本語学習については文化理解とは別物として捉えているコメントもあり、文化理解と日本語学習の関係が十分に理解されたとは言えない。
- 研修実施にあたって、対象者を誰とするかは今後どの地域で研修を行うことになってても課題になるだろう。体制整備と研修をセットで考えていかない限り、持続的な効果を期待することは難しいように思う。体制整備が整わない場合でも、研修実施先の自治体などが継続して参加者それぞれの活動をふりかえる場を持つ仕組み作りをすることなど、本研修をどのように次につなげていくのかを考えていく必要がある。

第3章
2019年度
(2年目)

6. 教育課程の検討 (2019)

1年目の事業評価委員会で、カリキュラムについて一定の評価が得られたこと、また、2回に渡り同じ研修を実施することによって比較や事業全体の客観的な評価ができることから、教育課程の大きな見直しはしないこととなった。但し、以下の点については、2年目の研修プログラムの入れ替えを行なった。

日本語学習者との実践活動体験（演習）

1年目は日本語学習者との実践活動体験を全5回のうち最終回の前半に行なったため、演習の余韻が後半の研修全体のふりかえりまで影響した。そこで、演習は4回目に行い、5回目はより全体的なふりかえりと実践の計画づくりに集中できるよう、変更した。

表8 研修カリキュラム (2019)

回	時間数	テーマ	教育内容	内容	ねらいとする資質・能力		
					知識	技能	態度
1	3時間	学習者の背景理解 文化とは、多文化とは、多文化共生とは	① 学習者の背景に対する理解	・実施地域の外国人住民状況、地域の日本語教育の背景理解 ・全国、地域、政策の変遷、政治と法律の動き	1, 2, 3	なし	1, 2, 5
			② 多文化共生 ③ コミュニケーションストラテジー ④ 異文化理解 ふりかえり	・文化とは、文化を取り巻く状況、多文化共生の捉え方 ・文化理解に関する体験学習			
2	3時間	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎	個々の取り組みのふりかえり ⑥ 日本語学習支援_コミュニケーションスキル (③ コミュニケーションストラテジー)	・やさしい日本語とは、作り方、練習	4, 5	1, 2	2, 3
			⑥ 日本語学習支援_コミュニケーションスキル (③ コミュニケーションストラテジー) ⑦ コミュニケーション教育 ふりかえり	・コミュニケーションの要素 ・相手の話を受け止めるための配慮、技能 ・日本語学習支援と文化理解の両立をめざすコミュニケーションのあり方			
3	3時間	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴	個々の取り組みのふりかえり ⑥ 日本語学習支援_活動の流れ、リソース ⑧ 日本語の構造 ふりかえり	・対話型学習活動 ・地域日本語教室の活動事例、教材紹介 ・対話で使用する日本語	4, 5	1, 2	2, 3, 4
			ふりかえり				
4	3時間	相互理解を深めるための地域日本語教室の実践	個々の取り組みのふりかえり ⑤ 地域日本語教育の多様性 ⑥ 日本語学習支援_活動演習 ふりかえり	・日本語学習支援団体の取組紹介 ・文化理解につながる活動の演習 ・地域日本語教室とは ・外国人協力者との対話	5	3, 4	3, 4
			ふりかえり				
5	3時間	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」	⑥ 日本語学習支援_活動の流れ、リソース	・日本語教室活動の組み立て	2, 5	なし	3, 5
			まとめ	研修全体のふりかえり			

7. 教材の検討・開発 (2019)

本事業では日本語学習支援者研修の実施を検討している地域のために、2カ年で2種の教材を作成した。本項では開発の目的とプロセスを述べる。教材の種類とその使用方法等、詳細については別添の「教材」を参照されたい。

教材1 研修の枠組みを示した教材

1-1 研修各回の流れ

教材2 研修使用教材の例

2-1 学習項目シート

2-2 学習項目カード

2-3 ふりかえりシート

2-4 研修各回使用教材例

7-1 教材1 研修の枠組みを示した教材

教材1-1 「研修各回の流れ」

研修実施のプログラム実績を基にして、各回の流れ、枠組みを示したものである。日本語学習支援者研修を企画・設計するコーディネーターや地域担当者の使用を想定している。

日本語学習支援者研修は、日本語教師研修と異なり、より地域密着である。多くの場合、日本語教師が担う日本語教育が一定期間のコースを前提にしているのに対し、日本語学習支援者が活躍する日本語教室は地域に根ざした恒常的なコミュニティである。そのため、日本語学習支援者の研修においては、参加者の出口となりうる研修実施地域の既存の日本語教室の状況や、新たに教室を立ち上げる場合のリソース、まちの理念など、地域ごとに異なる状況を把握した上で、地域の日本語教育体制構築を担う担当者やコーディネーターが研修設計に携わることが求められる。よって、本事業で開発したカリキュラムは、各地域の状況に合わせて具体的な内容が作られることを想定している。教材1は、研修をつくる際の枠組みとして柔軟に利用できるように作成した。設計者には、教材とともにこの報告書を読み、研修の理念や、教育課程の検討・研修実施・評価までのプロセスを知っていただきたい。だれが・何のために・どうやって・どのような研修をつくり、実施し、どのような結果を・どう評価したか、を知ることで、各地域に最適化した研修が作れるものと考ええる。

7-2 教材2 研修使用教材の例

研修実施のために作成し使用した教材等である。

教材2-1 学習項目シート

研修の目標は「資質・能力」の向上である。その目標を研修参加者に明示するため、学習項目シートを作成した。2018年度版は「資質・能力」の各項目の表現をより易しく親しみやすい表現に書き換えてリスト化し、研修の開始時と終了時に各項目についての理解度を自己評価してもらう形式にした。シートの目的は、これらの項目を意識しながら研修に参加してもらうことと、研修終了時に各項目についての自身の学びをふりかえってもらうことであり、必ずしも自己評価が高いほどよいとは考えない。ある項目について、開始時はわかっていると思って終了時にはより深く考えたことで自己評価が下がることもあり、それも研修の成果であると考えた。

2018年版を研修で使用した結果、以下の課題が見つかった。

- ・ 初回は研修の説明など、情報提供が多く、ゆっくり自己評価をしてもらうことが難しい。
- ・ 日本語学習支援活動の経験がない参加者にとっては、項目の意味を理解するのが難しい。

- ・ よくわからないことについて、「知らない」と自己評価をさせることは、初回の緊張の中であって更に不安を助長する。

そこで、2年目は以下の改良を行なった。

- ・ 「資質・能力」の項目のうち、統合できるものを統合して数を絞り、キーワードに置き換えた。初回にシートを配布するほか、壁一面に項目を貼り出しておき、関心がある項目にシールを貼るといった使い方をした。研修終了時のふりかえりツールとして学習項目カードを作成した。

使用した結果、1年目の課題を解決することができたほか、最終回に研修全体での学びを協働的に言語化するために活用することができた。

教材2-2 学習項目カード

研修開始時に学習目標として配布する学習項目シートのキーワードをカード化し、最終回にグループ単位で研修をふりかえる際のツールとして使用した。各キーワードが研修各回の内容のいずれとつながっていたか、自分にとって重要なキーワードはどれかを話してもらったり、最も重要なキーワードをグループで5つ決めてもらったりすることで、目標に則した研修の学びを言語化するというまとめの活動ができる。

教材2-3 ふりかえりシート

本研修のカリキュラムでは、参加者がそれぞれに研修での気づきや学びを言語化するというプロセスをとおして研修内容が参加者個々の中に入っていくという考えのもとに、ふりかえりを重視している。ふりかえりシートは、研修の限られた時間の中で効果的なふりかえりができるように作成した。各研修の最後に書く時間を十分に設け、まず個々に研修をふりかえってもらい、その後、グループ内で各自が気づいたこと感じたことを話し、共有してもらおうという使い方をした。

また、次の回までに自分で取り組む「宿題」を決め、書き込む欄をシートに設けた。各自、決めた内容を他者に話しておき、次の回の冒頭に、宿題に取り組んだ結果をペアで報告しあう、という使い方ができる。これにより、研修の日に学ぶだけでなく、研修と研修の間の時間も自身で決めたことに取り組むことで参加者自身のPDCAによって研修を主体的に進めていくことができる。

● 2018年度の課題を踏まえて改善した点

各回の内容についての評価項目のうち、スケールの両端を「わかった」「わからなかった」という表現にしていたが、参加者が自身の能力を評価するものと捉えられる可能性があり、評価をつけにくいのではないかと、という意見が委員から挙がった。そこで2年目は「わかりやすかった」「わかりにくかった」という指標に修正した。

● ふりかえりシート使用時の注意点

研修実施者や講師にとって、参加者のふりかえりコメントは、実施した研修がどうであったかを知ることができる貴重な情報でもある。しかし、ふりかえりシートはアンケートではなく、その主たる目的は書くことによって参加者自身が研修に意味づけをすることである。昨今、多くのワークショップなどで同様の活動が取り入れられているが、日本語学習支援者研修の参加者の中には、こうした形式に慣れない人も多い。「書かされている」といった負担を感じながらでは効果が見込めないため、ふりかえりシートの目的について丁寧な説明が欠かせない。十分に留意が必要である。

教材2-4 研修各回使用教材例

各回を担当した講師が作成した教材を基にした。既に述べたように日本語学習支援者研修の内容は、各地域の状況や講師の持つ経験・事例に合わせて作られることが重要である。「教材例」は、教材1「研修の枠組み」と併せ見ることで、各回の構成や内容例がイメージしやすくなることをねらいとした。

学習項目シート (2018)

「わかる・できる・おもう」チェックシート

受講番号

このシートはこの研修で皆さんと一緒に考えていきたいことを項目立てしたものです。
理解を評価するものではなく、最終日の振り返りの材料とするものです。

	「わかる・できる・おもう」チェック項目	研修前日に合の上期に○ 研修最終日にダレの下期に○	
		はい	いいえ
1	わかる1-1 「多文化共生」とは何かわかる。	3	2 1 0
2	わかる1-2 現在の日本における外国人に関わる問題を知っている。	3	2 1 0
3	わかる2-1 日本語教室という学びの場に関わる人や機関それぞれに期待される役割がわかる。	3	2 1 0
4	わかる2-2 現在、随谷市内にはどのような日本語学習の場があるか知っている。	3	2 1 0
5	わかる3-1 現在、随谷で生活している外国人の来日の経緯や文化背景について知っている。	3	2 1 0
6	わかる3-2 自分とは異なる文化を持つ人と出会ったとき、どのように接すればよいかわかる。	3	2 1 0
7	わかる4-1 日本語学習支援とは何かかわかる。	3	2 1 0
8	わかる4-2 日本語の特徴がわかる。	3	2 1 0
9	できる1-1 わかりやすく伝えるために、相手に合わせて自分の日本語を調整することができる。	3	2 1 0
10	できる1-2 相手が話しやすいように聞いたり、耳を傾けたりすることができる。	3	2 1 0
11	できる2-1 日本語教育コーディネーターや日本語教師とともに、日本語学習を支援できる。	3	2 1 0
12	できる2-2 日本語教室での活動において、相手に合わせて学習方法や学習内容を工夫することができる。	3	2 1 0
13	できる3-1 教室参加者が自分のことばや文化を表現することを手助けすることができる。	3	2 1 0
14	おもう1-1 教室参加者の背景や現状を理解しようと思う。	3	2 1 0
15	おもう1-2 教室参加者のことばや文化を尊重し、対等な立場で接しようと思う。	3	2 1 0
16	おもう2-1 学びの場では出会う人々と良好な人間関係を築こうと思う。	3	2 1 0
17	おもう2-2 学びの場において、人が自ら学ぼうとする力を育み、その学びに寄り添おうと思う。	3	2 1 0
18	おもう3-1 異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を保とうと思う。	3	2 1 0

※本チェックシートは研修前日と最終日に使用しますので、個人ファイルに入れておいてください。

教材2-1 学習項目シート (2019)

港区「日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座」2019 第1回 資料2

日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座—多文化共生のまちづくりをめざして

一学習項目一

このシートは、この講座で考えること・学ぶことを項目化したものです。

多文化共生 外国人の来日の経緯や文化背景 日本語教室に関わる人や機関の役割

現在の日本における外国人に関わる問題 日本語学習支援者、日本語教育コーディネーター、日本語教師の役割

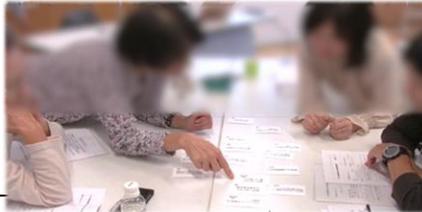
島の文化への視点 相手に合わせた日本語学習支援

港区の日本語学習の場 相手に合わせた話し方、聴き方 日本語の特徴

「わたしらしさ」を表現する手助け

住民相互の協力による地域づくり

相手のことばや文化を尊重して、対等な立場で接すること
人が自ら学ぼうとする力を育み、その学びに寄り添う
異なる考えや価値観を持つ他者との協働
良好な人間関係作り



←学習項目カード(教材2-2)を使って
講座全体のふりかえり

教材2-3 ふりかえりシート

受講番号

【1】 講座の内容がわかりやすかったか。 【2】 内容はわかりやすかったですか。

よかった 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 5 4 3 2 1 1

よくなかった 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 1 2 3 4 5 1

(理由:) (理由:)

●気づいたこと、感じたこと

●よくわからなかったこと、疑問に残ったこと

受講番号

●本日のあなたのキーワード

「 」

●次回までの自分への宿題
次の講座までの前もってすることを決めましょう。
(例: 今日の講座で知ったことを家族に話して感想をさく/日常生活の中で実践してみる
お風呂の中でもう一度テーマについて考えてみる)

●第3回(1月12日)に自分で決めた宿題のうち、できたこと

●やってみて思ったこと、感じたこと
(例: 相手の反応が以前と変わった/意識すると意外にできるものだった)

8. 研修の実施（2019）

8-1 研修実施場所

2019年度の研修実施場所は東京都港区とした。2018年度に課題となった研修と実践の場の連続性が保てることが選定理由となった。2018年度の研修で行った実践ふりかえり支援において、研修で行った内容を、コーディネーターが学習支援者の学習支援の場へ赴き、実際に教室の学習支援者、学習者とともに試してみることではじめて研修内容の有効性を実感してもらえるものであるという実感を得た。研修は、研修を行っただけでは実践につながる可能性が低く、研修の後のサポートまでをコーディネーターが行ってこそ研修を行う意味がある。そこで、2019年度より地域日本語教育コーディネーターを配置することとなった港区において、本研修を実施することとなった。

8-2 地域日本語教室の実施状況

- ・港区国際交流協会日本語講座（区の助成制度あり）
- ・日本語教室13団体
- ・港区では2018年度より「やさしい日本語」による交流促進事業として、研修やマッチングの取組を実施。

8-3 研修実施の背景

* 「港区国際化推進プラン～多文化共生社会における外国人の地域参画と協働の推進～」改訂版平成30年度～平成32年度 p.8 より

港区では「国際化」とは「多文化共生社会の推進」であるとし、外国人は日本人と共に支え合う地域社会の一員であるということを重視し、「多文化共生社会における外国人の地域参画と協働の推進」を目指しているが、下記の現状と課題があり、課題解決のための取り組みを進めている。

- ① 地域活動に参加したい外国人は約60%だが、実際に地域コミュニティに参加している人は約20%に留まる。
- ② 港区の対応言語（英語・中国語・ハングル）では不十分だと考える外国人が3年前の調査より増加傾向。
- ③ 外国人が地域活動をする時に必要なサポートとして、言葉に関する配慮への要望が上位を占める。
- ④ 「やさしい日本語」の文章が分かる人は7割を超え、普通の日本語の文章と比較して理解度が高い傾向。
- ⑤ 現在日本語を学んでいない外国人のうち、半数以上が「今後学びたい」と考えている。

これらの現状から、「外国人と日本人の言葉の壁を解消すること」が課題とされている。

8-4 実施期間

2019年9月28日～11月16日 土曜日 全5回

8-5 受講人数

21名

8-6 研修の目的

2018年度同様のため、割愛する。

8-7 研修の方法

2018年度同様のため、割愛する。

8-8 e-ラーニング

方法、目的は2018年度同様のため、割愛する。

日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座 港区

—多文化共生の地域づくりをめざして—

この講座では、日本語学習支援や文化理解を深める方法を学ぶことで、地域に住む外国人との交流やコミュニケーションについて考えます。講義だけではなく、ワークショップ、事例の検討などを通して、受講者同士がともに考え、話し合いながら学んでいく講座です。

日程 2019年9月28日、10月12日、10月26日、11月9日、11月16日 土曜日全5回

対象 外国人支援や日本語ボランティア、外国人との地域活動を行っている方や
行う意思のある方で、全5回全ての講座に出席できる方

場所 六本木区民協働スペース

参加費 無料（要事前申し込み・定員30名）
*定員を超えた場合は抽選



地下鉄日比谷線「六本木」駅1b出口より徒歩1分
地下鉄大江戸線「六本木」駅3出口より徒歩3分

日時	内容・講師
第1回 9/28 (土) 13:00-16:30	学習者の背景理解 講師：神吉宇一 日本社会における外国人や日本語教育の状況はどうなっているのでしょうか。データを元に、現状について概観します。 文化とは、多文化とは、多文化共生とは 講師：山西優二 人間はなぜ文化をつくり出すのでしょうか。ワークショップを交えつつ、自分・他者と出会う中で、文化・多文化・多文化共生について考えます。
第2回 10/12 (土) 13:00-16:00	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎 講師：西山陽子・萬浪絵理 日本語でのやりとり慣れていない外国人と相互理解を図るため、また、適切な学習支援を行うためには、コミュニケーションに工夫が要ります。話し手・聞き手としての基礎「やさしい日本語」と「聴く・待つ」方法を演習で学びます。
第3回 10/26 (土) 13:00-16:00	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴 講師：矢部まゆみ 日本語学習支援のために、地域ボランティアとしてできる活動はどのようなものなのでしょうか。役立つ素材には何があるのでしょうか。相互理解を深める対話活動を体験しながら、日本語学習の支援をしていく方法を探りましょう。外国人の視点から見た日本語の特徴についても考えます。
第4回 11/9 (土) 13:00-16:00	相互理解を深めるための地域日本語教室の実践 講師：矢崎理恵 多様な人々が集まり、共に活動する「地域日本語教室」では、実際にどのような活動が行われているのでしょうか。「教室」はどのような課題を抱え、どのようにその課題を解決しようとしているのでしょうか。相互理解を目指した日本語教室をどう展開させていくか、実践事例を知り、参加者皆で活動を体験しながら考えてみましょう。
第5回 11/16 (土) 13:00-16:00	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」 講師：神吉宇一 コミュニケーションを通して相互理解を深めたり、日本語学習支援を行ったりするには、どのような取り組みをすればよいのでしょうか。5回の研修のまとめとして、これまでの学びをふりかえり、これからどのように「多文化共生の地域づくり」に関わっていくことができるかを考えていきます。

9. 実践ふりかえり支援 (2019)

9-1 実施場所

六本木中学校

9-2 実施日

2020年2月7日 16:00-17:30

9-3 参加者

研修修了者、港区在住外国人

9-4 内容

研修実施地域（港区）の試行教室での対話型学習活動の実施、および終了後のふりかえりと意見交換。
研修修了者6名と外国人参加者4名が参加し、「学校」というテーマで、各自の学校時代の思い出や、国の学校の特長について表現しあう活動をおこなった。基本的には、意思疎通に問題を生じたときも本人の対処の方法に任せ、ふりかえりの際に内省できるように図った。

1. 成果

- ・ 研修終了時には実践について不安を感じている参加者も多かったが、生き生きと楽しそうに活動に参加する様子が目立ち、実践支援が自信につながった。
- ・ 意思疎通が難しいとき、やさしい日本語で言い換えたり、文字を書いたり、スマホで写真を見せたり、とそれぞれに研修での学びを活かして対処できていた。
- ・ 終了前に外国人を交えて感想を言う時間にも、「自分のあり方」に目を向けた内省のことばが多く聞かれた。ふりかえり重視の研修で身についた姿勢と考えられる。

2. 課題

- ・ 日本語がA1レベル程度の人と話すと、両者がことばに詰まってしまう場面もあった。その場合にどう進めるかは、1回の支援で助言をするのではなく、長期的に協働で考えていく必要がある。

10. 研修評価 (2019)

10-1 修了者数と参加者層

15人（参加者21名中） *修了要件 出席率80%以上

想定される研修対象者①学習支援の活動を新規に希望する者、②現在、学習支援の活動をしている者2つの層のうち、①に属する参加者が6割強を占めた。

10-2 研修各回参加者ふりかえり（ふりかえり、キーワード、宿題）

第1回 「学習者の背景理解」 「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ これまで持っていた文化の概念が形を変えたように思います。人は一人一人違い、多くのバックグラウンドをもつ。それを持って力を合わせて問題解決しながらともに生きる。そのようなことの結果が文化になる。 ・ 興味はあっても深く考えたことがなかったので色々なデータとともに話して頂けて理解が少しできたような気がします。数字で見ると意外なこともたくさんあり興味深かったです ・ 日本において、外国人にとっての日本語の普及システムは、未成熟であることがわかった。また、今後もっと必要になってくだろう。 ・ 今度入社してくる外国人社員を受け入れる目で、「レヌカの学び」「問題解決のプロセスの中での文化理解」の視点を取り入れた取り組みをしてみたいと思った。 ・ 専門家による日本語教育にはないような日本語ボランティアならではの役割があることに気付いた。教育ではなく、コミュニケーションの場としての役割が大切だということを改めて感じた。
キーワード
<ul style="list-style-type: none"> ・ 共生・多文化共生とは ・ 個への理解、受容性 ・ 文化の多層性 ・ 問題解決のプロセスの中での文化理解 ・ レヌカの学び
自分への宿題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本日の資料をテキスト化し、自分オリジナルの資料としたい ・ 自分自身の文化的な背景を客観的に理解するために日常生活の中で出会う人々とたくさん話してみる。 ・ 今回講座で学んだことを、会社の人にシェアする ・ 今日インプットしたことを、周りの人にアウトプットしてみたい。身近な人達に港区に置ける外国人地域参画の取り組みについてふれたい。 ・ 自分を知る。自分の中にある多様性って何だろう。考えてみる
第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ どうしても「教える」「助ける」など上から下向への関係で考えてしまいがちでしたが、横並びの交流でなければ実際の助けにはなりにくいと感じてもらいました。講座を受けた今では最初の学習支援のイメージは随分変わりました。 ・ 日本語学習支援という言葉のイメージでは、1方向の関係が頭に浮かぶけれども、双方向のコミュニケーションで文化理解を

<p>図り、ひいてはそれが日本語学習支援につながるということがわかり、とても日本の国としての今からのあり方にまではまるという思いを強くもった。面白かったです。待つこと、空白の時間を恐れない姿勢で、私もやっていきたいと思えます</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 沈黙を恐れない、最後まで聴いて、待つことが大切 ・ 「やさしい日本語」を話すには気持ち（相手を理解しようという）が大切だとわかった。実際やってみるととても難しい、慣れることが大切だと感じた。 ・ たった90秒とはいえ、聞き続けることの難しさ、「待つ」ことの重要性を認識しました。
<p>キーワード</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 共生 ・ かかる時間への配慮・待つ ・ 双方向のコミュニケーションの努力 ・ やさしい日本語の変換 ・ 聴く・待つ
<p>自分への宿題</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ やさしい日本語で実際に話してみる。周りのみんなに。 ・ ニュースのこぼれをやさしい日本語に自分なりに直してみる。どんな風な言葉に変換できるか。 ・ 「聴く」「待つ」ことを日本人との会話の中でも増やしてみる ・ 日々の夫との会話を「話す」「聞く」に分けて客観的に観察する ・ 日本語学習者により多く話させ（前回の宿題）、更にもう一言話させるまで待つこと

<p>第3回 「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」</p>
<p>ふりかえり</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 対話をする中で教えたり、教えられたり、助けられたり、教えたり・・・までは意識してきましたが、新しいものを作り出す、という視点はありませんでした。でも、実際やってみると、互いの化学反応みたいなもので、何か新しいものが生み出せることは、ありそうな気がしてきました ・ 相手をよく理解しようとする（待つ、相手に伝わりやすいように伝える）。日本語の教育や多文化交流の上で大切なのももちろん理解できましたが、日本人同士のコミュニケーションにおいても普段から大切なように思いました。また、海外の方がこういうシーンで困っている・・・等、具体的な話も聞けて、寄り添う大切さに改めて気づきました。 ・ 共通点がしをやってみて、結構他人のことを知らない（または思い込みで認識している）ということに気づいた。 ・ ひとつのアクティビティでも、イラストを使うなどの工夫をすることによって、日本語を学び始めたばかりの人とでもいっしょに行うことができることがわかった。 ・ 「あなたの国はどう？」ではなくて「あなた」や「あなたの町では？」と聞いたほうが答えやすいことがわかりました。共通点探しては、一見あまり共通点がなさそうな人間同士でも見つけることおができて親近感がわいたので、日本語ボランティア教室の中でも取り入れていきたいです。また、活用できそうなHPを紹介していただき助かりました。
<p>キーワード</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 掘り下げる（ワークをやった中で、相手の言うことだけでなく、掘り下げるような聞き方ができた！それがうれしかった） ・ 想像力 ・ 話題を深める質問 ・ 対話を続けるコミュニケーション ・ 共通点を見つけていく！

自分への宿題
<ul style="list-style-type: none"> ・ やはり自分が言うことより聴くことを意識して取り入れたい（日常的に） ・ 日常生活の中で「やさしい日本語で説明する」練習をする ・ 今後実践したいことを考える ・ 会話の前に共通点を探るキーワードを考える ・ 周囲の人に対して、話題を深める質問をしてみる ・ 日本語教室で共通点探しをやってみる。妹に内容を話してみる。

第4回 「相互理解を深めるための地域日本語教室の実践」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語教室は、その教室にもよると思いますが、日本語の文法の学習にとどまらず、範囲を広げていけるものだということがわかり、興味深かった。“自分のできること”を活かしての協力は教える人（ボランティア）にとっても楽しいものになり、win-winの関係にもなりうると思いました。 ・ 途中で困難なことがあっても、中断があっても、あきらめずに続け、やりとげることが大切だと感じた。 ・ 学習者が求めている事（期待する事）が多々判ってきた。比較的簡単だと思っていた日本語教育の外国人支援はかなり難しいものだと理解した。海外生活を経験してきた点から言うと、英語での会話で、それなりの目的は果たせたが、日本語だけの相互理解は難しい。 ・ 一文字書道では、あまり意識していませんでしたが、日本語の4技能を使うよい練習だと思いました。また、自分の頭と心を使って考えると印象に残りやすいということが分かりました。実際に日本語学習者とお話するのは楽しくて勉強になりました。 ・ "さぼうと21"の様に生活全体を支えるような活動があることに感動したと思います。とても新鮮でした。

第5回 「コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」
ふりかえり
<ul style="list-style-type: none"> ・ グループワークや講座内容をとおしてこれまでの4回の講座で感じたり考えたりしていた様々なことが全体としてまとまってきました。それにより理解が深まったと感じています。 ・ 学習項目カードの内容見て、初めはちんぷんかんぷん（???）だった項目がかなり具体的に感じられるようになったことが嬉しかった。 ・ 何かを一緒に経験(体験)することでより多くのことを学べるし互いを理解できると再認識できた。 ・ 経験を通じて学ぶという点で、振り返り、自分の書いたものを読み返す、説明することの大切さを知る。 ・ 「多文化共生の地域づくり」は日本人だけで行うのではなく、企画や構想の段階から外国人を含めた多様な人たちで行っていくことで、そのプロセスそのものが多文化共生の一部になるのではないかと感じました。 ・ 具体的な教室での日本語支援についてワークショップを通じてイメージをもつことができました。 ・ 今年9月より日本語教室でお手伝いをしていることもあり、常に「どのように学習者」の方々向き合えばよいかを念頭に受講しておりました。初回より「教育ではなく、話す場所」その他自身にとって新しい考え方を得られたと思っています。

10-3 研修各回自治体担当者を含む研修ふりかえり

前年度同様に研修各回終了後、当日参加した関係者全員（講師、コーディネーター、運営スタッフ、自治体担当者、オブザーバー参加者（自治体関係者等）で内部ふりかえりを行った。

自治体職員からは「港区がこの事業で目指すのは、「外国人が地域の一員として社会に参加し、日本人／外国人問わず、誰もが主役になる」共生社会。外国人参加者が話しやすい学習支援の形を作ることが大切、という講座趣旨が参加者に伝わっていたと思う」というコメントがあるなど、研修に実際参加することで区の事業の目指すものと本研修が合致したものであるという実感を持ってもらうことができた。また、研修による参加者の変化を間近で感じてもらうことで「今後、この参加者のような方をどれだけ増やしていけるか。多文化共生の道筋が見えた」というコメントのように、研修の有効性を感じてもらうことができた。担当者間でのふりかえりの際、このようなコメントを直接聴くことができたことは、研修プログラムを作成した講師・コーディネーターにとって貴重なフィードバックとなった。

10-4 e-ラーニング実施結果

参加者：9名 ＊参加者以外1名含む（研修参加者21名中）

e-ラーニングについてのアンケート（最終アンケート）結果

質問内容	回答数
【1】 e-ラーニング配信内容をどのくらいご覧になりましたか。	
全5回見た（3） 4回見た（2） ＊第5回目の資料は興味があつたが時間がなく読めなかった（1）	5
【2】 e-ラーニングの内容は研修内容の興味を広げるために役立ちましたか。	
役立った（2） 少し役立った（3）	5
【3】 e-ラーニングの内容について、良かった点、改善点、ご感想など、ご自由にご記入ください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 紹介された書物を読みたいと思います。 ・ 漠然としていたことがよく理解できた。自分の好きな時間に見られるので助かった。 ・ e-ラーニングでは書籍の紹介が多く、そのうち読めば良いかなという程度の感想です。それより、多様性、共生社会について、簡潔にまとめられている新聞記事などを通して情報を得ました。 ・ 映像や書籍の案内は興味深く参考になりました。参考資料等はページ数が多く、港区HP等は時間的にも目を通すことが激しかったです。 ・ 研修会内容を整理しながら確認できることと、バラエティに富んだ参考資料がふんだんに紹介されている点が興味が深まる感じがしてとてもよかった。ただし時間的にボリュームが多くてせつかくの内容を消化しきれなかったのが残念に思った。結果としてさっくりながしてしまう形になったが、この先ひとつずつゆっくり読んでみようと思う。良い機会を与えられ、感謝している。 	5

1 成果

昨年度より各回に配信した学習チェックフォームへのコメント数は多かった。最終アンケートのコメントから、「限られた研修時間を有効活用し、参加者に研修内容についての興味をさらに広げてもらう」というe-ラーニングの目的はある程度達成できたと言えよう。

2 課題

昨年度同様、紹介資料はいくつかのタイプの違うものから興味のあるものを参加者自身が選択する形としていたが、資料の量が多かったとのコメントも見られた。紹介資料は厳選した数点を紹介するという方法もありかもしれない。

10-5 参加者定量評価とふりかえり分析

全ての回において、「わかりやすさ」については5段階評価中「4」以上が8割以上を占めた。「よかった」については「4」以上が7割～10割となった。

また、「資質・能力」以外の学びについては、概ね昨年度と変わらない内容が見られたが、それに加え、「協働学習の良さ」、「体験の重要性」、「学びの継続性」に関しての言及が目立った。このことは、体験や他者との協働を通して学ぶという本研修の意図がよく理解されたこと、そして今年度の参加者の多くがまだ日本語教室での活動経験がない「これから地域活動を行なっていきたい」層であったことと関連すると思われる。

表8 研修各回実績 (2019)

日程	内容	回	教育内容	担当	内容	知識	技能	態度	R1評価委員会 資料1		
									「資質・能力」以外の学び	定量評価 (5段階)	
			課長挨拶							【よかった】 5: 5/17 4: 8/17 3: 3/17 2: 1/17	
			事前アンケート		アンケート(ポートフォリオ) 説明, 実施, 回収(事務局個人ファイル保管)					【よかった】 5: 5/17 4: 8/17 3: 3/17 2: 1/17	
2019/9/28	学習者の背景理解	1	アイスブレイク			1 2 3 4 5	2			【よかった】 5: 5/17 4: 8/17 3: 3/17 2: 1/17	
			研修説明	神吉	基本的な視点、研修目的、研修プログラム、地域における日本語教室の位置づけ理想図、地域日本語教育システム図、多文化共生のための日本語教室理想図			2 5		・個の文化への視点 ・文化の捉え直し ・コミュニケーションにおける自己理解と他者理解の重要性	【わかり易さ】 5: 8/17 4: 6/17 3: 3/17
				市橋	港区の状況 (講師との掛け合い形式)						
13:00 - 16:30	文化とは、多文化とは、多文化共生とは		① 学習者の背景に対する理解	神吉	地域の日本語教育背景理解 (全国、越谷、政策の変遷、政治と法律の動き) グループ対抗クイズ形式	(ねらい 1 2 3)		(ねらい 1 2 5)		・個の理解 ・自分の地域理解 ・自己理解	【よかった】 5: 13/17 4: 3/17 3: 1/17
			② 多文化共生	山西	・「レヌカの学び」ワークショップ ・文化とは、人の中にある多文化、文化を取り巻く状況、多文化共生の捉え方						【わかり易さ】 5: 8/17 4: 7/17
			④ 異文化理解								
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有						
			⑤ 見学案内	浅井	振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有 市内日本語教室見学案内告知						
2019/10/19	相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎	2	前回のふりかえり		宿題結果の共有 前回のキーワード共有	5	1 2	2 4			【よかった】 5: 8/11 4: 2/11 3: 1/11
			⑥a コミュニケーションスキル	西山	・初級学習者のスピーチ動画視聴 ・やさしい日本語の導入・作り方・練習 ・防災情報 (台風) を伝える演習	(ねらい 4 5)	(ねらい 1 2)	(ねらい 2 3)		・体験からの学び ・学び続けること	【わかり易さ】 5: 8/11 4: 3/11
13:30 - 16:30			⑥a 日本語学習支援 ⑦ コミュニケーション教育	萬浪	・コミュニケーションの要素 ・3つのきき方 (聴く・待つ) 演習 ・実際の対話事例紹介 ・日本語学習支援と文化理解の両立をめざすコミュニケーションのあり方について						【よかった】 5: 7/11 4: 3/11 3: 1/11
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有						【わかり易さ】 5: 7/11 4: 2/11 3: 2/11
2019/10/26	市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴	3	前回のふりかえり		宿題結果の共有	2 5	1 2 4	2 3 5			【よかった】 5: 3/12 4: 5/12 3: 2/12 2: 2/12
13:30 - 16:30			⑥b 活動の流れ (⑧ 日本語の構造)	矢部	・講師自己紹介 (日本語教育、地域日本語教育、港区との関係) ・共通点探しのワーク ・地域日本語活動の中での対話とは ・YOKEの活動事例紹介、教材紹介 ・共通点探して使いやすいやさしい表現 ・対話のトピック ・教材紹介・活用方法についての意見交換、演習	(ねらい 4 5)	(ねらい 1 2)	(ねらい 2 3 4)		・個の文化 ・学び続けること ・ツール ・対話による学び	【わかり易さ】 5: 3/12 4: 7/12 2: 2/12
			本日の振り返り		振り返りシート記入、本日のキーワード、宿題記入、グループ共有						
11/9	地域日本語教室の実践	4	前回のふりかえり		宿題結果の共有	2 4 5	1 3 4	2 5			【よかった】 5: 9/14 4: 4/14 3: 1/14
13:30 - 16:30			⑤ 地域日本語教育の多様性 ⑥c 活動演習	矢崎	・さばうと21の団体紹介 ・参加者インタビュー動画視聴 ・取り組み紹介 (活動内容、これまでの課題と課題の解決について) ・外国人協力者との演習「一文字書道」	(ねらい 5)	(ねらい 3 4)	(ねらい 3 4)		・対話 ・自分の学び ・継続の大切さ ・日本語学習支援のあり方 ・体験・実践の重要性	【わかり易さ】 5: 9/14 4: 4/14 3: 1/14
			本日の振り返り		振り返りシート記入、(本日のキーワード・宿題記入: 個人の宿)						
11/16	コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援	5	13:00-13:30		宿題結果の共有	1 5	2	2			【よかった】 5: 10/13 4: 3/13
13:30 - 16:30			まとめ ⑥c 活動演習	神吉	・教室見学のシェア ・教室のスタイルについて ・全体ふりかえり (質問への回答、個人のふりかえり、学習項目カードで学びの再確認) ・グループワーク (学んだことを踏まえ、活動案を考える)	(ねらい 2 5)	ねらいなし	(ねらい 3 5)		・協働学習の良さ・効果 ・内省の大切さ ・学習支援のあり方 ・日本語教室のあり方	【わかり易さ】 5: 8/13 4: 4/13 3: 1/13
			まとめ 研修全体の振り返り		振り返り						

10-6 研修全体についての参加者コメントとコメント分析

このふりかえり項目は、研修全回を通して、参加者がどのような点を意識していたか、また、研修受講前後において、自らの意識の変化の有無について尋ねたものである。分析の方法や分析の観点は2018年度と同様とする。

分析の観点：

A 言語調整能力を上げること B 相手の言葉を受容すること C 相互学習・相互理解・文化理解

1. 成果

今年度の参加者コメントには上記に挙げた観点のうち、Cの相互学習・相互理解・文化理解について言及が非常に多い。この結果からは、「相互学習の中で実効性ある日本語コミュニケーション支援ができるようになることを目指す」という当事業の目的を参加者自らの体験を通して実感してもらえたことがうかがわれ、そのための研修の方法が受け入れられたことの表れであると考えられる。

研修前と研修後の変化については、「人の見方」「学びについての意識」「視点の広がり」が挙がっている。各回のふりかえりからもこの傾向はうかがわれるものである。本研修が、外国人区民の支援のみならず、「他者」と「自己」、そして「学び」について考える機会となっていたものと考えられる。

2. 課題

昨年度に比べて協働学習についての評価が高く、このことは実際に学習支援者として活動する際に良い効果をもたらすものと期待できるが、一方で、研修終了後に研修参加者が参加できる教室には、本研修で学んだことがそのまま活用できる日本語教室ばかりではないという現状がある。

講座全体 参加者ふりかえりデータ分析 (港区2019)

1. この講座全体を通して、自分自身の学びや変化について、特に意識していることはなんですか。どうしてそのことを特に意識していると思いますか。	2. この講座全体を通して、環境や気持ちの変化はありましたか。あったとしたらどんな変化ですか。その変化はなぜ起きたと思いますか。なぜそれを変化と捉えましたか。	特記
周りの全ての人々に対して外国人であるとか日本人であるとかに関わりなく、一人一人が違う文化を背負った個人であるという見方をするようになりました。同じ講座で知り合った方々ばかりでなく、家族を含めた全ての人に対してです。	上記の意識の変化によってこれからの人との接し方が変わるに違いないと思っています。大変嬉しい変化が起こり感謝しています。	人の見方の変化
上に書いた通り、はじめは雲をつかむような項目が、ひとつひとつ具体的に感じられるようになりました。各講座においてグループ内で意見を出し合うことで自分の考えもはっきりしてきて、その結果頭に入って来やすくなったのだと思います。	日本人が外国人におしえる(→)という一方的な矢印が共生(⇔)相互協働という認識に変わってきました。それは外国の方のためでもあり、海外の方を受け入れることで成り立っていくであろう日本人のためでもあるということがわかってきたからだだと思います。共生はマイナスに行く危険性もひめています。win-winになれるためには何かが必要かということを考えて行きたいと思っています。	自身のふりかえり、学習支援観の変化
相互に理解することが大切とは思いますが難しい。やさしい日本語にも段階があると思うし、お互いの個性、習慣の違いもある故。	参加して下さった外国の方がとても親しみ易く接して下さったので、失敗を恐れずこちらからも話しかけるように心がけたい。	体験からの学び

<p>・文化理解は一方通行ではなく相互に学び合うプロセスであること</p> <p>・お互い（学習者と支援者）の相互の尊重への努力があって多文化共存は実現できる。</p>	<p>（*あったとしたらどんな変化）→ “多様性” の認識</p> <p>（*その変化はなぜ起きたか）→ 「文化理解」は一言で言っても、文化は正に多様であり、国籍を問わず皆が異なる個であると実感した。今回研修に参加している日本人ですら皆異なるバックグラウンドを持っているし、共通認識やコンセンサスを取るのが難しかった。「仲良くする」ではなく互いに「妥協」してできるだけ多くの人により良い問題解決方法を探していくことが“多文化共存”にとって重要なことだと思った。</p>	
<p>（*学びや変化）各回のグループワークで他の人の意見を聞き話し合っ得られたものは多いです。</p>	<p>（*感情や気持ちの変化）本から学ぶこと以外に聞いたり話したり書いたりすることにより深まることを実感しました。</p>	<p>学びについての意識変化</p>
<p>外国人もいろいろな人がいることが当然だがそれと同時に日本人にも違いがある。それは当然だが共生するということが難しいことであると改めて理解した。</p>	<p>学習能力に差がありそれを地域の方であらゆる人が生き生きと暮らせるように支援したいという気持ちが強くなった。見学した日本語教室で特別支援が必要な外国人生徒を指導しているボランティアの人の姿を目の当たりにした。</p>	<p>意欲向上</p>
<p>「わかりやすく話す」は、小刻みに具体的にポイントであること、また、自分の国、環境も良く理解した上で話し合いをすることが重要。</p>	<p>ローコンテクストな対話</p>	
<p>グループワークの中で、他の方の意見を聞き、自分の意見を述べるのが大切な経験となりました。</p>	<p>個人では達成できないことでも、グループなど仲間がいれば“何か”できるように思えました。</p>	
<p>「やさしい日本語」という言葉が頭の中に住みついてきた感じがしてきた。日々の生活の中でこれは言いかえられるか？他にどう言うか？と無意識に考えている自分に気づくことがある。外国人のみならず高齢者やハンデがある人にもコミュニケーションのできる手段と感じた。</p>	<p>年と共に限られた世界の中で自分の考え第一というような生活をしているようだということに気づいた。言葉は用件を伝えるだけでなく、相手の考えや立場を理解するためのものという当たり前のことに今更だか気づいた気がする。</p>	<p>ことばに対する視点の変化</p>
<p>普段の生活の中では、どうしても価値観が似ている人と一緒にいがちになってしまっていますが、このような場に参加していろいろな背景の方々と接することで、自分の視野の狭さを実感すること、多文化共生の礎づくりには良いのではないかなと思うようになりました。（なので、毎回違う席に座ってみてよかったです。）</p>	<p>この講座で伺った内容が、自分が考えていたことと近いものが多く嬉しかったです。また、それに共感されている方も多くいらっしゃることを知れて心強く思いました。（これまで自分の周りには自分が自分に似た考えの人だけなのだろうか、と思っていたため）</p>	<p>自身の考えの補強</p>
<p>テーブルの仲間とのディスカッションで、協働の意識を高められたと思う。</p>	<p>「教える」と「学ぶ」の関係性を知り得たことで、もう少し外国人と接してみようと思いました。</p>	<p>意欲向上</p>

<p>相手を知らうとすること。多文化共生・・難しい言葉ですが、この講座に参加したことで日常でも意識ができました。</p>	<p>・日本語学習のあり方について 学校型のみならず地域型で相手が求める学習支援の大切さを感じ、地域に密着したサポートをしたいと思いました。eラーニングでの外国人の方もビデオなどからも子供たちへのサポートの大切さも感じました。 ・ワークショップでメンバーとコミュニケーションを取りながら行うことにより発見が増えた。</p>	
<p>一方通行の会話とにならないようにすること（注意して話をすること）どうしても自分で自分の『言葉の意味』を限定的にとらえがち！</p>	<p>再度、日本人は世界の中でもかなり特殊な民族であると考えさせられた。</p>	
<p>先ずは日本の抱える課題を認識できたこと。具体的に日本語を教える中で相手の発話を待つこと。</p>	<p>外国の人々と接する際に、各々の違いについて前向きに対応出来る様になっていると思います。</p>	
<p>・自分の考えの幅が広がった。 ・でも、この期間中「やさしい日本語で話す、説明する」ことが頭から離れなかった。考えの幅の広がりをやさしい日本語で話す際に多角的に物を見る（例）等して生かしていきたい。</p>	<p>・「井の中の蛙大海を知らず」の言葉通り具体的なコミュニケーションの取り方や相互理解等、少し見えてきたので支援がもう少し意図的に出来たら良いと思った。</p>	<p>視点の広がり、意欲向上</p>

10-7 研修終了時アンケート

終了時アンケートでは、研修の実施方法や回数などについて定量評価、また今後の改善のために必要な点について記述してもらった。

1. 成果

研修内容については全体的に満足を得ることができた。研修全体の回数や1回の長さ、運営方法についても満足を得ることができた。「グループワーク」への評価が高く、「対話の中で学びを深める」という本研修のコンセプトがよく理解されたことがうかがわれる。

2. 課題

昨年同様、今後取り入れた方が良いものとして、「外国人協力者と接する機会」を求める声が多く上がった。限られた時間数の中で、実際に外国人協力者との関わりの中で学びを深める機会をどのように組み込んでいくかが課題として挙げられる。

2019港区「日本語学習支援と文化理解を学ぶ講座」 終了時アンケート

		5	4	3	2	1	無回答	コメント
1	連続講座の内容はいかがでしたか。	11	3					
2	講座で文化理解と日本語学習支援の方法を学ぶことができましたか。	3	8	3				<ul style="list-style-type: none"> ・学びましたがまだ充分ではない。(評価3) ・学んだことをどう現場におとしこむかが課題(評価4)
3	外国人との交流やコミュニケーションについて、考えが深まりましたか。	8	5	1				
4	「多文化共生の地域づくり」について、考えが深まりましたか。	8	4	1	1			
5	受講前の期待に対していかがでしたか。	①期待通り 12		②期待と違った 1			1	
6	グループワークなどの活動はいかがでしたか。	10	3	1				
7	毎回、講座と宿題のふりかえりを書いたり話したりすることは学びの役に立ちましたか。	7	7					
8	全5回という回数はいかがでしたか。	①多い		②ちょうどいい 11		③少ない 3		<ul style="list-style-type: none"> ・advanced classが待たれます!(②) ・全10回 定着していないかと思うので。(③) ・全8回(③)
9	1回3時間という長さはいかがでしたか。	①長い		②ちょうどいい 13		③短い 1		<ul style="list-style-type: none"> ・短い5時間(③)
10	日本語学習支援と文化理解を学ぶために、どんな内容を講座に取り入れるといいと思いますか。	<p>日本語学習支援と文化理解を学ぶために、どんな内容を講座に取り入れるといいと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本に暮らす外国人の方々が生活する上での困難も知ることができるとよいと思う。 ・実際に参加している方(外国人)の意見・感想をもう少し伺いたいです。 ・各日本語教室での違いとメリットデメリットなど理解したうえで自分なりに考えたい ・ボランティアを始めた方向けのフォローアップ講座等、ボランティア同士のコミュニケーションができる様な機会があるとうれしいです。 ・実際に日本で暮らしている人の声(嬉しかったこと・困ったこと等)が入ると、イメージできて良いかと思えます。 ・レヌカの学びのような事例をもっと取り入れた方がよい。 ・第4回で体験した一文字書道や実際に外国人の方と対話したこと。 						
11	講座内容や運営に関し、良かった点、改善点、その他ご自由にコメントをお書きください。	<p>講座内容や運営に関し、良かった点、改善点、その他ご自由にコメントをお書きください。</p> <p>【構成・内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・是非、日本語教室に参加したいと思っているのですが、マインド的には「I'm ready!」ですが、日本語をおしえるにあたっての基本的なスキルを学ぶ場があればうれしいです。 ・「レヌカの学」は印象的でした。もう少し時間をかけていただいても良かったのでは無いですか。「やさしい日本語」についても更に時間をかけても良かったと思います。 ・外国の方と接する時間がもっとほしかった。 ・毎回ちがうテーマ・先生でとても勉強になりました。他の方と交流できたのも良かったです。 ・講座内容も運営もとても良かったと思う。現在すでにボランティアで活動されている方もこのような講座をうけたら良いと思う。ありがとうございました。 ・非常に「優しい」運営であったと思います。講師の方と対話出来る様式をもっと増やすと記憶に残りやすいと思います。(座学は忘れやすい) <p>【方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループワークはとても良かったと思います。 ・グループワークがとても良かった。自分の中での成長があったと思います。 ・グループワークをすることで、場の空気も内容も深かったです。4回で実際外国人の方にいらして実体験できたのも良かったです。この講座をきっかけに日本語学習支援のサポートが出来ればと思います。ありがとうございました。 ・2020に向けてできること区の計画などを教えてほしい。グループを毎回かえてくれるともっとよいかも。 ・上記の⑩と重複します。グループワークも楽しく面白かったです。講座に参加してとても良かったです。 ・中身の濃い講座内容で十分ついていけないのが申し訳なく思いました。グループワークももう少し頑張りました。時間的に余裕があればありがたいと思いました。 						

10-8 研修担当講師による担当回に対する評価

研修各回担当講師により担当回の講座について、前年度との参加者属性の異なりによる反応の違い、プログラムを変更したことによる違い等を記した。

第1回 「学習者の背景理解」 「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」

- ・ 1回目に関しては、基本的な内容は昨年度と同じであった。1回目は、参加者の反応が薄いという印象があり、こちらが伝えたいことが伝わっているのかどうか、また参加者のモチベーションが高いのかどうか、判断し兼ねた。
- ・ 昨年度では、担当回への評価として、私は以下のように記した。「文化理解（文化・多文化・多文化共生）に関して、「レヌカの学び」を通して、方法論的特性も加わり、それなりの理解を得たのではないかと思う。ただ時間的に制約されていることもあり、文化理解というものを、自分ごとさらには自らの生活・学習上のニーズにどれだけ引き付けられたのかに関しては、確認することは難しかった。」基本的には今年度も同様の印象を持っている。ただ今年度では、講師の一人一人が全体のプログラムのつながりをより意識し合っている様子が昨年以上に伝わってきて、第1回を担ったあとを託していける安心感があった。

第2回 「相互理解と学習支援のためのコミュニケーションの基礎」

- ・ プログラム構成上の大きな違いはないが、今回は台風による実施日の変更があったこと、参加者属性が変わったことをふまえ、扱う素材をよりその時その場所で参加者が身近に感じられるものに変更した。やさしい日本語による情報の伝え方とともに、区内の外国人に対する多言語情報など、情報元を紹介することができた。
- ・ 後半、相手の話を受け止めるというテーマ部分は前年度と同じ内容で実施した。特に地域による反応の違いはなかった。「対話がなぜ日本語学習支援につながるのか」という説明のあとに、今回は日本語教室の運営者や他地域の元学習者の方のすばらしい話を聴く機会があり、流れとして相乗効果があった。

第3回 「市民活動としての学習支援の方法とコミュニケーションのための日本語の特徴」

- ・ 前年度の参加者は、日本語教室での活動経験がある方が多く、今年度は募集条件からも活動経験がない方が多かった。その異なりから、「教室活動とリソースの紹介」に対する反応の違いが顕著だった。教室での活動経験がある方からは「具体的にイメージしやすい」という反応が得られたが、経験がない人には、学習者との活動のイメージが持ちにくい面があったと思われる。講座の中に、実際の学習者にも協力参加してもらい、参加者には学習者と共に活動を経験してもらった上で、教材・リソースの使い方や活動の展開のしかたについてディスカッションを深めたり追加の解説を広げたりするような設計が必要であろう。

第4回 「相互理解を深める地域日本語教室の実践」

- ・ 今年度は、担当回に外国人の方々に参加されるということが、講座の内容や流れを考える際に、最も検討を要した部分だった。また、皆さんとの打ち合わせの中で、全5回のつながりを参加者の方々に感じとっていただけることも重要と認識し、前回以上にその点を意識して講座を進めた。
- ・ まだ実際の活動に参加していない方が多いということで、外国人の方と一緒に活動する際に、相応の緊張もあると思ったが、見方を変えれば、「語り合えた」ことの喜びも大きいことと思ひ、段階をおって2つの活動を外国人協力者の方々としてもらった。結果として、第1回～第3回で参加者の皆さんがあれこれ考えてきたこと、学んできたことを十分に意識され、目の前の外国人一人一人に「向き合ってみる」ことができていたと思う。

第5回 「コミュニケーション・相互理解・日本語学習支援と「多文化共生の地域づくり」

- ・ 5回目は、昨年度から内容と方法を大幅に変え、教室見学のシェアと講座全体を通してのふりかえりを行った。この5回目は驚くほど質の高い講座になった。そのもっとも大きな要因は、1回目～4回目までの内容がきちんと積み重なっていたことと、育成すべき能力を可視化して提示したことによるものだと思う。最後のふりかえりでは、各回での重要キーワード（例：文化の学びなど）が普通に出てきていた。

10-9 研修全体についての外部事業評価委員からのコメントまとめ

- 昨年度の研修の成果や改善点を反映して、安定的な運営のもと一定の成果が出ていた。参加者個々の中に最終的に蓄積されたものが少なくなかったであろうことが、終了時アンケート等から見てとれる。
- 今年度までの研修実施を通して、大きな「型」としては1つの形を示すことができただろうと思われるので、要望の多かった「外国人住民との接点増」に向けた示唆の与え方、「(研究者ではなく)現場を知っている立場だからこそできる振り返り」の方法論検討など、ミクロな視点での改良までしていけると、さらにより研修モデルとすることができるのではないかと感じた。
- 講座内容の構成とプロセスが非常に素晴らしいものだった。
- 「共生という事は単なる仲が良いものではなく互いに尊重しながら接点を持つこと」だという事に気づいてもらった今回の研修は多文化共生や異文化理解を促すきっかけ作り、地域社会の構成員としての学習者の背景とニーズを理解し、日本語教室を「地域住民同士がつながる場」として機能させる為の大きな第一歩だと思う。
- 第5回に参加した。ふりかえりの質を高めるために、多くの準備としかけがあると感じたが、なかでも学習項目カードの活用は、学びが可視化できるという点で、とても効果的だと思った。
- 参加者ふりかえりデータのなかで、「外国人との接し方が変わった」「相互に学び合う大切さ」に言及している人が複数あり、意識変容につながる講座になっていたと感じた。

10-10 研修全体についての内部事業評価委員からのコメントまとめ

- 関係者が一堂に会し、プログラム・カリキュラムを作成し、前提としての「日本語教室のイメージ図」「地域多言語多文化教室のイメージ図」などについて検討を加えたことは大変意味があった。
- 昨年以上に内容・方法において「文化理解」や「相互学習」を促進するもので、「日本語教育人材の養成・研修の在り方（報告）」に記された「資質能力」の向上につながるものになっていた。
- 「学習者と向き合い、対話の中から、共に成長しようとする姿勢をもつ」という観点を提示できたと考ええる。
- 各回のプログラムの振り返り（省察）を全体で行っていくことの意味2年という時間の経過の中で、より浮びあがってきているように思う。
- 参加者が、「養成・研修報告」内で言及されているものを超えた、より幅広い視点での文化理解・相互学習に関して具体的な知識・技能・態度を育成できたのかどうか、特に知識・技能について確かなものが得られたのかどうか、継続的に効果検証する仕組みが必要ではないだろうか。

第4章

事業全体の 評価

11. 研修カリキュラム開発の工程

(2018年度に得たコメント)

11-1 委員コメント

- 検討の流れや内容について大きな問題はなかった。相互理解、共生、文化的視点等を軸にした研修カリキュラムのデザインや教材開発は、今後の日本社会に求められる地域づくりに必須のものであり、価値のある議論ができたと思う。
- 検討の流れや内容は適当だったと思う。以下の点がとくに良かった。
 - ・ コーディネーターの存在。時間をかけた丁寧な調査、準備、たたき台の作成、情報共有、相談のタイミング、集約等→それぞれに多忙な委員（講師）が、それなりに足並みをそろえ、カリキュラム作成に関わることが可能となった
 - ・ 時間をかけて「前提とする日本語教育実施体制図」「用語の定義」などがまず検討されたこと→自身が担当する回の内容を考える際にも、常に描く理想図を思い浮かべながら、全5回の中の1回であることを意識しながら準備を進めることができた。
 - ・ 主催の越谷市との連携→講座実施地域において、今後中心的存在となる市の職員（場合によっては、国際交流協会のスタッフや、日本語教室主催者かもしれない）のOJTであることを強く感じた。

一方、本研修カリキュラム（案）を採用して、研修カリキュラムが各地で実施されることを考えた時、どの工程、どの役割は「コピー」で良いもので、どの工程、どの役割は「オリジナル」であるべきか、最終的には示されている必要があるだろうと感じている。

- どのような社会づくりを目指すか、多文化共生や市民活動の考え方をふまえた上で、「日本語教育実施体制図」が練られ、前提として共有されたことが大変意義があった。コーディネーターが、関連資料やたたき台となる案を丹念に準備していたおかげで、深い議論ができた。越谷市職員にいらしていただき、直接、地域の状況や課題、担当者の思いなどを話していただけたことも重要だった。越谷ではコーディネーターが不在で、「日本語教育実施体制図」で想定されている枠組みの前提がない状況の中で、今回の研修でできることはどこまでなのか考えて、ある種の矛盾も覚悟しながら臨むことができた。
- コーディネーターを中心に、関係者が一堂に会し、プログラム・カリキュラムの作成に向けて、前提としての「日本語教室のイメージ図」「地域多言語多文化教室のイメージ図」などについて検討を加えたことは意味があったと思う。また文化庁が提示している「日本語学習支援者に望まれる資質・能力」に縛られないカリキュラム開発をめざすことも視野に入れていることを確認したことも意味があったと思う。

11-2 コーディネーターコメント

- 参加者や評価委員による評価を見る限り、研修プログラム実施に至る検討工程は概ね適切であったと考えられる。一方、委員会での討議内容に合わせた調査や資料作成に多大な時間を要した。例えば、既存の研修に関する調査など、ふりかえれば、もっと簡単に済ませてよかったのではないかと感じる点もあるが、事前の判断は困難であった。また、参加者の自己評価やふりかえりのための教材（用紙）は研修の検証データ収集のツールでもあり、質・量の両面について委員会での入念な検討が必要であったが、時間や委員への負担の問題で、主にコーディネーターの判断で仕上げた。その結果、研修の中では使い切れないものがあつた。

- 検討の流れや内容は概ね適当であったと思う。企画当初は教育課程検討会議を2回開き、各回にどのような項目を盛り込めばいいのか、複数の講師の実践を持ち寄り検討することがこれまでの各講師独自の研修内容を超え、より良い研修を作るものになるのではないかと考えていたが、実際は時間的余裕がなく、そこまですることはできなかった。しかし、各回担当講師がコーディネーターと綿密な打ち合わせを重ねたことで、全回にわたってブレない内容となった。最終回の学習支援者集め、その後の教室訪問などを考える上で、研修実施前にもう少し各既存教室とコーディネーターがコンタクトをとる必要があったように思う。1つの教室にだけお願いをするのではなく、いくつかの教室に分けてお願いをするなどして負担感を減らすことを考える必要があった。

12. 研修の普及に向けて

12-1 研修プログラムを他地域で実施するための提案

第1回

私の回では「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」について、「レヌカの学び」を活用して確認していったわけだが、「文化とは、多文化とは、多文化共生とは」に関してはある種の基本理念の部分なので、地域に応じて内容が大きく変化することは考えられない。ただ「レヌカの学び」などの方法は多様である。今回は時間的制約から「レヌカの学び」のみを活用したが、文化理解へのアプローチの多様性を3時間~6時間ほど使ってプログラム化することも面白いかもしれない。

第2回

やさしい日本語に関しては、単にことばを機械的に置き換えれば良い、言い換えの技術を身につければ良いと思われぬように提示できると良いと思う。地域の共通言語として必要なやさしい日本語は可変的であり、その出発点は相手を知り自分を伝えようという気持ちであることが伝えられれば、研修の実施場所・実施時期に応じて様々な素材を使って行うことができるだろうと思う。

「聴く・待つ」など、相手の話を受け止める姿勢と技術は、日本語コミュニケーション支援のためだけでなく、相互学習において自身が相手から多くを学ぶためにも必要なものである。その姿勢と技術の価値を学ぶためには、関われ方の違いを体験できるように研修内容を工夫するとよい。

第3回

担当回（第3回）と、第4回を入れ替え、先に、学習者との交流活動の実践を行った上で、教材等についての活用法、日本語の構造についての講座を配置したほうが、流れがよい。さらに、できることなら、教材についての回も、前半を学習者との活動実践、後半を振り返りと教材等についての解説・検討にすると効果が高まるのではないかと。

日本語学習経験者で、かつ、支援者としての経験もある人の体験談も含めたワークショップの回があってもいいのではないかと。ボランティアの経験がない人を対象としていけば、なおさら絶対に学習者の方と接する経験をしながら学んだほうがいいし、ボランティア経験がある人でも、それは意味があるのではないかと。

第4回

日本語教室に集う（とくに外国人の）方々の、より日常の声を伝える方法（今回は撮影したインタビュー動画を利用）を検討していただければと思う。

第5回

5回目はふりかえりをしっかりやるということを意識的に行うとよい。そのために、4回目までの各自の

学びが積み重なるような記録と、記憶を呼び覚ます仕掛けが必要だと思う。今回特によかったのは、知識・技能・態度のカード。あのカードがあることで、常に軸となる「育成すべき能力」に立ち返って考えることができた。

12-2 研修プログラム全体について他地域で展開する際に大事にしてもらいたいこと

- 言語を切り離して考えない。教えることではなく学ぶことに視点を持って欲しい。そのためには、研修を設計する側が知識注入型・日本語教授型の支援者の要望に対して、きちんとした思想や方向性を持って、ぶれないように対応することが必要。
- 地域の状況に即して、多様な方法からの選択もしくは創造をしていく余裕と柔軟性そして主体性がプログラムづくりには求められる。特定の教材や方法で実践を縛ることは実践のダイナミズムにマイナスに働く。常に、基本原理を確認しつつ、地域の状況つまりは学習者の状況に即したプログラムづくりに向けた選択制・柔軟性・創造性が重要だと思う。
- 「市民活動としての日本語学習支援の核が「対話」であり、対話を通して相互理解・文化理解が深まり、とも学び合うことができること、そしてそしてそれが、ともに社会をつくっていく出発点となる」という考え方、このような考え方が、このCINGA研修プログラムの柱のひとつとしたら、そのような考えを具体化するための「形」は、地域によってさまざまなバリエーションがあってもいい。大切なのは、その地域でかかわる方々を交えて、準備段階でディスカッションを重ねられるようにすること。その地域での、現在地域参画を果たしているかつての「日本語学習経験者」の方にも、一緒にかかわってもらえるとよいのではないか。「対話型」の教室を展開するためには、その教室を設計するプロセス自体も（外国人住民を含めた関係者同士の）対話を主軸に展開していくことが大切なのは。
- 「熱心な自治体職員」「コーディネーター」「講師」がそろうことが肝要だと思う。話し合いを重ねながら、研修を実施に導いていく中で、その地域の「自治体職員」「コーディネーター」（初回は見習い参加でも）が育っていくことが、その後の持続につながると思う。外部の人間では知りえない、想像しえない地域の空気のようなものがあり、それを知る方々が、研修実施のプロ（今回でいえば、本事業コーディネーター）と協働することが必要だと思う。
- 講座と既存の教室との関係性のもちかた、講座終了後の展開がとても大事だと思う。そこを初期の段階から誰が担うのかをはっきりさせておかないと、「いい講座だったけど・・・」で終わってしまう気がする
- 研修を形成するエッセンスには「どの地域でも変わらず大切なこと」と「その地域ならではのこと」とがあるだろうと思われる、前者をベースとしたうえで、そのベースの中に後者の内容を状況に応じて最適なかたちで組み込んでいくことができれば、理論上は、ある程度同じぐらいの成果につながる研修プログラムとできるのではないかと考える。今回の研修事業で形成したモデルケースという「方法」の中に、大切にしたい、参加者に伝えるべき「理念」がきちんと見えるようになっていること。ここがしっかりしていれば、あとは、いい意味での「違い」としてのその人らしさ、その地域らしさは出てよいと思う。

- このカリキュラムを他の地域で活用する為には先ず、その地域の学習者の背景理解と状況把握が最も重要なものになるのではないかと思う。地域それぞれ、学習者の在留資格や置かれている現状によってニーズも異なるのでその地域の特徴をよく把握した上で内容の変更に能動的に対応する必要があると思う。
- 参加者のアンケートに、実際の学習者と接する時間がもっと欲しかったという意見も多かったので他の地域ではこのような体験時間を少し増やしてみても良いかと思う。大きな流れは維持したまま、参加者の理解を深めるためカリキュラムの順番を変えたり、時間配分を変えたり、外国籍支援者を取り入れることでより良い効果が得られるかもしれない。
- 全5回の構成がしっかり組み立てられているので、他地域にも共有できればいいが、その際大事なのは「理念」と「目的」が共有されること。地域では、また相互理解よりも言語学習に重きがおかれる状況だと思うので、なおさら、どうやるかだけでなく、何のために何を目指してやるかまで読み取れる形にすることが大事だと感じる。

おわりに

私たちが取り組んだ研修は、各分野で日本を代表する専門家が、2年間にわたり、対話・議論・実践・ふりかえりを通してつくりあげたものです。研修時間の制約がある中で、取り組める内容もまた限られますが、少なくともその限られた時間の中で学習支援者を育成するという観点からは、現段階でこれ以上は考えられない質の高い研修です（もちろん、私たち自身は今後も改善を重ねさらなる高みを目指して取り組んでいきます）。ここにまとめられている実践について、細部はもちろん各地域の実情に応じて柔軟に入れ替えることが求められますが、軸となる思想や姿勢は、どこでやっても変わるものではありません。ですから、この研修は「どんな目的で」「何を学ぶことを目指しているのか」という、それぞれの研修・活動の本質に関わることに特に留意してもらえるととてもうれしく思います。

教えることと学ぶことは、一部は重なることがありますが、基本的には異なるものです。日本語学習支援において大切なことは、いかに教えるかということではなく、学習者がいかによく学ぶかということです。教育の専門家であれば、このことは誰でも当たり前認識しています。ところが、多くの地域では、日本語学習支援者に対して「日本語の教え方」というテーマで研修が行われています。もし、みなさんの周りに、「日本語の教え方講座」を喜んでやるような「(日本語)教育の専門家」がいたとしたら、そのような「アヤシゲな専門家」には、十分に気をつけてください。

すでに報告書中で何度も触れていますが、言語は、社会や文化から切り離して学ぶことはできません。言語と文化は一体となっているもので、日本語を学ぶことは、同時に文化を学ぶことでもあります。ですが私たちは、日本語学習支援というと、つつい日本語のことだけに目がはいてしまいます。そこで一度立ち止まり、日本語を学ぶこととはどういうことなのかを改めて考えることをしてほしいと思います。

私たちは、日々いろいろなことを「経験を通して」、またその経験を「ふりかえりながら」学んでいます。とはいえ、私たちはそのことをあまり意識していません。よりよく学ぶためには「ふりかえり」がとても重要な役割を果たします。この研修の具体的な活動を援用するときに、ふりかえりを端折ってしまうと、ほとんど意味のない研修になってしまうということは、十分に留意されるべきことです。

そして、学びというのは相互性を持っているものです。日本語でコミュニケーションを行いながら、コミュニケーションや文化を学んだり、相手のことをよく知ったり、また違いを認識したり、共に社会で生きていくための関わり方に気づいたりします。それは、学習者と支援者双方に起きることです。決して、学ぶのは学習者だけではないということも、大切にしてほしい本質的な視点です。

日本社会にますます外国人が増加したとき、その外国人たちと日本社会をつなぎ、外国人の社会統合を果たす役割を担うのは、地域の日本語学習支援の場です。そこで活躍する学習支援者の皆さんの取り組みは、日本社会のこれからを創っていく営みだと言っても過言ではありません。よりよい社会を次世代に引き継ぐために、皆さんの役割はなくてはならないものです。だからこそ、質の高い学習支援というのは、この社会のために必須のものです。学習支援というのは地味な仕事かもしれませんが、その積み重ねが、豊かな土壌となり、よりよい地域社会を次世代に引き継ぐことにつながっていくことになると思います。この研修のあり方と、そしてこの報告書が、多くの地域のこれからを創ることに少しでも寄与できることを強く願っています。

委員長 神吉 宇一

信頼関係、時間、労力、思い、配慮——良い研修を作るために必要なものを5つ挙げると、こうなるでしょうか。

「生活者としての外国人」に対する日本語教育（地域日本語教育）をめぐることは、従来からさまざまな課題が指摘されてきました。それらの課題を踏まえ、「養成・研修報告」において日本語教育に関わる人材のカテゴリーと役割が示されたとき、地域日本語教育という分野が一歩前進するという期待を感じました。同時に、専門性重視の波が押し寄せることで「市民が参加する良さ」「地域づくりのための場」という価値がないがしろにされていくのではないかと、という危機感も感じました。私達、CINGA 日本語教育コーディネーターは、その価値をわかりやすい形で多くの人に伝え、市民として地域日本語教室等の場に参画する人を増やしたいとの思いで、今回の研修カリキュラム開発事業を行いました。

開発にあたっては、地域日本語教育の実践や育成に経験豊富な委員を選び、研修も担当してもらいました。そして、教育課程の検討から研修実施、事業評価までをとおして、多くの議論を行いました。委員メンバーとは、地域日本語教育の場における「市民参加」「交流」「地域づくり」といった基本的な価値を当初より共有していましたが、1本の研修を軸のとおったものにするためには、設計者同士で暗黙知を言語化し、共有するというプロセスがとても大切でした。複数回の連続講座では、各テーマを担当する講師の力が重要なのももちろんですが、各回の内容を活かすために全体コーディネートの重要性と責任はとても大きいものです。良いカリキュラム、研修をつくるために、ときには言いにくいことも勇気を持って言わなければなりません。それぞれが数人分の思いと力とことばをお持ちの委員に恵まれたおかげで、コーディネーターとしてとても鍛えられました。また、事業評価においては様々な異なる立場の委員に参画いただいたことで、開発と実施の中心には気づかない視点をいただくことができ、第三者の目の重要性を再認識しました。

本研修カリキュラムでは、「相互理解」「協働」「ふりかえり」のプロセスを大切にしています。研修を通じてその価値を参加者に伝えられるよう、開発事業の運営においても、その実践を心がけました。これらのプロセスは、ときに「効率」とは相容れない場合もありますが、委員からは全面的な協力が得られました。本事業の成果は、担当回以外の研修にも足を運んで担当回の準備や研修評価に活かす等、委員全員の「よりよい地域づくり」に対する思い入れと意欲的な関わりの上に得られたものです。

日本語学習支援者研修の参加者の出口は、地域の市民活動です。ですから、研修実施にあたっては、その地域の担当者や関係者との協働が欠かせません。本事業で研修を実施した2地域の自治体や国際交流協会の担当者とも綿密な連携とコミュニケーションを図りました。カリキュラム開発事業としての研修という位置づけで、ご無理を申し上げたこともあり、各地域の協力なしに、この事業はありませんでした。この場を借りてご協力に感謝申し上げます。

最後に、日本語学習支援者に望まれる「資質・能力」には、以下の項目が含まれます：「わかりやすく伝えるために自身の日本語を調整する」「耳を傾けるとともに自身の発話を調整する」という技能、「背景や現状を理解しようとする」「言語や文化を尊重し、対等な立場で接しようとする」「良好な人間関係を築こうとする」「異なる考えや価値観を持つ他者と協働できる柔軟性を持つ」という態度。本事業をとおして、私達コーディネーター自身、これらの「資質・能力」が大きく向上したと自己評価しています。もちろん、相手は日本語学習者ではなく、事業に関わってくださった委員や各地域の担当者、そして研修参加者です。つまるところ、これらの「資質・能力」は社会生活の様々な場面で不可欠であると言えるでしょう。こうした力を育む「日本語学習支援者研修」が、よりよい社会づくりにつながる入り口となることを確信するのです。

事業コーディネーター 萬浪 絵理、西山 陽子

私たち NPO 法人国際活動市民中心 (CINGA) は、地域日本語教室・地域日本語教育のあり方について 20 年近く、地域の実践現場と研究会との往還の中で実践研究活動を行ってきました。この度の「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業」もその延長線上にあります。

私たちの活動の中心にあるのは、「地域日本語教室は何を目指すのか」という問いです。そして、本事業を通して、関わったすべての人びとと共にこの問いを考えながら活動を展開しました。地域日本語教室は「多文化・多言語の接触・交流の水際」であり、外国人市民と日本人市民が地域の構成員として対等な関係で地域参加をする継続的な活動です。

この地域日本語教室活動をとおして、外国人市民、日本人市民、専門職、自治体や国際交流協会職員、その他この活動に参加するすべての人びとが、私たちはどのような地域社会を創っていきたいのか、それを問い、考え続けること重要なのではないかと思います。今回開発した「日本語学習支援者研修カリキュラム」がそのきっかけになれば幸いです。

最後に、この事業に関わってくださったすべてのみなさま、とりわけ埼玉県越谷市、そして東京都港区のみなさまに厚く御礼申し上げます。

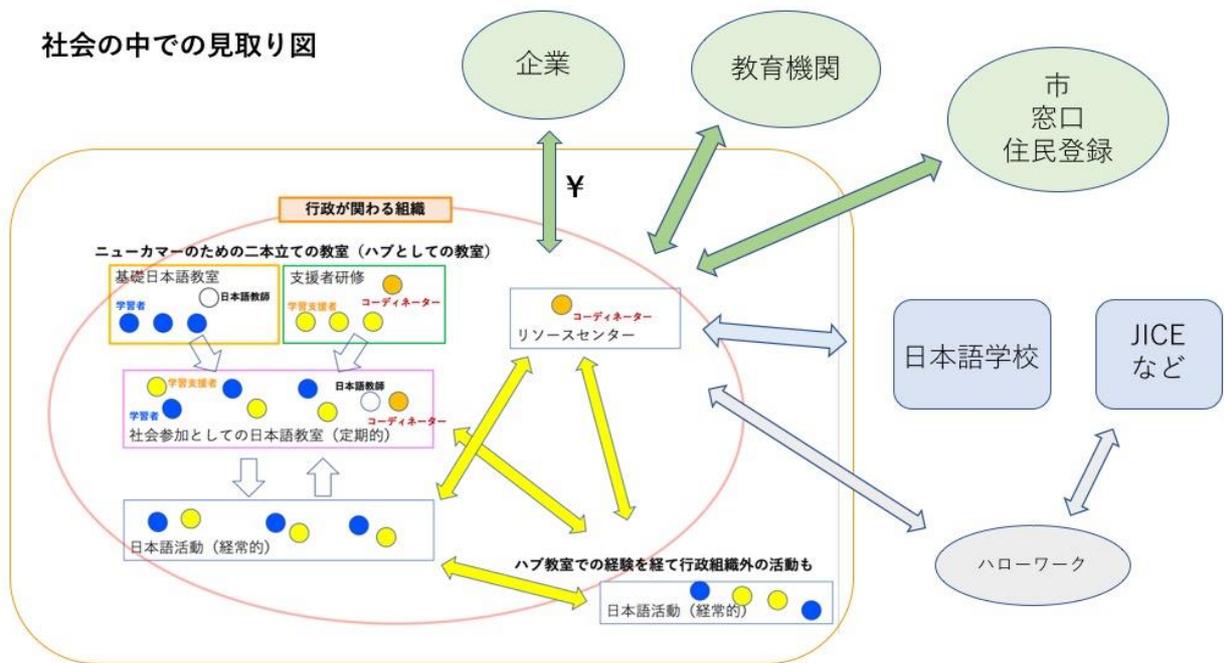
特定非営利活動法人国際活動市民中心 代表理事 黒澤玉夫

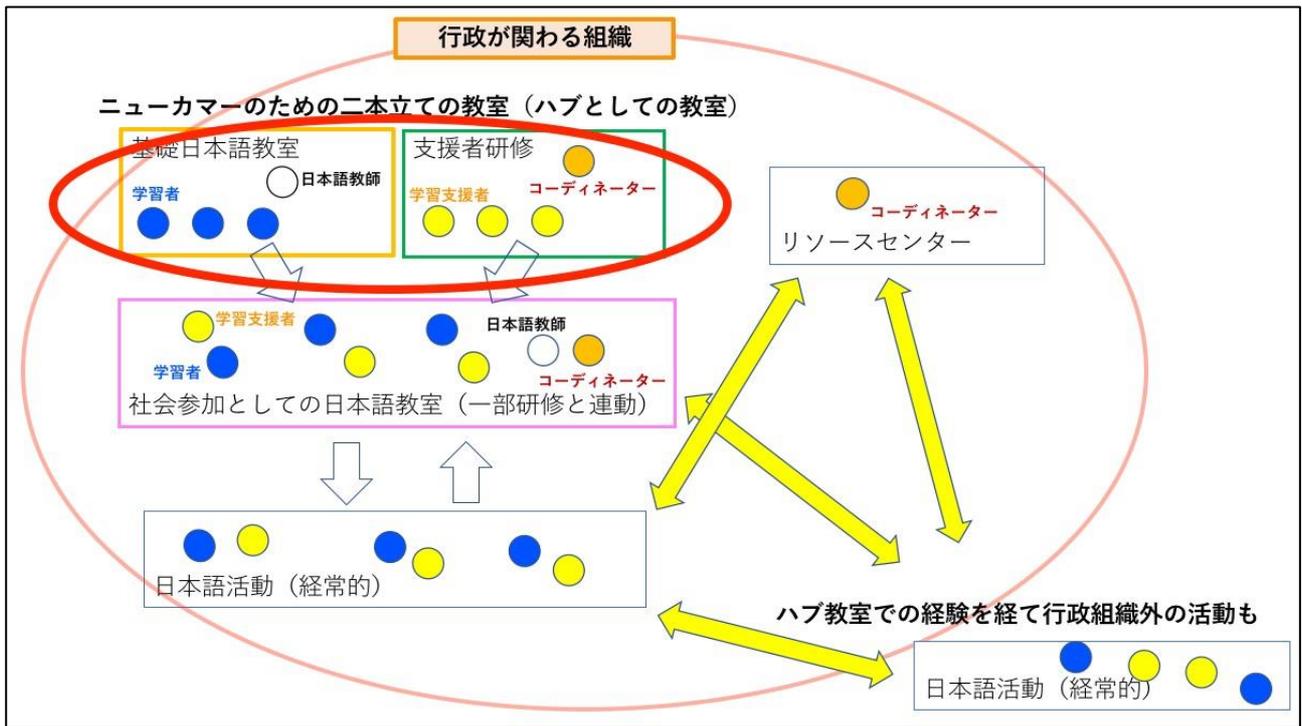
資料

20190811事務局配信 資料3
CINGA日本語学習支援者研修
カリキュラム開発事業

研修が前提とする日本語教育実施体制図

社会の中での見取り図





基礎日本語教室



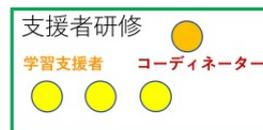
○日本語教師の役割

- ・有償で責任を持って教授活動を行う
- ・生活者に必要な日本語について理解し、プログラムを考える
- ・学習者に対して日本語を体系的に教えるとともに、自律学習の方法を教える

【教室の設計】

- ・ニューカマー対象、全50hの想定。
(集中的か週2、3回かは未定)

支援者研修

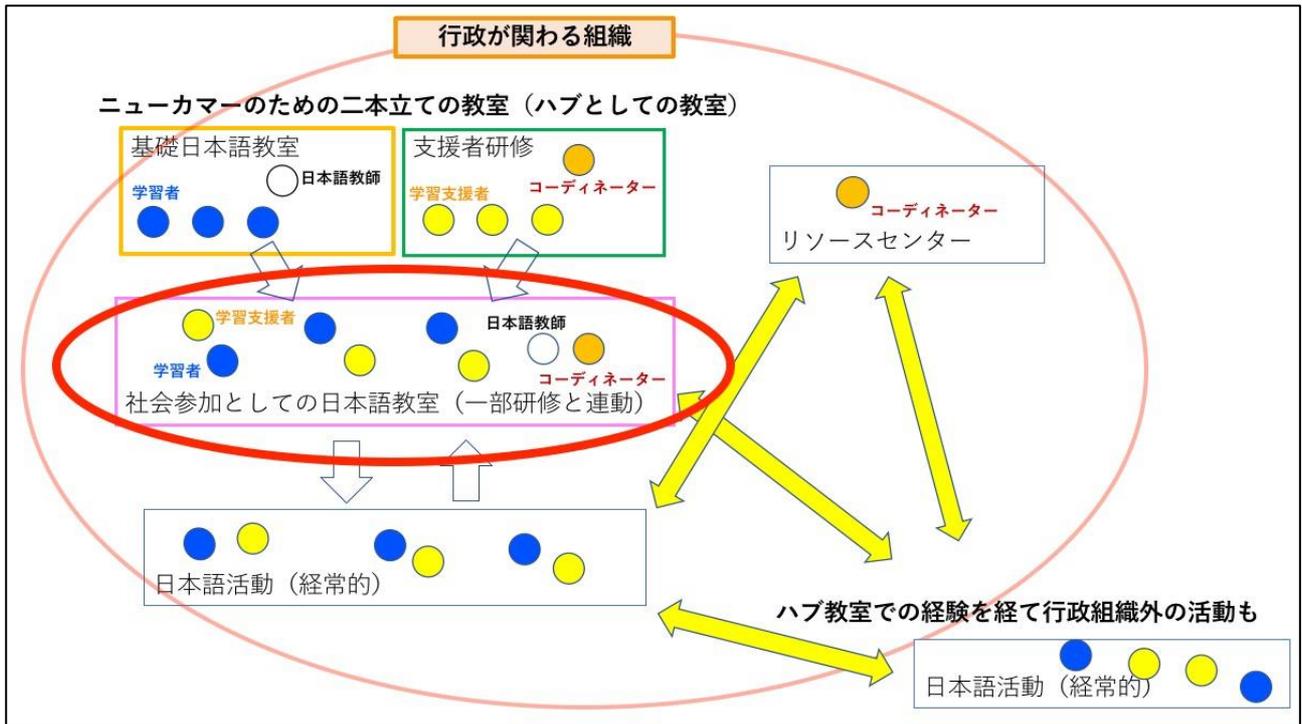


●コーディネーターの役割

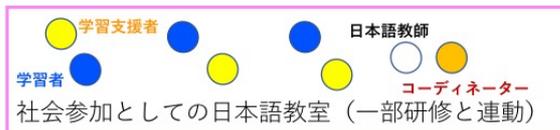
- ・研修プログラムを企画・実施する
- ・ファシリテーター

【研修の設計】

- ・支援者研修はOJTとして「社会参加としての日本語教室」と連動する。
- ・全8回の想定。（内容は別途）



社会参加としての日本語教室



●コーディネーターの役割

- ・研修プログラムを企画・実施する。体験をことばにつなげるプログラム（枠組み）を作る。
- ・ファシリテーター

○日本語教師の役割

- ・専門性を要する質問に対処する。
- *また、社会参加としての日本語教室に参加することで、ファシリテーションを学び、コーディネーターとして支援者研修を担当できるようになる。

●学習支援者の役割

- ・学習者が自ら自分の伝えたいことを調べ話すことを伝わりやすいこととする手助けをする。

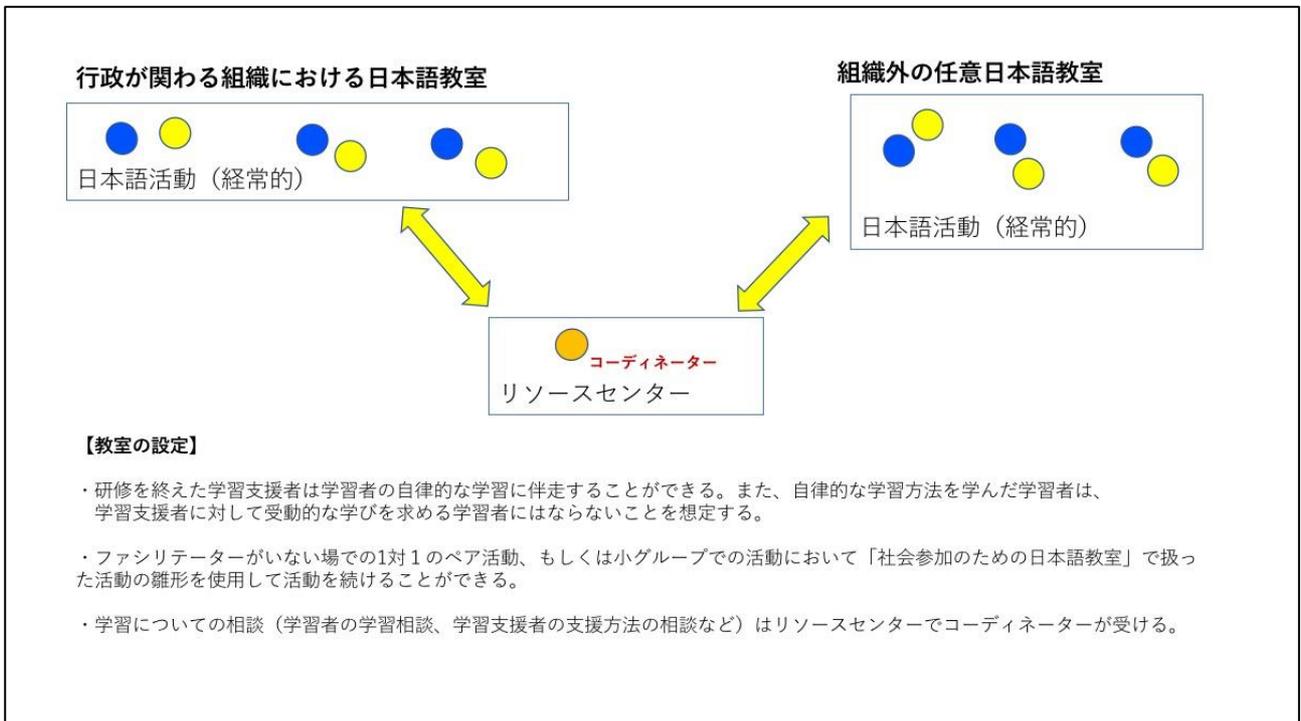
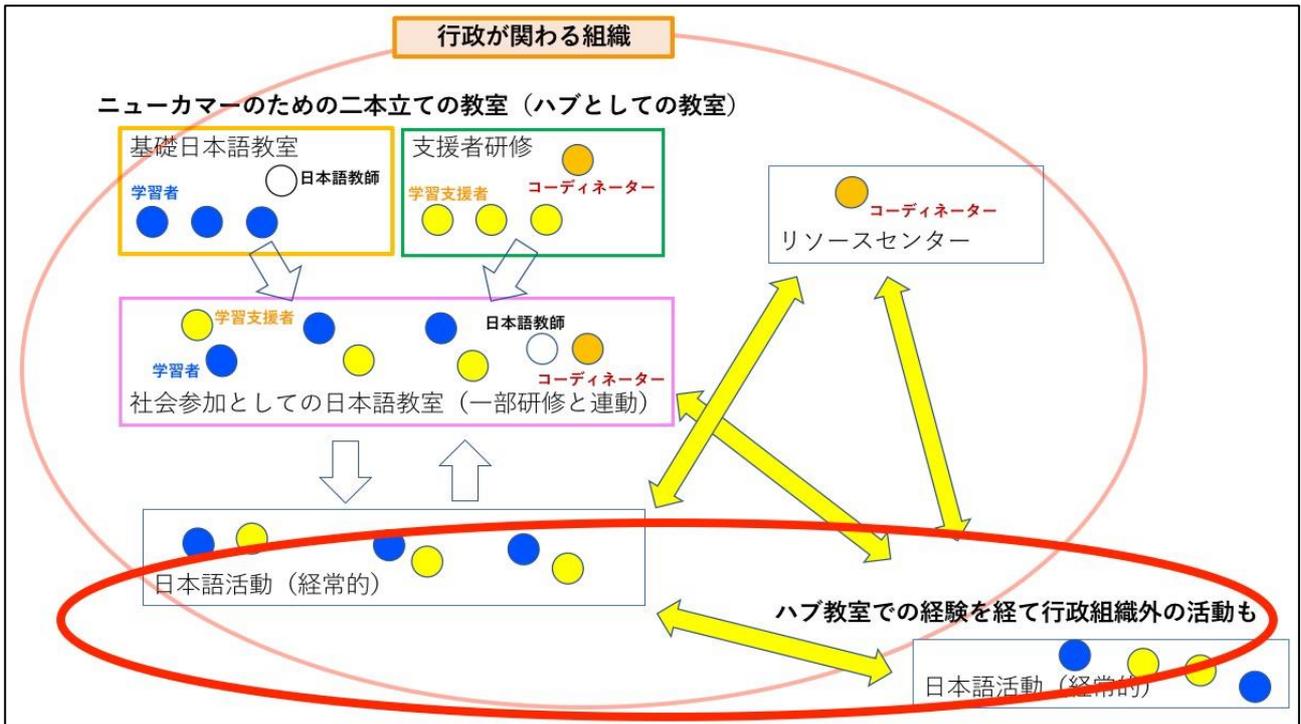
●学習者の役割

- ・自らの伝えたい内容を相手に伝えるための自律的な学習方法を実践的に学ぶとともに、学習支援者が言語調整能力を身につけることを助ける。

【教室の設計】

- ・「基礎日本語教室」を終了した学習者と「支援者研修」を終了した支援者がOJTで活動の方法を学ぶ場として設定する。学習者は自律的に学ぶことへの自信をつけ、学習支援者は支援方法を体験する。プログラム内ではあらかじめ語彙や文型を設定しない。（その後の自律学習支援につなげるため）

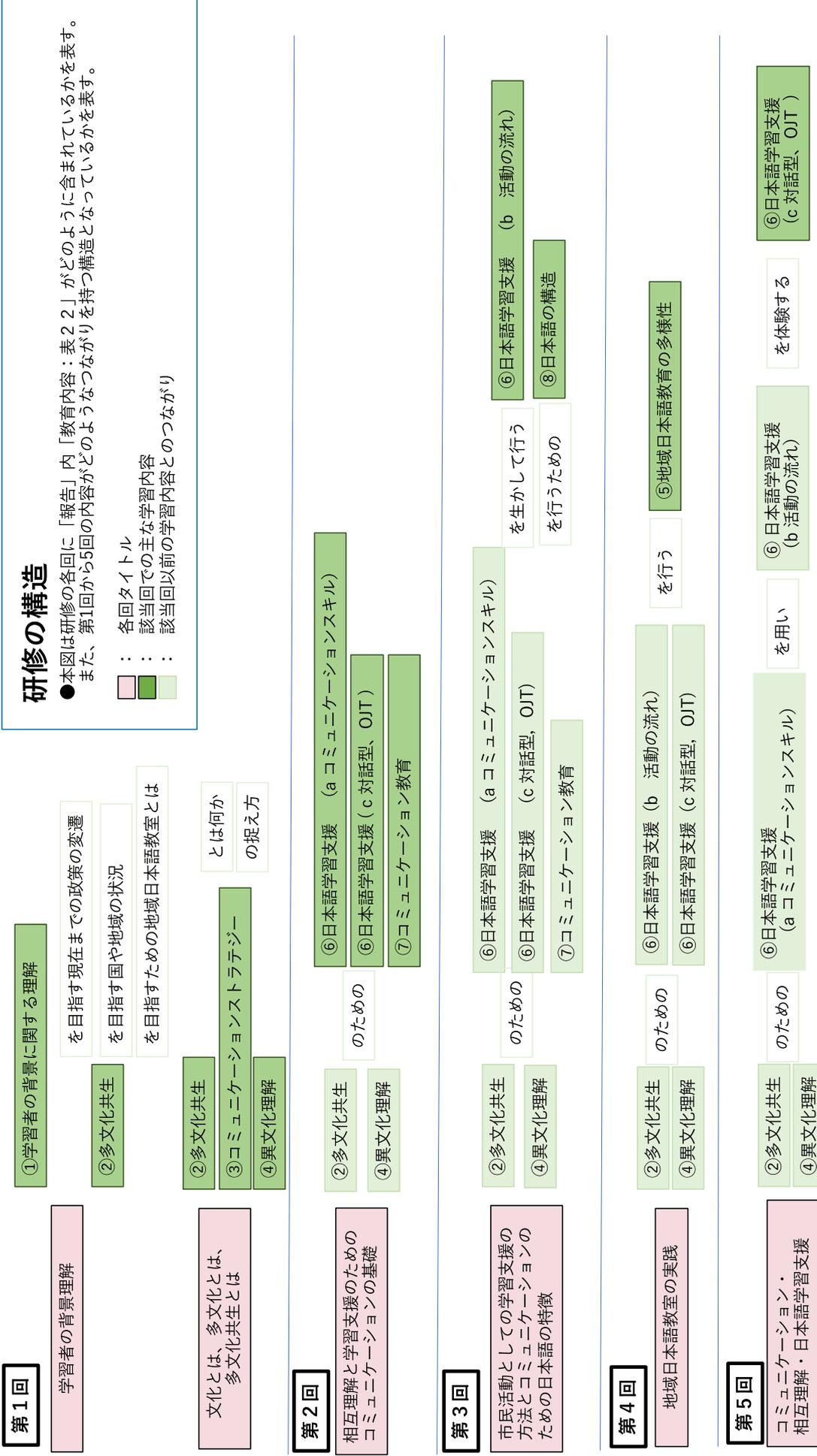
- ・参加者は、学習支援者になることを希望する人だけでなく、企業関係者、行政関係者など外国人とどう接すれば良いかを知りたい人も参加可能とする。
- *学習支援者となることを希望しない場合は、「多文化共生・やさしい日本語」のみ学んでもらった後、社会参加としての日本語教室に参加・体験



取組み名称	対象	目標	回数・時間	社会・文化・地域		言語と社会		言語と教育			言語	(9) その他
				(1) 学習者の背景理解	(2) 多文化共生	(3) コミュニケーションストラテジー	(4) 異文化理解	(5) 地域日本語教育の多様性	(6a) コミュニケーションスキル	(6b) 流れ/リソース		
1 [地名] 版 地域日本語教師養成講座	地域で活動する有資格者と一般市民	地域における多様な学習ニーズに対応できる日本語教師を輩出する	28回×1.5H									
2 日本語サポーター養成講座	在住外国人と支援したい人と役場	国人支援のネットワーク作りと支援者になるための呼びかけと養成	4回×2H									
3 OJTによる日本語ボランティアの養成	誰でも。外国人も可	① 日本語ボランティア希望者の掘り起し ② OJTの手法を活用した、実地訓練による日本語ボランティアの養成 ③ 養成したボランティアを地域の日本語教室につなぐ ④ 外国人住民を理解する日本人を地域に増やす	11回×2H + 3回×6H									
4 新基本講座/対話の達人講座 /これは使える活動素材講座等	ボランティア希望者 ボランティア経験者	対話を中心とする日本語活動に欠かせない知識とスキルの習得。	3回×2H 3回×2H 8回×3H									
5 既存の日本語教室における日本語講座及び日本語ボランティアスキルアップ研修会	日本語教室に通う学習者及び日本語ボランティア	日本語ボランティアのスキルアップやモチベーションの向上を図り、今後の日本語教室の活動の拡充につなげる。	1回×5H (5期) 3H OJT									
6 [地名] ってどんな街? みんなで知ろう [地名] ! (日本語ボランティア編)	日本語母語話者と日本語能力上級者	外国人市民とともに〇〇市について知識を深め、地域住民同士としての意識を醸成する。	6回×1H 5回×2H									

取り組み名称	対象	目標	回数・時間	社会・文化・地域					言語と社会					言語と教育					言語
				(1) 学習者の背景理解	(2) 多文化共生	(3) コミュニケーションステージ	(4) 異文化理解	(5) 地域日本語教育の多様性	(6a) コミュニケーションスキル	(6b) 流れ/リソース	(6c) 学習活動/OJT	(7) コミュニケーション教育	(8) 日本語の構造	(9) その他					
7 日本語学習支援人材の育成	未経験者・経験者	日本語教室立ち上げを支援し、学習環境の整備につなげる。また日本語指導や教室運営などの研修を既存のボランティアに対して行うことで各地域の日本語教室の質を高め、持続可能なものとする。	全10回×2ヶ所																
8 日本語初心学習者支援講習会	識字・日本語教室の学習支援者	初めて日本語を学ぶ学習者への学習支援方法の基礎を身につける。	3回×2H 3回×2H																
9 参加型ワークショップとOJTによる日本語教育の担い手育成	日本語教育・多文化共生に関心のある市民	①外国人住民を対等な市民としてとらえ、寄り添うこと ②外国人の声や様子を知ること、学習内容に反映できること ③常に学びの姿勢を忘れず自身の活動を改善できること ・日本語教育に取り組みボランティアの多文化共生・国際理解の意識向上を図る	WS4回×2H、OJT3回×12H																
10 学び合い、人とつながる日本語活動を支える日本語ボランティア養成講座	指導者・補助者 日本語ボランティア活動に関心のある人 日本語教室の外国人参加者	人材の拡充、多様なニーズに対応できる指導者の育成	10回×11H																
11 地域の外国人と日本人が相互に学び合うための講座	新規希望者、経験者	ブラッシュアップ/若い人の参入促進	11回×3H																
12 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施「あわてないで教えよう2016」	日本語指導活動に興味がある一般市町村民	系統立てて日本語を学んでいない外国人に対する教え方のテクニックを異文化理解を元に学び、地域の日本語教室で活かす	10回×3H																
13 フォロワーアップ研修	日本語を話す支援希望者、経験者	日本語教室の拡充、質の向上	1回×4H、 2回×4H																

No.	取り組み名称	対象	目標	回数・時間	社会・文化・地域			言語と社会			言語と教育			言語	(9)
					(1) 学習者の背景理解	(2) 多文化共生	(3) コミュニケーションストラテジー	(4) 異文化理解	(5) 地域日本語教育の多様性	(6a) コミュニケーションスキル	(6b) 流れ/リソース	(6c) 学習活動/練習 OJT	(7) コミュニケーション教育		
14	多文化社会における日本語教育のための「ことば」の学習	地域住民	多文化化する日本社会における地域の日本語教育の必要性を周知し、地域に埋もれた人材を発掘し、日本語を通じて外国人と日本社会をつなぐ人材を育成する。	10回×12H											
15	新しい能力を身に付けようー問題解決の方法と、クラス形式への挑戦	10日でもいいので、日本語ボランティア経験のある人	問題解決能力とクラス形式対応能力をつける	10回×12H											
16	日本語学習支援者研修	日本語学習支援者（経験者、未経験者）	支援者確保と能力向上	8回×3H 2回×1.5H 1回×1H											
17	日本語教育ボランティア人材・組織の育成	市内在住在勤の及び近隣市町村ボランティア、一般市民	・他地域の取り組みを知る。 ・ボランティア組織の運営方法についても知識を深める。 ・既存のボランティアのレベルが上がることで、新規ボランティアへのより良い波及効果も狙う	4回×3H											
18	日本語指導ボランティアの日本語指導力向上	市内在住在勤の及び近隣市町村ボランティア、一般市民	・既存、新規の日本語指導ボランティア双方が学べる日本語教授法の学習機会を提供。 ・通年定期的開催。ボランティアが抱えた疑問や悩みの相談の場とする。	7回×2H 2回×3H											
19	日本語教室活性化フォローアップ講座	活動希望者、経験者	スキルアップ/新たなボランティア発掘	12回×2H											
20	地域日本語サポーター養成研修	活動希望者	『今すぐ使える熊本日本語』改訂版を使って教えることができ、また地域の多文化共生意識を高めることのできる人材を養成する	13回×2H											



文化庁委託日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発事業
CINGA 日本語学習支援者に対する研修カリキュラム開発事業
報告書

2020年3月発行

発行 特定非営利活動法人 国際活動市民中心
CINGA (Citizen's Network for Global Activities)
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 2-3 神田古書センタービル 6F
TEL 03-6261-6225
FAX 03-6261-6280 (共有)
E-mail info@cinga.or.jp
URL <http://www.cinga.or.jp/>

編集 西山 陽子、萬浪 絵理